

のみならず。よろづ折にふれたるの歌。姿詞直にして。

又しるすにこと葉なしといへども。日比道にしたしき兼愷。

侯の仰をもことそへて。ことくはへよかしとの旨。せち

なるにより。つたなきをかへりみず。祐喬畢詞

を述くはふるも。おほけなきことにこそ。

蘭 斎

（74・オ）

（ウ）

（一九八八年一月十一日受理）

若松奥之亟長親	一首	安山代右衛門親博妻	二首
谷山孫兵衛智昭	三十三首	町川井田善右衛門義智	十六首
関善左衛門正盈	一首	同川井田角兵衛義直	八首
永野助右衛門祐倫	一首	町川井田角兵衛義実	二首
肥後権左衛門盛徳	二首	同川井田善助義陳	八首
洲之上岩衛門季敦	一首	同宮田三右衛門祐壽	二首
末野八太郎兼道	七首	同川井田善五郎義徐	一首
石川藤左衛門義但	一首	同川井田代八義近	一首
安山作十郎親直	四十六首	読人不知	百四十五首
音堅用之進資秘	一首		
梅本勘次郎実方	二首		
右 百十五人			
天保六年乙未十二月		伊集院 兼愷 上	

浪のもくづは。さきにわが

公の仰をうけたまはりて。伊集院兼愷の撰び
集る所なり。兼愷このごろ。いともかしこき

飛鳥井大納言雅光卿のみもとにさゝげ^て。^れ

これねぎまつる事どもありしに。

飛鳥井卿つらく見そなはし給ひ。げにも兼愷

が。あまた年歌の道をな[□]ひまねび。こゝろを深く

染けるほども。此巻くの圍に顕れて。いとく感じ
給ふるとの仰どもかうふりしは。またくはいとげに
たりといふべけれ。かゝる事をも。後みむ人に
しらしめむため。いさゝか巻のしりへにかきそへ
侍るも。またこれ
公の仰に従がふものなり。

天保九年 戌 正月

藤原 氏輔 謹書

そもく此なみのもくづと名付しやまと歌は。大隅
国垂みてふうらにうちよせて。はまのま砂かずつ
もりぬる玉藻とぞ。図ればおほやけも捨給ぬ。かし
こき仰をうけ給り。伊集院兼愷。ちゞにみがきあつめ
たるよしにして。今更心にくもるきずもあらじかし。
まして飛鳥井の卿。みそなはし給へるをや。誠に
かねよし。此道にふけるこゝろざしのま心より。おなしく
心をよするの輩。高もい^図しきも。うるはしき名
を。此ふみにあらはせり。是^図ん正木のかづらながく
つたへん。其所のたからともい^図べし。巻々ひらきみるに。
ことのおもむきは。もとより序跋にくまなし。しか

町田大雅実裕	四首	奥玄岱秀門	一首	町田十郎左衛門実芳	一首	黒木四郎太経福	一首
伊集院隠山兼迢	十一首	伊地知武左衛門秀光	一首	川上市郎兵衛親暁	三十三首	安山代七郎親備	五十九首
伊集院清遊兼貞	七首	立山百人清賢	一首	梅本伝右衛門実勝	二首	東休哉親寶	一首
梅本伝右衛門実堅	一首	鳥原與左衛門定暁	二首	東喜三左衛門親賢	一首	宮原源左衛門景雄	百廿九首
川上六郎兵衛親盈	□首	梅本多喜右衛門実比	二首	増水吉兵衛氏輔	百八十二首	肝付平右衛門兼伯	十五首
伊集院八兵衛兼愷	百七十五首	池田仲右衛門正休	一首 ^(ウ)	吉井助右衛門嘉春	一首	関屋早太義武	三首
安山三左衛門親敬	百四十六首	谷山孫右衛門智盈	五首	山下仲太左衛門清遙	一首	渡辺次兵衛 安	一首
浜田十太夫貞良	一首	増水七郎右衛門氏顯	九首	倉岡彌兵衛親好	二首	山下喜才太清方	二十三首
友重九八左衛門昌副	三首	桑島桐右衛門仲堅	一首	蘭牟田周右衛門貞如	十四首	田中休之進種定	五首
上原段右衛門尚政	二首	岩崎四郎右衛門常鑑	一首	伊地知休意重朝	廿一首	高野恕兵衛昌都	二首
伊地知貞右衛門季道	十首	郡司喜兵衛綱光	一首	上原平六兵衛尚詮	二首	梅本権之亟実懿	二首 ^(ウ)
末野十左衛門兼備	五首	宮迫雲右衛門政盛	一首	橋口伴藏兼貫	二首	肝付平兵衛兼廉	一首
倉岡九郎右衛門安善	一首	富田宗之亟宗秘	二首	伊地知貞太郎季休	八十二首	増水賀左衛門氏壽	一首
伊地知大隠季呢	七首	中尾駒之助有儀	一首	内田五左衛門昌貞	六十七首	安山四郎右衛門親福	一首
梅本伝太左衛門実如	一首	杉之尾新左衛門実信	一首	高野夕可昌憲	三首	伊地知右源□季融	八十一首
梅本覚左衛門実先	二首	小笹彦左衛門景通	一首	安山仲左衛門親善	一首	肝付啓迪兼頭	五首
蘭牟田渡右衛門貞卿	一首	前田藤角清憲	百四十四首	友重周之亟昌承	一首	中原普賢院慶呢	四首
伊地知宗右衛門季虔	百八十四首	桑波田孫右衛門景幹	二首	伊集院八之亟兼倫	八首	町田勘左衛門実秘母	一首
安藤源左衛門祐貞	二首	増水次郎左衛門氏尹	一首 ^(70・才)	橋口平内兼定	六首	安山三左衛門親敬養母	二首
和田強兵衛助門	四首	長友庄藏善弼	六首	上原兎十郎尚貞	十六首	伊集院八兵衛兼愷母	五十二首
		前田源五兵衛清晴	一首	関善左衛門正房	二首	安山仲左衛門親善養母	一首

よみて奉り侍りける中に

1986 行末も猶長からんくれ竹のよゝをかそへてつきぬよはひは 保定〔67・オ〕

1987 呉竹の千尋に千世の末かけて長き齡や猶契るらむ 綱光

1988 立馴てかはらぬ友と契るらし砌の竹の千世の行する 親福

ある人の八十の賀によみてたまはりける

1989 陰深き砌の竹のふしことにつきぬ齡の千世やこもれる 靈源公

人の七十の賀によみて遣はし侍りける

1990 葉かへせぬ色をためしに萬代も友としなれん庭の呉竹 貞卿

1991 しけりそふまかきの竹の数々にいく萬代の末もちきらむ 経福

九月九日に父の八十の賀し侍りける時

1992 しら菊の露も数そふ下水に千世をくみしる花のさかつき 兼愷母

ある人の八十の賀によみてつかはし侍りし

1993 へたてなき友とみきりに立馴て千世や重ねんつるの毛衣 兼伯

今和泉のあるし島津忠厚君の御母君八十の賀

に、龜萬年友と云歌を人々にこひ給ひければ、よみ〔7〕

て奉り侍りける中に

1994 なれく／＼てかそへやそへん池水に萬代すめる龜のよはひも 貞如

1995 よろつ代をともに契りて砌なる池にや龜のすまんとすらん 景雄

五月の半なる頃

若君の七夜祝ひ給へりけるによみて奉り侍りける

1996 ことしおひの竹に齡を契りをくなく、よやちよの初なるらん 兼愷

世治文事興と云事を

1997 波風の静なる世はなにはつの道さかふるや芦はらの国 季虔〔68・オ〕

浪の藻屑

卷之一 春部 三百四十六首

卷之二 夏部 二百十首

卷之三 秋部 三百五十五首

卷之四 冬部 二百三十五首

卷之五 恋部 二百七十首

卷之六 雑部 五百八十四首

總計 二千首

卷中 姓名

景德公 貴澄公 十二首 永野南陌祐陵 三首

慈誠君 惠能子君 二首 宮原順節景連 三首

靈源公 貴柄公 一首 長谷彦伯保定 三首

涼相君 綺佐子君 十首 伊地知龍潜季翹 三十五首

公 貴典公 五十首 伊地知元齋季秀 二首

公夫人 絮子君 七首 宮原良節景香 二首

祝の歌よみ侍りけるに

1967 散つもる言葉の色もとかへりの花にかそへん松陰の宿 季虔

松契多春

1968 いく春かかけて契らん言の葉も千世の色そふ和歌の浦松 親備

飛鳥井雅光卿の御許に、をのれかよめる歌とも

数々かきあつめて御添けしねかひ奉りける頃、

さかへ行千世の言葉の玉松は緑くもらすそふ光哉

といへる御歌を賜はりしかは、斯なんよみて奉り侍りける

1969 光そふ露の恵を仰くかな色なき谷の松の朽葉に 兼愷

国のかみのおほん母君六十の御賀に、人々に寄松祝

の歌めされける時よみて奉りける中に

1970 松かえも今ひとしほの色やそふ君か千年の春をむかへて 兼貫

季敦

1971 うつしうふる砌の松もけふよりは君にちとせの陰やならへん 景幹

景幹

1972 常盤なる松の葉ことにこもるらしかそへつくさぬ君か千年は 親宝

(66・オ)

慈誠君、松原となんいへる所にすませおはしける時、八十

の御賀し給ひけるによみて奉り侍りし

1973 いく千世の限もしらし松原のさかふる木々に契るよはひは 親宝

1974 ゆく末を君に契りてまつ原の木々も千年の陰やそふらん 親備

同じ御賀に人々よみて奉りける歌の中に

1975 けふは猶千年の春やしらふらん君にことふく庭の松かせ 貞良

1976 幾千世かともに契りてまつかえの花さく色も立馴て見ん 嘉春

1977 けふよりは老木の松も若かへり君に千年を又契るらむ 氏壽

平佐のあるし北郷久珉君七十の賀に読て奉りける

寄松祝

1978 千年ふる松も老せぬ門とてや梢にならすよろつ代の声 季虔

1979 色かへぬ砌の松に立なれておなし千とせも数へてや見ん 兼愷母

1980 行末もあかて千年や契るらん友とみきりの松の齢に 読人不知 (ウ)

宮下何某か六十の賀に、春松契久と云事を 氏輔

1981 いく春もさかへん松に契りをくむそしのけふや千世の初しほ

梅香亭如流といへるか六十の賀に歌をこひければ

よみてつかはし侍りける

1982 影うつす流の末もいく千世の春に匂はん梅のしたみつ 季虔

兼愷か母春子か七十の賀によみて賜はりける

1983 いく春もかはらぬ色の呉竹に契りやをかんちよのゆく末 公

公夫人

1984 ゆく末は千世もかはらし松かえのみさはを友と契るよはひは

右の御歌をたまはりけるかたしけなきによみて奉りける

1985 松竹の同じ色そふ言の葉の深き恵や世々に仰かん 兼愷母

末川周山君八十の御賀に、竹契齡と云事を人々

1944 濁りなき池の心にうつりきてみのりの月の影もすむらん 兼愷母

賀

祝

1945 八百よろつよ、にたえせし芦原の水穂の国の神のまもりは 季翹

1946 君か代の秋やいく秋つきしなき露のめくみになひく民草 兼愷母

五十首歌の中に、春祝

1947 ふる雨の恵あまねき春にあひて民の草葉も猶榮ふらん 清憲

飛鳥井雅光卿より御会始の御題驚有慶音といへる
を賜はりける時、よみて奉り侍りし

1548 糸竹の外にも春のよろこひを花にしらふる驚のこゑ 兼愷

1949 けさよりははつねのとかに驚のも、よろこひの春をつくらん 氏輔

寄花祝

1950 色も香もつきぬ盛の花心のとかなる世の春やうれしき 景雄

秋祝

1951 時は今秋津島根にすむ月の曇らぬ影や世の例なる 氏輔

月五十首会の中に月前祝

1952 久かたの空ゆく月も秋ことにくもりなき世を仰きてそしる 親敬

重富のあるし島津忠貫君新に殿つくりし給ひける

(64・オ)

時、月契多秋と云事をよませ給ひければ読て奉りし

1953 曇りなき世々の光はいく秋もかはらぬ宿の月にちきらん 季虔

1954 末遠き幾世の秋も諸ともにすみ馴て見ん宿の月影 清憲

1955 いく千年すむへき宿の行末もあかて契らん秋夜の月 景雄

寄山祝

1956 男山動きなき世のためしとて松ふく風も枝をならさす 氏輔

1957 動きなき岩くら山に君か代の千年をまつ陰もさかへん 季融

寄国祝

1958 世々かけて仰くにつきぬ日の本の国つ光はよみにくもらし 清方

飛鳥井大納言雅光卿に歌の道御門入の時、よみ

て奉り給へる、寄道祝

1959 ふるき跡を伝ふる道もさま／＼の中にさかゆくやまと言のは 涼相君

同卿に同じく御門入し侍りける時、同題にて奉りける

1960 誰もけにたえずや仰く敷島の道の光のへたてなき世を 兼愷

1961 世々ことの風を姿にあらはして吹つたへたる言の葉の道 氏輔

1962 曇りなき御代のしるしに敷島の道の光を猶あふかまし 季虔

1963 芦原や神代の風の伝へきて猶さかへゆくことの葉の道 景雄

1964 なほき世の恵を四方に敷島の道のをしへや皆仰くらん 季翹

1965 伝へこし神代の光末かけて今にくもらぬ敷島のみち 親備

1966 仰け猶世々にはあらぬ言の葉の教久しき道のさかへを 清方

あらたに家つくり侍りける時、友とち来りて寄松

(65・オ)

1937	同譬喩品 我かねかひみつの車にひかれてそまことの道はめぐりにける 同品 其中衆生悉是吾子	季融
1928	へたてなき御法の月の光にはみなしこ草の露ももれしな 同 葉草喩品	兼愷 _(ウ)
1929	ふる雨のめくむは同じ百草も秋にわかる、花のいろく 同 化城喩品	親敬 季融
1930	かりの世のかりのやとり迷ふかな花の戸ほそをよそにへたて、 同提婆品	季融
1931	契りをく御法の為といく秋の霜の夜床に身をもかふらん 同 壽量品	兼愷 季融
1932	はかなくもふみや迷はんわしの山みのりの道に思ひいらすは 同 普門品 心念不空過	氏輔
1933	わしの山くもらて常にすむ月を沈むと見るや迷ひなるらん 一筋にもとめ入なは奥山もこゝろまよはぬ道はあらなん 人々題を分ちて釈教歌よみ侍りける時 金剛経 是法平等無有高下	氏輔
1935	法の月やとりもらせる露もなし峯もふもとも同じ光に 無量義経 合會有別離	季虔 _(63・オ)
1936	あすはまた立や別れん旅人のあひやとりする小夜の中山 維摩経 譬如淨満月普現一切水	氏輔
1937	わたつ海の浪のいつくもみてる夜の月はへたてぬ光とそしる きさらき十五日の涅槃會にまうてける時	親敬
1938	咲そめし春や昔の法の花ちりの末まで猶匂ふなり 高野山に詣ける時、木食上人より光明真言さつ かり侍りけるに	親敬
1939	まよふへき心のやみも晴やせんあふく御法の月の光に 同じ所の萬燈堂にて	景雄
1940	後の世をてらす光もつきしなきたか野の奥の法の燈 同じ所にて蓮金院といへるにやとり侍りける夜、院主 出あひて大師即身成仏の事ともよすからよう つ物語しけるをきゝて	景雄 _(ウ)
1941	雲霧も払ひつくしてたか野山そのあかつきをまつ風の声 心翁寺の庭なる池に蓮の咲出けるを見て 山主に申遣はし侍りける	兼愷
1942	池水のはちすよりけにすますらん濁にしまぬもとの心を 同じ寺に祥山禪師の初て来り住けるに、よみて つかはし侍りし	景雄
1943	仰くその心はちりもくもらしなわしの高ねにすめる月影	昌貞

- 1908 神風やみもすそ川の清きせに濁りなき世の例をそしる 助門^(ウ)
- 玉津島社に詣侍りける時
- 1909 世々かけてやはらく和歌の浦浪に光そふらん玉津島ひめ 兼愷
- 三輪に詣侍りける時
- 1910 みしめひく緑も深くかみさひていく世になりぬ三輪の杉村 景雄
- 日向の末吉といへる所に住吉の神の社たてりけるに
- まうて侍りしに、是なんかのおほん神のあらはれ給ひし所
- よとて、今に此あたりをあはきか原と申伝へ侍るなりと
- あないの人申侍りければ、取あへす
- 1911 あらはれしその名は今に立花のあはきか原の住吉の神 氏輔
- 高城といへる所に住吉の神の社たてりけるか、あまた
- の年月をへて、みかたちいといたう古ひ朽たりけるを、
- 人々かたらひ新らしく改めつくりてやすんし奉りける時、
- よみて奉りし歌の中に
- 1912 つきしなき神のみかけも幾よろつよ、に仰かん住吉の松 親盈
- 1913 陰高き神のゐ垣の松かえに栄へを祈る言の葉の道 兼備
- 1914 あふけ猶やたの鏡の曇りなき世に住吉の神のみ影を 季虔
- 1915 みしめ縄たえぬ恵を神垣にかけてそ祈る世々の行末 氏輔
- 1916 千早ふる神の社のみしめ縄長くたえせぬ世を守るらん 盛徳
- 1917 世々かけて陰もさかへん住吉の宮居の松や春の初しほ 兼道
- 1918 あらたなる神の光のます鏡曇りなき世を猶てらさなん 常鑑
- きさらきの末つ方に奈良にまかりける時、手向山
- の八幡宮にまうて、
- 1919 いささらはもみちぬ春の手向山花の錦のぬさにまかせん 兼愷
- 二月廿五日天神影前の会に
- 1920 散うせぬ北野の松の言の葉は幾世手向のけふにあふらん 氏輔
- 飛岡天神奉納歌の中に、社頭松と云事を
- 1921 神もさそ光をそへん玉垣にさかふる松の言の葉の道 兼貞
- 霧嶋社にまうて侍りける時
- 1922 吹はらふしなどの風に高千穂の峯の八重雲くもる共なき 氏輔
- 釋教
- 百首歌よみ侍りける時、釈教
- 1923 唐衣うらなる玉も心からみかくや法のひかりならまし 景雄
- 寄水釈教
- 1924 法の水深きをしへをくみしらはこゝろの底もいかで濁らん 読人不知
- 法華經の心を
- 1925 品々の花の下紐とくのりはたえぬ誓やむすひ置らん 季融
- 同廿八品の歌よみ侍りける中に、序品
- 1926 ときそむる法のむしろに数々の色もたへなる花そふりしく 季融

(61・オ)

(62・オ)

(ウ)

し野の烟になしけるとなん、けふ其隣の人来りてつ
はらかに物語しつ、世にもたとしへなう哀なる事に

こそ侍るめれと声をむせはし、目押のこひたり。我も

きくたひ／＼に胸ふたかりて、其いらへきへえもいひいて

侍らねは、かたへのた、う紙とりいたし、せきあへぬ涙を

かきまきらして斯なんしるしつけ侍りぬ

1894

兼愷

1895

親と子の思ひは深き井の水あはれはかなき別也けり

右のふみを兼愷かきしるし侍りけるを見て、たれ

かれもいいたうあはれかりて、詩つくりあるは歌よ

み侍りける中に

1896

かき流すふみにも袖をぬらしけり古井の水の深きあはれは

貞如

1897

くみてしるあはれも深しなてしこのはかなく散し庭の埋れ井

1898

埋れ井の深きあはれもしられけりかき流したる水茎の跡

親直

1899

人の子のまことの道も深き井の水のあはれそくみてしらる、

季融

1900

いく人の涙そふらんおさな子身はうもれ井の水のうたかた

右にしるせし賤男か病の程、さきにその子を

救ひ侍らんとて井の水に飛入し後は、又煩ふへき

(59・オ)

こ、ちもをこらす、やかて快くいえ果たり。あはれ
いときなき子の心に親の苦しみを助けんとて

終には其身を亡ほしける程の誠の至によれる

にこそと、父も母も歎の中の歎ひになりぬと人皆

申伝へ侍りき

題しらす

1901

たか袖もあはれはかけよ浅茅生の末葉にもろき露のよの中 氏頭

神祇

神祇の心を

1902

千はやふる神代のまゝのいす、川たえぬや深き恵なるらん 親備

1903

流ての世々につきせぬ石清水神の恵の末もはるけし

月次歌の中に、秋神祇

1904

石清水清き流に影とめてかみさひわたる秋のよの月

社頭

1905

神垣にひくしめ縄の打はへて長きめくみや世々にあふかん 親暁

社頭櫛

1906

さかへそふ神路の山の八重櫛しけきみかけは世々にかはらし

伊勢太神宮に詣侍りける時

1907

天照らす神代をかけて出る日の光やはらく朝熊の山

季虔

(60・オ)

向ひ、や、わらはよ、かはかりあつえの堪かたきに、かしこなる古井は水底のさのみ深かるへうもなければ、いさ、かうつはにくみて得させてんやといふ。わらは心よけにうなづきていそしくはしりいてしかふりかへりみて、けふは日頃にまさりて父のわつらはしうおもやつれ見え給ふに、母の帰りの遅き^{こそ}こよなう心うけれど云。父打

「ウ」

ゑみて、おさなき心に^図はかり物思ひなせそ、いさとくくといひてす、めやりぬ。父は身の上の事とも^図かなうおもひつ、けてや、時移りぬる程に、わらはの入来らねはいとくおほつかなく待わひたる折から其妻帰りきて、こ、ちはいか、おはするやなととふに男しかくの事を告きこえて、わらはの遅きはれいのたはれ遊びにやといふ。妻はいそき井のほとりに尋ねいて、爰かしこ見めくるにわらはの行ゑのしれされは、俄に胸おとろかれて井の中をさし覗くに、其子のわらはさかさまに落入たるやうなり。母はそれよとたに見とめもあへすこはいかにせんとあはた、しうさけひ出ける声に、父は身のなやみをも打忘れ、ふしとよりまろひおりて物狂をしくはせもてきたり。井の中につととひいりて見るに、わらはの手には水汲へきうつは物をはなちもやらす水底におほれりたり。夢ともわかすかつきあけて、なくく家の内に

「(58・オ)」

いたきいれ、父と母と右ひたりに取すかりつ、手足押動かし顔打まもりて、よひいけく^{タマ}立騒きけれど身もた、ひえにひえてとくたえ入ぬれば、息吹いつへうもなし。ふたりは余りの悲しきに肝心もうせはて、しはしか程は物をたにいひもあへす。母はむなしきからを膝にいたき肌にそへて、いかにやいかに汝か母なるそよ、をのれいちはやくも立帰りこはかうやうのうきめにはあはさらましを。また西ひんかしをもわきかぬるこ、ろもて父のくるしみを助けんとて、をのか身を捨つる事の哀にもいとおしけれ。是や限の別なら^図にせめ^図はひと言をたにいひもし、き、も^図よかしなと、かひなき事ともかすくくりかへして、我^口同じ道にとなんよはひの、しる。父はやみ心いと、取乱して、かくはらわたをさくの悲しひはたかするわさにそ、をのれ水をくませしと云にはあらて手つから殺せりとしもいはんかし。さりとて之しらて、余りに遅きはい^図きなき身の怠りにやと、其ま、にしも打すくしつる事のうたてくも又悔しけれ。やみほれしうき身はなからへゐていか、成へき。行末やらん前の世の罪のむくへるにこそと、人こ、ち有へくもあらず泣ふしたり。程なくしたしきやから寄つとひて、後のわさともかたはかり取いとなみ、きのふの夜に入てあた

「ウ」

1882 なてしこの花の盛も待あへす常なき風にちりゆくはおし 公

年老て後、秋の初つ方にむすめにをくれ侍りけるに

1883 あたし野の夜半の烟ときえしより忘れかたみの俤そたつ 兼愷母

なへて世の秋たにあるを老の身のつらさ数そふ袖の上の露

其むすめの亡跡にいといはけなきおほなの子のをく

れゐけるを見て、あはれにひんなう覚え侍りければ 兼愷母

1885 見たひに露けかりけ圓なき人の忘れかたみやなてしこの花

みるもうし見ぬはた恋しなき跡に残る小萩の花のしほれは

いときなき子を失ひ侍りける時 親敬

1887 しての山わけや迷はんとはかりをおもふ心もかきくらしぬる

幼きむすめの身まかりける時よめる

1888 さきたて、思ふもかなし稚子の獨や死出の山路越らん 兼愷母

冬の比、弟の季翹身まかりけるにのみ侍りける

1889 雪おもる軒端の松の下折に残るかたえの色も寒けし 季虔

いと幼きむまこの身まかり侍りける時

1890 千世かけし契もはかな雪霜にしほれ果たる松のふた葉は 季虔

えにしあらは又後の世にあひ見ましわか老らくも幾程の身そ

同しき折によめる

季虔

(ウ)

1892 ゆく水のあはれをそへて老浪の立居もくるしあちきなの身や

其むまこのな、年に成ける忌の日に

1893 年月をかそへいつれは今も世にあらましかはの面影そたつ 季虔

爰なる新御堂となんいへる村居のはつれに、まつしう住

わひぬる賤の男市左衛門といふあり。年比かたらひ馴し妻と独の

男のわらは市太郎といふとをもちりける。明暮何くれと隙なうい

となみける程に、果は身にいたつきの積りぬる故にや、

かの男をこりのやまひになん犯されて、此秋の初つ方

よりいと、なやましけにふしいりぬ。さらぬたに朝け

夕けの烟さへ立兼たるさまなれば、まいてくすしの事

なとつや／＼心にまかせず、とかくにたつきなき身の

程なりけらし。葉月のその日、妻はけふのすきはひ

の為とて外にいてぬ。其子のわらは、ことしむつに成

けるか齡の程よりもいととなひ、心さまことに賢く

してよろつの事とも常に親の教にたかはす。ふたり

の親も行先頼み深く覚えて、又なきものにめていつ

くしみ、大形(ママ)はそのあたりをはなさす、けふしもやまひの

床近う馴したしみ、いはけなき手すさひ事も父の

うれへをなくさめかほ也。昼する頃ほひ、父はあつ

しき苦しきの余りにおもき枕をあけて其子に

はかなく、月草のうつろひやすき世のならひも更に

弁へとくへき方そなきや。あやなうかきくらす心のやみ

には、空の光さへけにまはゆきこ、ちしていさ、か翫ふ

としもなけれど、かはらぬ影のさすかにしたはしくてす

たれかたはかり巻あけたるに、最中の月も何となく

霧渡りて折からのあはれしりかほ也。よものけしきも

いと物すこく、うら枯そむる浅茅の砌は秋の夜寒も

ことはりすき、雲路にむせふ雁かね露にくるしむ虫の

うらみも我身ひとつのうれへに取あつめて、千々に物

こそとやかこたまし。されは過にし方もしつたまきの

くりかへしいと／＼思ひいてられ、呉竹のよもすからふし

もやらず、窓かすかなる残りのともし火をか、けて、よし

なき筆の雫す、ろにかきよするも、あたなるたむけ

草の露はかりもなきおほん影に備へんとてなん。猶

忍ひ余る心のふし／＼は、其夜なからの月にやとひ

てんかし

思ひいつる去年のこよひの面影も心にくもる望月の空

兼愷

露をたにはらはてやとす袂哉月をみかけのわすれかたみに

御父君かくれさせ給ふて後、三年はかりに成ける

春の頃、もと住せおはしたりし所の、よろつに物ふり事

のさまとかう打かはりぬるに、さきにうへをかせ給ひし

(55・オ)

桜花の咲るを見たまひて

1875 たらちねのかたみに匂ふ山桜花やその世にかはらさるらん 公

父身まかりて後、其手つからうへ置たりし庭の桜

の咲出けるを見て

1876 なき跡のかたみに仰く家桜花の雫に袖そぬれそふ 昌貞

其後な、とせに成ける春、父の墓に手向侍らんとて

その花の一枝を折けるによめる

1877 おる手にもうへしその世のしたはれて涙露けき花のひと枝 昌貞

父の身まかりける秋、はかところにまうて、 兼愷母

1878 虫のねも松のひ、きもあはれなと物思ふ袖に露をかくらん

父むなしく成て、其除服の日に、兼愷かもとより

さこそけにぬきうくもあるか藤衣けふをはてともわ

かぬ涙に、と申贈りければ、返しによりて遣はし侍りける

1879 藤衣ぬきかへてしもなき人のおも影は猶身をそはなれぬ 季虔

父のなくなり侍りける時

1880 なをさりにつかへこし身の怠りもつゐの別の後そ悲しき 兼愷

其忌のはて侍りける折

1881 月も日も過にけるかななき跡をしたふ心のやみのまされに 兼愷

夏の比、おさなき姫君のうせさせ給ひける時よませ

たまひける

(ウ)

- すまの浦に泊りける夜、時雨のふりければ
 1865 しくれゆく須磨の上野に松風を浦輪の浪のうきねにそ聞 昌貞
 旅泊郭公 景雄
- ほと、きすかたらひあかせ湊江の浪のうきねにうきねもらして
 1866 旅の泊にて郭公をきゝて 季度
- 立かへり猶もかたらへ郭公とてもねられぬなみのまくらに
 1867 旅のとまりにて、千鳥の鳴侍りければ 季度
- 音つる、磯のうきねの友千鳥ならはぬ浪の枕をやとふ 兼愷母
 1868 (53・オ)
- 哀傷
 やよひの初つ方
 景德公かくれさせ給ひける時
 1869 陰たのむ梢の花の春の風常なき色になとさそふらん 兼伯
 1870 春の雨も袖にたえせぬ思ひ哉ありし恵の露のなこりに 季翹
- 宝覚公はかなくならせ給ひける時、みてらの御供
 つかふまつらんとてかしらおろしける折、心の中に思ひ
 つ、け侍りし
 1871 かきおろすわか黒髪の筋ことに乱れて落る袖の上の露 親敬
- 霊源公かくれさせ給ひけるに
 1872 朝な夕な君につかへし道芝の露そなこりの袖の上なる 兼愷

八月十五夜月を見てよめる歌、ならひに詞
 葉月中のいつかはならひなき月のさかりにして、おほよそ
 物のなさをしれるたくひ誰かめてはやす事のなから
 さらん。さるを、此秋は、うき年なみの思ひかけす
 涼相君むなしくかへらぬ水にさそはれさせ給へは、長き
 別のおほんなこりにみな人うつ、ならすなけきまとひ、
 音信かはす風の便も常なき悲しひの声に聞えて、
 かはかぬ袖の時雨、消かへる胸の烟は名におふゆふへも
 はるけかたし。つく／＼と思ひしつむるに、けにやこそ
 こよひそとよ、かのおほん方にやまとうたのむしろひら
 かせ給ふて、参りつかふるたれかれの中にやつかれも
 もれぬ仰ことになんめしつとへつ、数々の題とも
 わちちたまはす。又なうすみ果たる月のよそひはあま
 ねきおほんいつくしみの光をそへ、かつは詞のいつみの
 潔き色を深うす。をの／＼とさまかうさまよみいて
 つるなとほこらしうもてさはくも、堪ぬかたしけ
 なさの余りなるかし。果には竹の葉やうの尽せぬ
 たまものをさへかうふりて、又こん秋もかゝるつきおほん
 恵のあらましいひの、しり、いたうふくるまでさふらひ
 興せし事も今は跡なきうは玉の夢なりけり。あ
 はれかけろふのあしたの命ゆふへをまたぬためしも

(54・オ)

- 1841 みしかよも明し兼たるさゝの屋のかりねの月に山風そふく
 1842 たひねするよるの衣をかへしてもむすはぬ夢を払ふ山かせ
 月次歌の中に、旅宿風
 1843 ふるさとの秋の夜寒もいかならん馴ぬかりねの床の山風 兼愷
 旅宿雨 氏輔
 1844 雨そゝく難波のこやの芦すたれかゝるかりねの袖しほれとや
 旅のやとりにて時雨のふり侍りける夜 兼愷母
 1845 ふしなれぬ芦のしのやの長きよに袖ぬらせとや打しくるらん
 旅宿夢
 1846 ふる郷にかけてそかよふ草枕むすふよのまの夢のうきはし 親敬
 旅のやとりにて夜深く郭公をきゝて
 1847 郭公夢より後をなくさめてかりねことゝふ夜半のひと声 景雄
 羈中月
 1848 よな／＼の露をかたく袖の上に馴てやとかる野への月影 季昵
 百首歌よみ侍りける時、羈中山
 1849 倂は身にそ立そふしら雲のいくへたつるふるさとの山 季休
 羈中関
 1850 たひ衣ひもかさなりてうき秋の風は身にしむしら河の関 清憲
 百首歌の中に、羈中野
 1851 分わふる日数重ねて旅衣いく野の露にやつれきぬらん 親敬
- 1852 日くるれとやとりもとめん陰もなし行を限のむさし野の原 清憲
 羈中花
 1853 旅衣あかね匂ひを重ねきてこよひも花にやとりからまし 親敬
 1854 わけくらす春の山路の旅枕花にかりねの数やかさねん 氏輔
 1855 たひ衣立かへるへき日数さへ花に程ふるみよしのゝ里 読人不知
 羈中夢
 1856 よな／＼にかはる野山の枕にもおもかけさらぬ故郷のゆめ 親暁
 1857 さゝ枕なれぬ野原の露霜にいくよかりねの夢結ふらん 昌承
 旅泊
 1858 湊江によするひとよの友舟もあけゆく浪に漕や別れん 氏輔
 1859 とまり舟とまもる月も影ふけてねぬよさひし床の浦浪 昌圓
 1860 千鳥なく浦風ふけて湊江のうきねの浪に月を傾ふく 景雄
 月次歌の中に、旅泊舟
 1861 船とむる入江の浪に月影もやとりかねたる沖つ塩かせ 季虔
 明石の浦にとまり侍りける夜、月を見て
 1862 長き夜をあかしの浦の浪枕かりねのうさを月やとふらん 慶昵
 雨のふり侍りける夜、明石の浦に泊りて
 1863 とはゝやと月に契りしあかし瀉浪のうきねや雨にうらみん 兼愷
 旅泊雨といふ事を
 1864 舟とむるあら磯浪にふる雨の苦もる夜半をいかゝあかさん 智盈

(51・オ)

(52・オ)

1819	かりそめの枕やからん旅衣ひもゆふくれの野辺の若草	氏輔
1820	けふりたつ里のしるへもとひわひぬ霞をわくる春の山こえ	親備〔ウ〕
1821	春の夜暗坂といへる山道をこえ侍るとて	氏輔
1821	旅人もこえそわつらふ春のよのやみはあやなきくらさかの道	
1822	寄花旅	清憲
1822	白雲のよそにみやこはへたて来て山路の花にやとりをそとふ	読人不知
1823	宿りとふ花にはつらしふる郷のたよりの風とおもひなしても	
1823	旅のやとりにて春深く成侍りける比、故郷の花をおもひ	
1823	いて、よめる	
1824	旅衣はるの日数をふるさとの軒端の花もあたに散らん	氏輔
1825	夏旅	
1825	たひ衣しほれそまさる夏山のしつくもしけきさみたれの頃	親敬
1826	すゝしきは立よりて見ん旅衣わくる夏野の松の下かけ	祐寿
1827	夏の比、遠き境におもむき侍りける道にて郭公を聞て	
1827	ふるさとをかへり見よとや郭公わけこし方の空になくらん	景雄〔50・オ〕
1828	夏の夜、草田の浦といへる所にやとり侍りける時	
1828	夏刈の草田の浦の芦の屋にむすふもはかな短よの夢	季融
1829	秋旅	
1829	うき秋を思ひくらへて故郷もおなしよさむの月や見るらん	季虔
1830	月前旅	
1830	袖ぬらす露のゆかりにおもなれてしらぬ山路を送る月影	兼愷
1831	ふるさとの其面影もさそひきてなれぬ山路を月そ友なふ	季融
1832	旅月憶都と云事を	
1832	すみ田川月にゆくゑの事とはん都の空の秋はいかにと	季虔
1833	百首歌よみ侍りける時、山旅	読人不知
1834	たひ衣わけて朝たつ山路かなきのふは余所にみねの白雲	
1834	野旅	
1834	旅衣わけくらしたるあつまの、草葉に露のやとりからまし	尚貞〔ウ〕
1835	旅行	
1835	分きつるたかねは遠くへたゝりて猶行末もしら雲の山	親直
1836	いささらはやとりやとはん夕烟ほのかにかすむ遠の山もと	景雄
1837	旅行夕	読人不知
1837	かねの音は末野の暮に聞ゆ也やとりとふへき里もしられて	
1838	百首歌よみ侍りける時、旅宿	
1838	陰たのむ岩根の松も故郷のゆめにはつらきよるの山かけ	昌貞
1839	旅宿月	
1839	草枕ゆふへの露を契にてあひやとりする野への月影	親敬
1840	露深き草の枕にふるさとの面影さそふ月をやとさん	種定
1840	夏の夜ある山辺の里にやとり侍りける時	読人不知

1804 はる霞立へたて、も旅衣うらなく馴しちきりわするな 親敬

夏の頃ものにまかりける時、ひとよやり侍りける所
のあるしに別る、とて 読人不知

1805 さ、の屋のひとよはかりのかたらひも忘れははてし山郭公 (48・オ)

秋の頃、藤原親布か女の遙なる所にまかりける時
よみてつかはし侍りける

1806 忘るなよ霧たつ空はへたつともせめてたのむの雁の玉章 兼愷母

大坂より帰り侍りける時、安田伝行に別る、とて
よみて遣はしける

1807 わするなよなれし難波の友千鳥又こと浦に立わかるとも 兼愷

1808 思ひてはなにはの芦のうら風にそよとはかりの音信もかな 景雄
歌の友なりける人の子細ありて遙の境にまかりける
時、申つかはし侍りける

1809 わかの浦の跡なわすれそ友千鳥定めぬ浪の立へたつ共 読人不知

鹿児島より帰り侍らんとて船出しけるに風なみ
あらくてえいてす、そこなる湊に纜をつなき侍ける

おり、萩原貞孫か許より舟いたさすは必浦浪の (ウ)

立帰りこよかし、深くも侍待る物をと申遣はしければ、
其かへりこと申ける文の奥に、かくなん書添侍りける

1810 大淀のまつとしきは浦浪の立かへりてや又もあひ見ん 氏輔

或所におもむき侍りし時、したしく申ける人はなむけして

急け猶けふの別をいそかすはかへさの程の遠さかる
へきと申ければ

1811 立帰る程を契りてたひ衣けふのわかれをいさやいそかん 景雄

友とちのものにまかりける時、むまのはなむけしける
つゐてにかくよみて遣はし侍りける 親敬

1812 さかつきはくみたにつくせつきしなきなこりをしたふけふの別に

羈旅

羈旅

1813 けふいくかしほれきぬらん旅衣のやまの露を袖にやとして 公
1814 しら雲のかさなる山をこえくれて松か根枕又やむすはん 実如
1815 行末の近つく程やふる郷の山は日ことに遠さかるらむ 季虔

鹿児島島の住吉社奉納歌の中に同じ心を 枯陵

1816 いくゆふへなれぬかりねにかこつらん浦輪の浪も野への嵐も
旅歌の中に

1817 こえわひぬ月さへふけてむまや路の鈴のね寒き囿るの山風 季虔

1818 なへて世はかりのやとりの露のまに草のまくらを何かこつらん 読人不知

春旅

1790 露時雨そめし千入の紅葉々はきゝの錦やかけてほすらん 清憲

或人二首の題を出して歌よませ侍りけるに、

みよしの、花

1791 君こふる思ひは袖の露に見よしのゝはならてしのに乱るゝ 兼愷

たつたのもみち

〔ウ〕

1792 五月雨にうふる早苗もふしやたつたのも道なく水増る頃 兼愷

木名十

季虔

1793 めくりあひてゆくすゑまでとちきりしも覚束なしやうつる年月

草名十

1794 霜寒き床をうつらのしめ兼てきくもさひしきこゑに鳴らん 季虔

物にまかりける時、或湊に船をつなきてしはらくとまり

る侍りける折、歌よみてんやと人の申ければよめる

草名十

兼愷

1795 しはしたにゆめも結はすかち枕きくもはけしきをきつなみ風

折句歌よみ侍りける時、藤はかま

親敬

1796 ふか緑千年をかけてはるゝとかけもさかふるまつのこたかさ

季融

1797 ふく風もちらさて匂へはるのよに霞みこめたるまとの梅かえ

或人のもとに美人草のたねを遣はしける時、文の奥に

〔47・オ〕

折句してかきつけ侍りける

季虔

1798 ひとはいさしくるゝ空の村雲のさためなき世をうしとしらすや

人の許にて屏風に藤の盛なるさまゑかきけるを見て、

藤の花といへるを折句によみてつかはし侍りける 季休

1799 ふての跡ちらていくよの後までもはるの盛やなかくにははん

きさらきはかりに開聞と云所にまかりて宿り侍りけ

る夜、曙のけしきいとおかしければ、うつほ島と云

を折句にして

1800 うら遠く月は残りてほのゝとしほ瀬に霞むまつのむら立 季融

或人の許に、なとかひさにはとはぬと云事を折句の沓

冠に置てよみて遣はし侍りける

兼愷

1801 なかきよにとひこし月はかたふけと人まつ門はさしもやられぬ 〔ウ〕

離別

別の心を

1802 おもひやるこゝろはよそにへたつなよ立別れゆく山端の雲 兼迢

きさらきはかりにものにまかりて、花の盛なる比ふる郷に

立帰らんとし侍りける折、相知れる人の許よりたはふれに

詩を作りて、故人如帰雁何為背花還となん申

贈りければ、かくよみてつかはしける

1803 ふるさとの春の契をいかゝせん花にはつらき雁の別も 兼愷

春の比、ある友とちに別るゝとて

- 1773 梅さくらいつれか深き枝ことにそへし言葉の花の色香は 兼愷母
 儒書の句を題に分ちて人々歌よみ侍りける時、
 詩経周頌 在此無患在彼無斂 親備
- 1774 たかりもあかてや袖にうつすらん梅か、ふかくにほふ春かせ
 大学 明々徳 (45・オ)
- 1775 月に日にみかく光のます鏡うつすこゝろはちりも曇らし 昌貞
 大学 物有本末事有終始 親敬
- 1776 ふもとよりや、わけ入てしら雲のかゝる高ねの花も見るへき
 論語 衛霊公篇 人無遠慮則必有近憂 景雄
- 1777 風むかふ塩路の浪のたゝぬまに早きかへれ沖の釣ふね
 孟子 以力服人者非心服也 氏輔
- 1778 やかて又もとの姿になひきけれ野分の後の庭のくれ竹
 老子 迎之不見其首隨之不見其後 季虔
- 1779 四の時めくるもはやしゆくとくといつれの空か年のかよひ路
 ある人たはふれに十の題を出して歌よませ侍りける時、
 平家物語 俊寛僧都鬼界か島に流さるゝ、
 といふ事を 兼愷 (ウ)
- 1780 風あらき沖の小島のうき浪に友なし千鳥ねをのみそなく
 同 平家一之谷の城を攻落さるゝ、 景雄
- 1781 おもはずも磯山おろしきをひきて花そ散行すまの浦浪 景雄
- 1782 ちる花の別はおしき桜井や匂はん跡のたねを残して 兼愷
 別るゝと云事を
 十五首歌の中に、東西
- 1783 入方の山のは近き月影にむかふ朝日のひかりうつろふ 清憲
 遅速
- 1784 若なへのおなし緑も秋きてはわさ田をくつての色そ分るゝ、 清憲
 高低
- 1785 久堅の空ゆく月も曇りなき池の鏡にうつしてそ見る 親敬
 故新
- 1786 くれはてし昨日はこそそのへたてにてけふはことしと霞み初ぬる 親敬
 物名よみ侍りける中に ゐ しか さる
- 1787 氷みし水のしら浪立かへりいつしか春に音まさるなり 親敬
 ひは しやう こと
- 1788 あたにまつならひはうしやうき人の契りしことは今宵ならねと 親直
 ひは つゝみ こと
- 1789 さく花の匂ひはよみに霞みつゝみやこの春そことにのときき 季融
 源氏物語の巻の名を物の名になすらへて読ける中に、
 は、き、

- 1754 せめて身のうつゝ、になしてなくさめん昔に通ふ夢のたゝちを
風のこゝちに久しうやみふし侍りける比 親直
- 1755 ふく風にしほれてなひくさゝ竹ねうきふししけき身をいかゝせん
秋の末つ方病に打ふし侍りけるに、久しう友とちの音
つれさりければ
- 1756 かき分て誰かはとはん霜かれの浅茅か下によはるむしのね 季虔
七十余りに老ける後、足のわつらひになやみてたちるも 〔ウ〕
いと心にまかせ侍らさりければ 兼愷母
- 1757 山沢のうきに年ふる乱れあしのあたにおれふす枯々の身や
いといたう老かゝみける人の、やまひ重く成て限に覚え
侍りける比、よろつはかなき事共申けるをきゝて
空蟬の羽にをく露を命にて世をあき近きねにや鳴らん 季融
- 1758 雪の降ける時、或所に友とち余多つとひて歌よみ
侍けるに、をのれ病に臥るたりければ斯なん申遣しける
いひ出ん言の葉もなしいたつらに身はしほれふす雪の下草 季翹
- 1759 さつきはかりに思ふ事ともの多かりける時
かきくらす思ひもうしや浮雲のうきて晴せぬ五月雨の比 親博妻
- 1760 秋の比、さる子細有てをのれかつかさばなされ侍りける
日、大伴兼伯も同じさまにときゝて、読て遣しける
袖の上も同じ色なる露やをく有しにもあらぬ秋のゆふへは 景雄
〔44・オ〕
其後遙なる境にさすらへて、いとわひしう、かすかなる山
- 1762 うき身世に捨られてすむ山陰も君につかふる道は忘れず 景雄
山里に心をつくす身となりてひとり木間の月そ馴ぬる
思ひ出てふるさと人もなかわらんわかすむ方の山のはの月
ふしわひて夜寒になりぬさゝの屋の隙もる月に霜や置らん
露の身のかゝらさりせはしらぬ野のしのにみたれて物は思はし
ふる郷を思ふ寐覚に雁なきてそなたの空に月そ傾ふく
ましらなく軒端の山に月落て子を思ふやみは我そ悲しき
明る年の春、同じ所の花咲ける比
- 1768 花にさへなくさめかねつわか心あはれとおもへ春の山もり 景雄
同じ折、山里の花は心にまかせて見るらんやなと人の
申侍りければ 〔ウ〕
- 1769 山里の花はこゝろにまかせても春やむかしとしのはれそする
弥生の末つ方、旅よりふる郷に立帰らんとし侍りける
折、ある人の許に申つかはしける
- 1770 くれてゆく春の鶯さそはれてけふこそ帰れ谷のふるすに 氏輔
む月はかりに梅と桜との花咲けるを折て、兼愷か
母の許にそへて遣はし侍りける 親敬養母
- 1771 梅さくらいつれか深き枝ことにさかりあらそふ花の色香は
かへし
- 1772

- 1732 冬かれてたのも陰なき老木たに春の恵をまたんとやする 氏輔
- 1733 さく花の春のさかりもよそに見て朽こそはてめ埋木の身は 景雄
- 月次歌の中に、寄船述懐 親敬
- 1734 なにはなるあしまを分てやく船のさはりおほかる身をやうらみん
題しらす (42・オ)
- 景雄
- 1735 さすらふる身はわたつみの浪の上にうきたる船の行ふしらすも
寄鏡述懐
- 1736 我影もかはるつらさのます鏡うつる月日に年をかさねて 氏輔
- 懷旧 親敬
- 1737 身の上にまた遠からぬ昔さへしのふとすれはいと、こひしき
- 1738 いたつらに過こし方の年月をけふも学はぬ身にそうらむる 景雄
- 義智
- 1739 はかなくも身をいたつらにすくしきて昔はかりをなに忍ふらん
読人不知
- 1740 身の上に折々思ふむかしをや今はうき世のなくさめにせん
- 懷旧歌よみ侍りける中に
- 1741 春秋になれてかはらぬ月花も見し世の友そ今はすくなき 氏輔
- 懷旧夢
- 1742 あたにへし身のいにしへを思ひねの枕の夢も跡はのこらす 重朝
- 懷旧涙 (ウ)
- 1743 かす／＼に涙そひけり身の上をおもひつゝくるむかしかりは 清憲
- 兼愷母
- 1744 いにしへを忍へは袖にせきかぬる涙や世々のかたみなるらん
三月十八日、人丸影前の会に、春懷旧
- 公
- 1745 朝霧もきえてさひしき明石瀉昔をおもふ春のなかめは
- 1746 月花に残す其名もありし世も春や昔の春に恋しき 季虔
- 飛岡天神影前の会に春懷旧の歌よみ侍りける
- 1747 つゐてに
- さく梅もむかしの春を忘れすやこちふくからに猶匂ふらん 親備
- 故飛鳥井雅威卿の廿五回の御忌に、秋懷旧の歌
- 奉るへき旨、雅光卿の仰によりて読て奉りける
- 1748 兼愷
- 1749 敷島の道の光を仰くにも見ぬ世の秋そ月に恋しき 季虔
- のこしをく言葉の色を見ても猶しらぬ昔の秋そこひしき
- 1750 いにしへを忍ふも深き袖の上は猶をきまさる秋のゆふ露 氏輔 (43・オ)
- 思往事 貞如
- 1751 身の上にありしつらさもさま／＼と見し世にかへる夢そはかなき
- 往事如夢
- 1752 すきゝつる昨日は夢の世中にけふのうつゝも頼みな身や 兼備
- 1753 老てこそ夢としりぬれいたつらに怠てのみすきうつゝを 重朝
- 百首歌よみ侍りける時、夢 親備

- 1710 朝霧もはる、波路の秋風にうかふ一葉や浦のつりふね 兼備
- 1711 沖つ島人すむ方の夕烟ほのかに見えてなひくうらかせ 季虔^(ウ)
- 1712 海原の千里の外も雲はれて空にそつ、く沖つしら浪 清憲
- 1713 月次歌の中に、冬望
- 1714 山風にこのはしくれてひと筋のなかれそはる、遠の川つら 季虔
- 述懷 兼愷
- 1715 いかてかは人をも世をもうらむへき身の愚かさを身のとかにして 氏輔
- いとなきを我もうらみん釣の蟹の世をうみ渡る身のたくひにて 清憲
- 1716 よしや身のうきを忍ひてすきなまし厭ひなからも捨かたき世は 読人不知
- うき身世にふるの板戸のいたつらにすきしをかこつ明暮の空 親敬
- 1717 百首歌よみ侍りける時、同じ心を
- 1718 愚かなる身をも思はて何とた、人をうらやみ世をかこつらん 夏述懷
- 1719 かきこもる葎の門のあけ暮も同じ思ひのさみたれの比 読人不知
- 秋述懷
- 1720 うき身世の秋にはもれす夕露のなに中々にかゝるたもとそ 季虔
- 月次歌の中に、暁述懷
- 1721 こし方も又行末のあらましも思ひ残さぬあかつきの空 季虔
- 1722 老後述懷
- 1723 見るたひにつもる我身の老はうし月雪花のおり／＼のそら 氏輔
- いたつらに年月すきし愚かさも老ての後そ身にしられぬる 重朝
- 1724 今は身に立もかへらて老浪のあはれかすそふ年月はうし 智盈
- 1725 老て後、春の初つ方病に臥て思ふ事共侍りければ
- 老浪の数をかさねて身の上にたつかひもなき春やうらみん 氏輔
- たいしらす 兼愷母
- 1726 な、そしはた、いたつらにくれ竹のよのうきふしそ身には数そふ 読人不知
- 述懷歌の中に
- 1727 定めなき世のことはりの数々にうきこそ増れ年へぬる身は 清憲
- 獨述懷
- 1728 はかなくも身をやうらみん世中のうきもつらきも心ひとつに 景雄
- 1729 身のうさをいひあはせてもなくさめん心ひとしき人としりせは 百首歌よみ侍りける時、述懷涙
- 1730 世中のうきは身にそふならひともしらてや落る涙なるらむ 清憲
- 寄水述懷
- 1731 とちはつる蓬か下のうもれ水すみかねけりとしる人やなき 氏輔
- 寄木述懷

- 1691 世を渡る道やくるしき柴人のかへさもをそき山の下みち 公
月次歌の中に、遊女 「39・オ」
- 1692 心にもあらぬちきりにうかれめの浪のよるく身をつくたくらん 親備
上陽人
- 1693 いたつらになくねをそへてむそとせの春に馴ぬる宮の鶯 親敬
王昭君 季虔
- 1694 ことの緒のしらへをのみやことのはもかよはぬ国のしる人にせん
都をはしたふ心やまさこ地に我かの駒もすゝみかぬらん 氏輔
- 1695 浦島子
- 1696 水の江のみるめはかなし玉匣あけゆく雲もまよふ浦島 季虔
春の頃ほひ粟津にて、木曾義仲朝臣の塚を
尋けるに、一木の松の陰に土を少しきつき、囲ひの
ゐ垣もいと哀にたふれそしたり。昔は朝日將軍な
と時めき給ひし事共思ひ出てよめる
- 1697 朝日かけうつるも寒し春の霜ふりぬる塚の松の老木は 兼愷 「ウ」
嵯峨の往生院といふにまかり侍りし時、祇王仏など
いへるかするしの石のたてりけるを見て、そのいにしへ
もおもひあはせられ
- 1698 身の果は誰もうき世の秋ならんさか野の露にすみ染の袖 兼愷
- 1699 老人 重朝
かたらはん友もむかしになりはて、老はうき世の人もとひこす
雨夜老人と云事を
- 1700 袖ぬらすね覺の空のよるの雨ふりゆく老の身の果はうし 重朝
老人思
- 1701 老よたゝ鳥のねまたぬ夜半もなし夢より後の長き思ひに 兼愷
おいぬれは見しもきゝしも朧けの月に昔の春そこひしき
老て後、遠山の霞めるを見て
- 1702 景連
- 1703 春ことに老を重ねてとを山の霞も深き色に見ゆらん 兼迢 「40・オ」
眺望
- 1704 花の色もほの見えそめてこすのとの霞のひまに明る山のは 貞如
朝附日にはてる海の波の上にかすみて浮ふ沖のとをしま
むら雨ははれ行跡の山かせに霧立まよふ岡の辺の松
- 1705 清憲
- 1706 朝眺望 季融
- 1707 晴渡る八重の塩路の朝なきは見るめにさはる浪風もなし 兼迢
水郷春望と云事を
- 1708 兼愷
あけ渡る岸の柳も打けふり霞になひく淀の河かせ
詩歌の当座会に、海辺春望
- 1709 春風のはらひもはてぬ浪の上に又かすみゆく沖つうら船 景雄
海眺望

- 1770 月花の折々かはるこゝろかなまつもおしむも入相のかね 季虔
- 百首歌よみ侍りける時、曉鐘
- 1771 をく霜もさえ増るらん初瀬山尾上のかねの暁のこゑ 親敬〔ウ〕
- 晩鐘 季虔
- 1772 いたつらにけふもくれぬとをこたりの身をおとろかす入相の声
- 1773 そことなく暮にける哉山寺のかねのひゝきも空にかすみて 義実
- 或山寺に春の花盛見にまかりける時、再ひ参るへき
- なと契置けるに、さはる事共有て日をへてまうてえさり
- ければ、ある夕暮に其寺の鐘の声の聞えけるに読る
- 1674 おもひやる花もやあたに散ぬらんとを山寺の入相のこゑ 重朝
- 高砂の浦にとまり侍りける夜
- 1675 高砂のいそへの浪にうきねして尾上の鐘を枕にそきく 読人不知
- 深夜燈 氏輔
- 1676 怠りの身をはてらさぬともし火はあたに更ゆく影もはかなし
- 窓燈 重朝
- 1677 かゝけても今はわかよのふけはてゝ窓のとしひかすかなる影〔38・オ〕
- 1678 いたつらに我よふけゆく光哉ふみもまなはぬまとの燈 昌貞
- 飛岡天神奉納歌の中に、閑中燈 義智
- 1679 いたつらにまなはぬ窓のとし火は螢はかりの影もさひしき
- 大峯に修行し侍りける時、笙のいは屋といへる
- 1680 所にて思ひつゝける
- しつかなる心をてらせ奥山の岩屋にふかきともし火のかけ 慶昵
- 人の蹴鞠せる所にて
- 1681 まさこ地はやゝ暮かゝる庭鞠の数あるくつの音もしつけき 季虔
- 漁夫 兼愷母
- 1682 あみ縄のくるしくもあるかあま人の暇もなみの上にうかれて
- 釣父 実裕
- 1683 うき業はかはらぬ道かすまあかしをのか浦々いつるつりふね
- 1684 帰るさも同し浦とや夕浪に漕もをくれぬあまの釣舟 正房〔ウ〕
- 釣人の帰るを見て
- 1685 うら風に袖さむからしあま衣ひもゆふ波にかへるつりふね 親盈
- 樵夫
- 1686 山深き色香はしらぬ柴人もしはしやすらへ花の木かけに 親直
- 1687 分かへる爪木の道や遠からん月まちいつる山ひとのこゑ 景香
- 谷樵夫
- 1688 谷深きをとろか下も分馴てひろふ爪木の道はまよはす 季虔
- 逍遙舎十景の中に、樵路夕照
- 1689 暮かゝるつま木の道に残る日の影もさひしくうたふ山人 親暁
- 1690 夕日かけ照らす紅葉を折そへて袖や錦と帰る柴ひと 兼愷母
- 暮深く樵夫の帰るを見給ひて

にいみしうもてはやされけるを飛鳥井卿も見そなはし
絵ふて、深くめてさせたまひぬるとの御歌ともたま
はりけるをきゝて、よみてつかはし侍りける

(36・オ)

1652 雲の上も聞えやあけん浜千鳥たへなる跡を世に伝ふこゑ

氏輔

月次歌の中に、笛

1653 きく人の心も遠くすみわたるたか笛竹のさよ深き声

親暁

夜笛

1654 梅の花ちりかふ夜半の春風にあはれ吹そふ笛竹のこゑ

景雄

月下聞琴と云事を

氏輔

1655 松風のひゝきもすみてふくるよの月にしらふるよそのつま琴

三十首歌の中に、鏡

兼愷

1656 朝ことにあかすもみかけます鏡くもるにやすき人のこゝろを

月次歌の中に、衣

1657 をく露もあはれをかけて秋ことの月に馴ゆく夜半の衣手

昌貞

車

1658 ひと方に心ひかれて小車の道しある世をみな仰くらん

氏輔「ウ」

浦船

1659 沖つ船今や入江に漕くらしあしまにさはくうら人のこゑ

親直

1660 吹送る風の行衛もほの見えてけふりの波をわくる浦舟

定暁

遠帆連浪

1661 うら風の追手もしるくしら浪に同じ帆影や沖の友舟

実信

山川といへる所の湊にてもろこし船を見て

1662 治まれる秋津島根の浪風にもろこし船も心よすらん

季翹

渡舟

1663 みなれ棹さすかいとまも浪の上にうきて世渡る宇治の川長

氏輔

大坂より伏見にまかりける舟の中にてよめる

読人不知

1664 津の国のなにはの芦のよをこめてふしみにつきぬ淀の川舟

冬の月あかゝりける夜、淀川をくたり侍りけるに

1665 すむ月の氷をわけてさす竿の雫も寒しよとの川ふね

昌貞

(37・オ)

風月楼十二景の中に、渡頭舟

1666 立渡る霧のまよひにかち人の川瀬を遠み舟よはふなり

季虔

ものにまかりける時、或川の渡し舟に人余多つとひて

いとくも渡しはてさりければ、しはらく待わひぬる程に

日も既に暮近く成行けるを見て

親敬

1667 いそけともいくその人を渡し舟さすか日影もくれんとやする

筏

1668 うきてのみ世を渡る身は杣川の早瀬の筏さしもくるしき

重朝

1669 山川の岩瀬さしこすいかたしもすくるやかたき浮世なるらん

氏輔

月次三首歌中に、鐘

あまた遊ぶを見て

1642 散うかふ池の木葉のくれなゐを底にも染る浪のいろくつ 兼愷

鯉の龍門の滝を登りけるさまのうつしゑを見て

1643 落滝津空にも浪のたつの門雲路やこゝろの分のほるらん 季虔

虫 季虔

1644 人の上に思ひしらなにかたつふり心あたなるつの、あらしひ 〔ウ〕

養虫を見て 季融

1645 くれ竹の小枝にすかるみの虫のみのかくれかはうきふしやなき

月次歌の中に、蜘蛛

1646 雨はるゝ庭のまかきにくりかけて露の玉ぬくさゝかにの糸 親敬

貝

1647 浦風ものときき春の折えてや梅の花貝名にほふらむ 親敬

1648 汐風の霞をよする浦浪に春の色とやちるさくらかひ 季融

此所の貝かた村に、海きはより二町あまり打あかりて

山のすそいさゝかそはたち切岸めきたる所あり。昔

より今の世に至るまで其岸を切こほちて見るに、

土いとかたまりてさま／＼の貝の形をなせるあり。人みな

土貝となつてめつらしき見ものにもてはやしぬ。され

は、その名も土の貝形となれるよりたて初しならんと

いひつたふ。さきに其事を富小路何かしの卿こまや

かにかきしるしたまひて、もろこしにもいにしへは

〔35・オ〕

貝を貨となせるよしなといひのへたまひし奥に、

うま人のうしはき恵むかひありて土もたらとなれる

国かもとよませ絵へりけるを人の見せければ

1649 言の葉の露も玉なすかひありて土もたからの光そはまし 兼愷

爰なるかるさの浜辺に白灰てふ物をとゝのふる所

あり。其あたりの土を一尋あまり堀かへすに、地の

底にいと白くちいさき貝のからも、重千重につ

もりたるかおひたゝしなといふはさら也。海士ともそを

ほり出し火にてやきくたき白灰となして、あまねく

世に賣ひろむるになん有ける。浪の汀よりは一町

はかりもへたゝりたる小高き所に、いかなる世にいかなる 〔ウ〕

故ありて爰にのみかく埋もれぬるやらんと、誰もいといたう

あやしみ思へれと、其ことはりを弁へしる人もなし。さいつ

頃堀そめて五十年はかりも隙なく取用ふれと、今に

至りていさゝかもつくる事なし。されは、をのかとちの世

渡りにはこよなきたからにて侍りけるよと或浦人共

の申あへるをきゝて 景雄

1650 浦人もとるに尽せぬたからもてすむかひありと世を仰くらん

書

1651 神代より流たえせぬ道々のをしへはふかき水くきの跡 兼愷母

鹿兒島なる福島行通、文字かく事を好みて、殊

- 1622 陰深き砌の松に立なれてちきりやかはす千世の友つる 季休
名所鶴
- 1623 浪風のしつかなる世に住馴てつるも千年やまつか浦島 季休
雞
- 1624 暁の空にさひしき鳥のねはたかきぬ／＼をつけて鳴らん 氏輔
読人不知
- 1625 朝ことにをきてつかふるはしめそと誰にをしへの庭鳥の声 氏輔
百首歌よみ侍りけるに、暁雞
- 1626 老か身にいつより馴て鳥のねをあかつきことの友ときくらん 公
鷺
- 1627 緑なる松の木末に一むらの雪のしら鷺色もまかはす 昌貞
江鷺
- 1628 ひく塩は遠さかりゆく湊江の芦間に残る浪のしらさき 昌貞
月次歌の中に、鳥
- 1629 山からすうかる、月も影寒しよるへき枝の霜ふかき夜に 兼愷
読人不知
- 1630 さゆるよの埒にさはく山からすつはさの雪や払ひかぬらん 兼愷
雀
- 1631 秋風のさはけはさはく村す、め小田のなるこの方も定めす 季虔
秋動物と云事を

- 1632 かたうつらねぬよをわふる秋風に野への男鹿も声あはすらし 季融
冬獸
- 1633 くさむらのふしとの霜やさえぬらん夜半の狐の月になく声 季融
月次歌の中に、虎
- 1634 谷深く嘯ふく虎の声よりや吹出る風もはけしかるらむ 季虔
牛
- 1635 夏の日のあつさをうしの帰るさや山路の月に猶あへくらん 季虔
猿
- 1636 うらかる、秋の木末の木葉猿声も乱れてさはく山かせ 兼迢
秋風に色付ぬらしさ、くりの枝にましろの声さはくなり
- 1637 嶺樹猿叫 親直
- 1638 このはちる嶺の風のさゆる夜にたへぬ思ひやましらなくらん 親直
犬
- 1639 治まれる世には門もる里の犬のとかむる声もさすかすくなき 親直
淵亀
- 1640 底深き千尋の淵に萬代の契をこめて亀もすむらん 季休
瀬魚
- 1641 山川の玉もの陰も浅き瀬はかくれかねてやさはくうろくつ 親備
冬の初つ方ある所の池に赤くちいさきうろくつ

絵にあらはし、からやまとの歌共を人々にこひ求めけるに

よみて遣はし侍りける

〔ウ〕

1600 なにはつやなにも匂へるさつき梅今を春への色香ならねと 兼愷

1601 風さそふ匂ひもす、し難波津にさつきを時とさくや此花 季虔

1602 立花の花さく頃のさつき梅めつらしき名も匂ひそふらん 氏輔

鳥

1603 片岡の紅葉ちりかふ山風にみたれそまさる秋の色鳥 兼愷

1604 人とはぬ浅茅か宿の庭た、き朝けの霜や打払ふらむ 親敬

月次歌の中に春鳥

1605 なく鳩の声も霞みて山陰のはたやく烟ほのかなる暮 季虔

夏鳥

読人不知

1606 ほと、きすまつとせしまに短夜のあけぬとつくる鶏の声

冬鳥

読人不知

1607 霜さゆる芦へのたつの友千鳥声をかはしてよはになく也

月次歌中に、林鳥

〔32・オ〕

1608 風さはくはやしの竹のよもすから蟬の鳥やふしうかるらん 親敬

1609 くれぬとてねくら求むる村鳥も木深き方に友さそふなり 季虔

百首歌よみ侍りける時、鶴

1610 むれてたつ汐千の田鶴の諸声に千世や争ふ若の松原 季休

1611 夏刈の芦辺をこゆる夕浪にたてるもす、しつるの毛衣 読人不知

夜鶴

兼愷

1612 霜かれの芦辺にたてる老のつる子を思ふよはにうらみてやなく

智昭

1613 霜さゆる小夜もふけぬのうらさひて月に数そふ芦たつのこゑ

田鶴

清憲

1614 むしろ田にむれるるたつのねになきて夜寒の霜やしき忍ふらん

澤畔鶴

兼倫

1615 呉竹のふしみの沢にゐる田鶴のいく千世かけてすまんとすらん

月次歌中に、池鶴

〔ウ〕

1616 浅からぬ池のこゝろになれくて千年もすまん友つるのこゑ

親備

海辺鶴

1617 沖津浪風のふけぬのうらなれて立もさはかぬつるの毛衣 季虔

1618 夕汐の入江の芦のうら風に立そふ色や浪のしらつる 兼道

1619 千世よはふ声にさはらん浪もなし風静かなる浦の友鶴 親直

芦間鶴

1620 いく千世もかはらぬ中の友つるや芦への浪にむれて立らん 昌貞

読人不知

1621 なには濁つるの毛衣重ねても芦のよさむやわひて鳴らん

百首歌の中に、鶴馴砌

浦松

1586 あけ渡る浪の烟も立そひてみとりにかすむ浦の松原 兼倫

1587 ひとしほの緑をそへて春ことにさかふる色や若の浦松 兼愷母

池辺松

親直
(30・オ)

1588 いく千世もかれなてすまん池水に松も葉かへぬ影うつすらし

月次歌の中に、庭松

1589 花紅葉うつれはかはる折々もふりせぬ色や庭の松か枝 季休

庭に手つから植置し松のいと年たけゝるを見て

1590 引うへし我身も今は年月のふりぬる友よ庭の松かえ 氏輔

百首歌よみ侍りける時、松経年

1591 常盤なる岩ほの松もむす苔の深きや千世の姿とも見ん 氏輔

名所松

1592 汀なる浪さへ色の深緑かけをひたせる滋賀の浜松 公

春の日、志賀にまかりける時

1593 うら風の音さへ春はうつもれて霞こめたるから崎のまつ 季呢

住吉にまうて侍りける時

1594 風の音もかみさひ渡る住の江の松の年なみ幾世へぬらん 昌貞〔ウ〕

四国にまかりける時、屏風浦といへるにて、昔西行上人の

久にへてわか後の世をとへよ松跡忍ふへき人もなき身そ

と読たりしふる跡を尋みるに、今に老たる一木ありて、

みな人ひきの松となんいひならはし侍りければ

1595 ひさにへし松に昔をしのふなり其言の葉の跡をたつねて 景雄

加世田の吹上となんいへる所は、浜辺より真砂いとうつ

たかうかさねあけて、たとへは雪の山たゝみつらねたる

やうなり、そこにおひ出し松ともいさこの中にいく

ひろとなく埋もれ果て、わつかに木末はかりあらはるゝ

とそいふ、枝葉にもいさこつもりてみとりの色も塩

風吹からしたり、そを見にまかり侍りける時

1596 時しらぬ雪をあらしに吹あけの松のねさしもいく世々の春 季虔

同じ所にて

1597 浜風にまさこや高く吹あけの松のみとりも色かはるまで 兼倫

日向の高なへにて弾琴松といへるひと木を見て、其

ふる事ともたつねきゝてよみ侍りける

景雄

1598 いにしへに心ひかるゝことのねを今もしらへて松かせそふく

奈良の猿沢の池のつゝみにひと木の柳あり、これ

なん昔のうねめかきぬかけの柳といひ伝へ侍るよし

人の申ければ

1599 わきも子かねくたれ髪の俤も老木にのこる青柳のいと 兼愷

新納時升といへるか、おほやけのつとめありて難波に

やとりる侍りける比、前栽に五月梅となんいへるをうつし

うへて、めつらしくもてはやしける余り其花の形を

橋苔

1565 山人の跡たに見えすむす苔のみとりをわたす谷のかけはし 氏輔

幽径苔

1566 松杉の風こそかよへ人とはぬ片山かけの苔のほそみち 昌貞

読人不知

1567 たれすみてみねのいほりにかよふらん苔に跡ある谷の細道

苔為石衣

氏輔

1568 さ、れ石のなれるいはほの苔衣千世に八千世やかさねきぬらん

百首歌よみ侍りける中に、岡篠

1569 朝日かけさすや岡辺の玉さ、に露も光を猶みかくらん 清憲

竹

1570 呉竹のなほきにたへす打なひく風や時代の姿なるらん 兼愷

1571 年ことにおひそふ竹の深緑千世萬代の数もつきせし 親敬

月次歌の中に冬竹と云事を

1572 冬かれの木葉の後の深緑風のやとりや庭のくれ竹 氏輔

里竹

清憲

1573 よはなれてたかすむ庵そ山もとにひとむらかこふ竹のはやしは 昌貞

庭竹

兼愷

1574 すくならぬ身のうきはしやいさむらん親のをしへの庭の呉竹

1575 打なひく若葉の竹の朝風にこほる、庭の露もす、しき 昌貞

百首歌よみ侍りける中に、窓竹

1576 隙もなく音はしくれてふくるよの風に窓うつ庭のくれ竹 清憲

竹為友

1577 呉竹のなほきや世々の深緑かはらぬ友と立なれて見ん 智昭

肥後盛徳か別荘の竹隠舎となんいへるにまか

りて、竹のおひしけるを見て

1578 すむ人もなほき心の友なれやうきよへたつる宿の呉竹 兼道

百首歌よみ侍りける時、木

1579 春秋の花も紅葉も常盤木の千世の緑に並ふ程なき 清憲

山櫛

1980 神代より陰もふりせぬ榊葉のさかへ久しき天のかく山 親敬

松

1581 ふく風も枝をならさぬ春にあひて猶色そはん千世の松かえ 親暁

1582 ふりにけるみ谷かくれの山松も春にはもれぬみとりをそそふ 清憲

谷松

1583 下陰の落葉もいくよつもるらん深きみ谷の松の老木は 智昭

岩松

1584 むす苔のみとりも深き岩根松いはねと千世の色は見えけり 親直

岩松

1585 動きなき岩ほにおふる姫小松これや千年のねさし成らん 読人不知

氏輔

1545 山にそひ水にたよりの所えてむすふいほりやすみよかるらん

1546 やま深きいはねのいつみいつまでもたえぬ契を我もむすはん

1547 松風もかよふ笈の山みつにうきよの外のひ、きをそきく

貞如
(27・オ)

1548 山陰の苔にちりなきかよひ路は払ふもさひし庭の松風

昌貞

1549 はけしさも心さはかす程やなきなるれはなる、軒の松かせ

季休

季翹

1550 遠からぬ林かくれもすむ人のこゝろからなるみやまへのいほ

1551 世のちりも何かのこらん山陰の岩根の水にすますこゝろは 清憲

1552 さひしさをさそふやいつれ山陰の水のひ、きに松風のこゑ 親備

1553 軒端なる山松かえの夕からすねくらとひくる声もさひしき 清方

1554 たつねいるふもとの道は近けれと心の奥の深き山かけ 義智

1555 雨そゝく草のいほりのうちしめりふるきを語るよるの山陰

氏輔

秋深き比、兼愷あやめ田の山荘逍遙舎にやとりみけるか

灌漑蔬園藥圃中 狂歌顧影歩西東 潭荷既

敗霜前緑 山柿纔生露底紅 陰壑帰雲寒晩

照 深林棲鳥静秋風 猶有孤筇不相負 欲携

(一)

餘興問隣翁となんいへる詩を作りて、山住の身は

かゝるさひしさにこそ侍れなと申贈りける、折ふしをのれも

岡崎の別荘風月楼にやとりみ侍りければ

1556 遠近の山こそかはれさひしきは同じ秋なるいはの夕くれ 季虔

とよみて遣しける其奥に、季虔も又からうたを作り

林巒雲斂霽余清 日夕空庭露欲生 江上風

臨曲檻待 山間月徙胡牀迎 階前深映莓苔色

竹外聞傳泉石声 村落春歌烟浦火 居然猶

自入閑情となんかきつけて世はなれたるいはりの秋は

いつくも同じ哀にこそと申贈りければ、斯読て遣はしける

1557 秋風も心とすめる山陰の月のゆふへはなにかさひしき 兼愷

をのれか山荘にこもりみける比よみ侍りける歌の中に

1558 郭公誰にきかせん山里の軒端の月にもらすひとこゑ 実先
(28・オ)

1559 山深き竹の掛樋の谷水もうきよの塵をあらひてやすむ 実先

百首歌よみ侍りける中に、閑居 清憲

1560 なすわさもなくて月日やすきの門さすかうきよをへたて住身は

閑居草

1561 たか為に打払ふへき折もなしこゝろとつる蓬生の庭 景雄

江芦 季融

1562 乱れそふ入江の芦のかたよりにほなみをよするまの、うら風

百首歌の中に、苔

1563 むす苔の色より外は払ふへきちりこそなけれ庭の松かけ 親敬

1564 やり水のせはき岩間はむす苔にせかれていと、音むせふ也 季休

- 1520 山里の秋はさらてもうき物を鹿のねきかぬ夕暮も哉 清憲
- 1521 秋風も身にしむ暮に鹿なきてこのはかつちる山の下陰 読人不知
- 1522 百首歌よみ侍りける時、山家冬 氏輔
- 山深くかきこもる身のかくれかもあらはになりぬ木々の冬枯 〔ウ〕
兼愷
- 1523 山家の松もいく年ふりぬらんなれぬあらしをわふとせしまに
- 百首歌よみ侍りける時、山家水 清憲
- 1524 谷水の同じ流をたれか又くみてもしらん奥の山すみ
- 山家道 尚貞
- 1525 山深くしけりにけりな小さ、原うきよに通ふ道もなきまで 智昭
- 1526 柴人の外にはかよふ跡もなしわかすむ山の陰のほそみち
- 山家苔 親直
- 1527 朝夕に我のみかよふ山陰の岩根松かね苔むしにけり
- 山家松 親敬
- 1528 さひしさは思ひし俣の山里にまた聞なれね嶺の松かせ 昌貞
- 1529 松にふく風より外は音つる、人こそなけれ山の下のほ 清憲〔26・オ〕
- 1530 立なる、軒端の松は老にけりわか山住の年もしられて
- 百首歌よみ侍りける時山家鳥 親敬
- 1531 雲深き軒端の山にきこゆなりねくらに帰る鳥のひと声
- 月次歌の中に、山家夢
- 1532 山深くへたてすむ身も折々はみやこにかよふ夢のうき橋 義智
- あやめ田といへる所の山陰に逍遙の舎をいと名み
- 折ふし行かよひ侍りけるによめる 兼愷
- 1533 浅しとやよにも見えん山水のひとかたにのみすまぬこゝろは
- 同じ山荘に園中甘勝の題をえりて詩を作り侍り
- けるつゐてに、獨鶴山といへるを 兼愷
- 1534 やとして我も千年や立なれんすむてふ鶴の山深きかけ
- すむ鶴の山しつかなる陰のいは千年もしるし人のよはひは 氏輔
- 1535 同じ所にて折々よみ侍りける歌の中に
- 1536 苔深き緑の庭に山松の落葉の数も見えてさひしき 兼愷〔ウ〕
- 1537 山からも身のかくれかや頼むらんわかすむ谷の陰のうつほ木
- 1538 山住も道はなほかれとはかりを竹の掛樋のみつからそしる
- 1539 折てたく爪木の柴の夕烟こゝろほそさもよそに見ゆらん
- 1540 分ならず我より外に山鳥の跡もありけり岩のかけみち
- 1541 いほむすふ山下陰の岩根水こゝろも清くすみ馴て見ん 兼愷母
- 1542 深からぬ山路のをさ、かりにたによのうきふしを思ひ忘れよ
- 同じ山荘に折々まかりてよみ侍りける歌の中に 兼愷
- 1543 すみなる、心の友と山陰に岩もる清水猶やせかまし 親敬
- 1544 庵しめてうき世へたつる山陰の岩垣しみつ囁なすみよき 季虔

- 志賀にまかりける時
1498 志賀の浦やふるき都の月花に人目は残る春秋の空 景雄
- 古寺
1499 露霜はいくよふりぬる山寺のかはらの松の色もさひしき 親敬
(24・オ)
- かねの音にそことはしるし松杉の陰もかさなるみねの古寺 重朝
1500 四天王寺に詣侍りける時
- わしの嶺深き匂ひをうつしきて世々にさかく法の花園 兼愷
1501 三井寺にてよみ侍りける
- 濁りなき三井の清水を結ふ手に心の塵も何かのこらん 昌貞
1502 花林寺といへるにて花を見て
- 山寺のみのりの声も匂ふまて花のはやしに春風そふく 読人不知
1503 古寺夕
- 花の色もほのかになりて入相のこゑより霞む小初瀬の山 昌貞
1504 月因歌の中に、古寺道
- 櫛つみあかやくむらん山寺の苔むす庭にかよふほそみち 義陳
1505 古寺松
- いく年かつもりきぬらん古寺の軒端に深き松の朽葉も 親暁
(ウ)
1506 ある山寺にやとり侍りける夜よめる
- 音つれてさひしかりけり山寺の入相の後の庭の松風 氏輔
1507 田家
- 夜寒なる賤か山田のかりいはいねかてにのみ露や置らん 清方
1508 小山田のかりそめふしのいなむしろ幾夜の露をしき馴ぬらん 読人不知
- 山家
1509 みねの雲谷の烟もをのつからうき世へたつる山陰の庵 氏輔
- おもひいる山のいつくもうき事は身にそふ物かみねの松風 季翹
1510 山家風
- はけしさはいとふにふかき山住の心もしらぬ軒のまつかせ 実裕
1512 さらに又打払ふへき塵もなし山下かせに庭をまかせて 季虔
- 山かせの音信たえぬ松の戸はへたてこし世に夢もかよはす 義陳
1514 雑歌の中に
- まはしたく烟の末も吹しきて軒端の松にさはく山かせ 氏顕
1515 山家烟
- ほのかなる烟の末もさひしきはたかすむ山の夕くれの空 涼相君
1516 百首歌よみ侍りける時、山家雲
- 谷の戸は朝ゐる雲の深ければあくるもをそき松陰の庵 親敬
1517 山家夕
- 聞なる、松の風もしはの戸のさすかさひしき夕暮のこゑ 兼定
1518 白雲の夕ゐる嶺に庵しめて入相の鐘をふもとにそきく 清憲
- 1519 山家秋

- 1477 散うかふ花にせかれて谷川の渚や桜の名をと、むらむ 季虔
- 1478 山川に春のなこりをせきとめよ散しく花の渚となるまで 読人不知
- 1479 水上はいさしら糸の雲よりみたれて落る布引のたき 氏輔
- 1480 冬は猶雪のしら糸かけそへて乱れそまざる布引の滝 親備
- 1481 谷深き岩間に落る滝つせの音もと、ろに山風そよく 景雄
- 1482 五月雨に水のしら浪岩こえて山もと、ろに落る滝津瀬 季休
- 1483 落滝津岩間をつたひちる浪や春の花瀬の名に流るらん 季虔
- 1484 ちるとな松の木陰の池水は千世もくもらぬ鏡なるらし 親直
- 1485 濁りなき岩ねの雫せきいれて心のちりをあらふ池みつ 親敬
- 1486 はせを葉のみとりは池にかけろひて底にもさはく風のすゝしさ 氏輔
- 霧島山のいて湯にてよめる (23・オ)
- 1487 出る湯の烟の末も其まゝに霧てふ山の名にや立らん 季虔
- 1488 よつの海に行かふ千船も、船も浪風た、ぬ世を渡るらし 兼伯
- 1489 桜麻のおふの浦風吹まゝに汀に浪の花そちりかふ 親敬
- 1490 風わたる入江の尾花打なひき秋や立そふまのゝうら浪 清方
- 1491 なには濁霞む浪間に匂ひきて梅か香深し春の浦風 清憲
- 1492 なには江の芦間をわけてこく船のやかて跡なく霞む浦浪 景雄
- 1493 心にもあらぬ詞をかるの市世にたつ程もやすけなの身や 智昭
- 1494 はかなくも何をうるまの市人の争ひたちて世を渡るらん 季休
- 1495 衣うつ音もかすかにふくるよの月のあはれや深草の里 季融
- 1496 深草やうつらの床の跡とへは竹のは山に秋かせそふく 読人不知
- 1497 住あらず里はうつらも床しめて野となる秋や露のふか草 氏輔
- 故郷
- 名所星
- 市商客
- 名所市
- 春のあした難波の浦にて
- 春浦といへる事を
- 百首歌よみ侍りける時、名所浦
- 海國

- 1456 そめくし紅葉の色もさそはれて名にあらはるゝこからしの杜
なけきの杜にて鶯のなくを聞て
- 1457 何をさはなけきの杜のこかくれになく鶯のこゑかすむらん 季虔
名所野 (21・オ)
- 1458 いく千里千重に霞みて武蔵野の春は果なき名にそ立そふ 清方
春の頃、奈良の春日野にて 兼愷
- 1459 のとかにもかすみにけりなかなすか野の飛火の烟跡ものこらて
逍遙舎の摘翠原といへるにて
- 1460 朝な夕なつむ手もあかし山里につゝく野原の草のみとりは 清憲
同じ所の養種圃
- 1461 水そゝきつちかふそのゝ草々も心にまかす種にこそあれ 氏輔
- 1462 朝夕に老を養ふたねなれやそのゝ草々つむもうふるも 読人不知
百首歌の中に、関 季休
- 1463 板ひさしいたゝくそあるゝ不破の関たゝ雨露のものにまかせて
関行客
- 1464 ゆく人の心とむらんすまの関月もくまなき浦のみるめに 季翹
関雞 (ウ)
- 1465 逢坂の鳥もそらねか関の戸の明てもくらき杉の下道 親敬
三十首歌よみ侍りける時、橋 読人不知
- 1466 神代よりいく萬代の末かけてその名はくちぬ天の浮はし
- 1467 朽にける昔なからの橋はしらきゝわたる名は今もたえせず 季休
名所橋
- 1468 打わたす人のゆきゝもいくよろつよゝに絶せぬ瀬田の長橋 親備
谷橋
- 1469 これも又世渡る道や柴人のゆきゝ危うき谷のかけはし 清憲
逍遙舎園中の琴橋
- 1470 松にふく風もかよひて山水の音をしらふる庭の琴はし 季虔
河 清憲
- 1471 流れての世々にたえせぬ飛鳥川かはる洲瀬はさもあらはあれ
- 1472 たえす猶名に流れたる久堅の天の川水幾世すむらむ 季融 (22・オ)
百首歌よみ侍りける時、名取川
- 1473 紅葉々やちりてせくらん竹川の渚の緑も色かはるまで 親敬
宇治にまかり侍りける時
- 1474 吹おろす園の尾山の朝風にうきてなかるゝ宇治の河霧 昌貞
葉月はかり月いとあかゝりける夜、伏見にて人々月
- 1475 見侍りける時よめる 読人不知
くるゝよのせゝの川霧晴にけり宇治の山かせ月にふくらし
- 1476 久かたの空ゆく月の桂川たえすいくよの秋にすむらん 読人不知
桜の渚といへる所にて花の散しけるを見て

1438 霜をふみ星をいたゝく暁のをしへにくらき身をいか、せん

暁寢覚

1439 またてきく暁もなし老か身のね覚の後の庭鳥のこゑ 氏輔

朝

1440 道しある世は怠らてあさ沓のあさなくに霜やふむらん 氏輔

朝山

1441 すたれまく袖もみとりの色そひて明る朝戸に向ふ山のは 季翹

百首歌よみ侍りける時、名所山

1442 みよしの、花より後の名にたつやたつ田の山の秋の紅葉々 季休

名所歌の中に富士

1443 ふしのねの雪を重ねて高き名はもろこし人も仰きてやしる 氏輔

春の初つ方、富士の山を見て

1444 春の色も争ひかねてふしのねの雪の光は霞むともなき 季虔

伊勢国にて朝熊山の富士見台とかやいへるに登り

侍りけるに、爰よりはるくとふしの高ねを望めは、多くの

山々を皆見こしてふせこなとのやうにわつかにあらはれ

侍るにこそと人の申ければ、さもやと覚えて

1445 時しらぬ高ねの雪の色なれや千里に霞む雲の一村 兼愷

(20・オ)

天のかく山の遙に霞みけるを見て

1446 千早ふる神代なからの面影もかすめは遠き天のかく山 景雄

吉野にて、袖振山を見て

1447 乙女子か袖ふる山の夕霞はるやゆたかに立かきぬらむ 兼愷

春深き比、宇津の山をこえ侍りけるに

1448 もみち葉も心にうつるうつの山春はみとりのつたの下道 兼貞

同じ山を夜深くこゆるとてよみ侍りし

1449 夜をこめて心ほそくも行末をたとはるは夢かうつの山こえ 季虔

鹿籠といへる所の山にてこかね堀出けるを見て、かのみち

のく山のふる事とも思ひ出て

1450 是も又世々にさかへん国津風こかねはななく山はうこかて 兼愷

遙に高千穂の峯を望みみて

1451 吹おろすふもとの方は雲こりてあらしに浮ふ高ちほのみね 季融

逍遙舎甘勝の中に烟霞嶺といへるを

1452 ましはたく烟も春の色そへて軒端の嶺や猶霞むらん 清憲

あやめ田の山荘の前なる岡へに桜と楓とをあまた

うつしうへて、雲錦岡となつけ侍りける時

1453 花の雲紅葉の錦おりくにな、む岡辺の色そこふかき 兼愷

1454 春秋の花も紅葉も岡のへの雲や錦の名には立らむ 親敬

百首歌よみ侍りける時、名所杜

1455 いく千世もかけてさかへん春ことにみとりをそふる若松のもり 季休

清憲

(ウ)

- 1417 さそはる、行ゑもそこ定めなき風や心のうき雲の空 昌貞
月次歌の中に、晩雲
- 1418 今はとて嶺にわかる、山姫の雲の衣のきぬくの空 兼愷
海辺晩雲 (18・オ)
- 1419 海こしの遠山かつらほのくと明ゆく浪に雲そ別る、 親敬
- 1420 住吉の松の木間に横雲の別る、方や淡路島やま 季虔
嶺雲
- 1421 出る日の光は空にうつりきてしはしいさよふみねのしら雲 清憲
逍遙舎園中廿勝の詩の題にて歌よみ侍り
ける中に、乗雲台といへるを
- 1422 分いりて心たかくもなりにけり浮世へたつる雲のうてなは 氏輔
読人不知
- 1423 しら雲の名にや立そふ春ことに花分のほる嶺のうてなは 氏輔
百首歌よみ侍りけるに、雨
- 1424 草も木も花咲みのる折々にもれぬや雨のめくみなるらん 清憲
夜雨 (ウ)
- 1425 音つる、夢より後のよるの雨ふるきをしのふ袖もしほれて 氏輔
橋雨
- 1426 雲霧もさそはれ渡る山風に村雨まよふみねのかけはし 親敬
逍遙舎十景歌の中に、竹崎過雨と云事を
- 1427 なひきそふかけもす、しき竹崎のは山にすくる夕立の雨 公
- 1428 山かせに一むらなひく竹崎のみとりす、しきゆふたちの跡 兼愷母
- 1429 色かへぬ緑は深き竹さきのは山くもりて猶しくるなり 親暁
風月楼十二景中に、暗谷雨
- 1430 高ねよりさそひてくたる村雨に嵐もくらき谷の下かけ 季虔
烟
- 1431 ほのかにも烟そたてる難波人芦火たくなる方もしられて 氏輔
月次歌の中に、薄暮烟
- 1432 入日さす木末は高くあらはれてけふりにくる、遠の山本 親敬 (19・オ)
海辺烟
- 1433 すまのあまの塩やく烟打なひき関の戸あけてくもる浦風 親敬
- 1434 からき世を渡るや同し浦々にもしほやくてふあまの烟は 氏輔
遠村暮烟
- 1435 ましはたく遠山本に雨すきて烟もしめる夕くれの空 読人不知
夕といふ事を
- 1436 ねくらとふ鳥の声にや答ふらんゆふへを告るかねのひ、きは 季虔
百首歌よみ侍りける時、暁
- 1437 里遠き霜夜のかねの音さえてね覚の窓に月そ傾く 氏輔
読人不知

- 1396 あつき弓引わかれては今更にちきりし中も遠さかり行 季虔
 1397 をしかへし頼む契もつき弓の今は誰にか心ひくらん 智昭
 月次歌中に、寄糸恋
 1398 いつまてか手引の糸の打はへて長き思ひにむすほゝるらん 親敬
 1399 河内女の手染の糸のいつまてか色には出す思ひ乱れん 氏輔
 百首歌よみ侍りける時、寄錦恋
 1400 今は世にうき名やたゝん唐錦色のちしほにおもひ染ては 清憲
 寄車恋 氏輔
 1401 あたにのみ月日を送るをくるまのめぐりあふへきよはもしられす^(ウ)
 寄舟恋
 1402 風むかふ沖津塩瀬にこく舟のうらみてのみや恋わたるへき 親敬
 1403 今はたゝ心つくしのまつら船まつにたよりの風たにもなし 智昭
 1404 海原にうきてたゆたふ大ふねのよるへ定めすこひやわたらむ 景雄
 寄縄恋 兼愷
 1405 くりかへし長き思ひをしらせても猶うけひかぬあまのたく縄
 1406 あふ事もなみに朽なんあみ縄のくるしや人をうらみ果ては 季虔
 寄網恋
 1407 あま人のあみのうけ縄打はへてくるしき恋に身をや朽さん 氏輔
 百首歌よみ侍りける時、寄燈恋 親敬
 1408 消かへるうき身も今はよそならしそむけ果たる閨のともし火
 寄夢恋 季休
 1409 今はたゝ夢路はかりの契をやまとろむ夜半のなくさめにせん^(17・オ)
 月次歌の中に寄涙恋
 1410 世にしのふ思ひも千々に乱れきて袖の涙はよるそ数そふ 季虔
 1411 いつまてかうき身にたえぬ泪川袖に洩せくおもひなるらん 清方
 寄面影恋
 1412 身にそふもあはれかひなき契かなうき面影の忘れかたみは 親備^(ウ)
 浪の藻屑 卷之六
 雑部
 日
 1413 岩戸あけし神代も遠き久堅の天津日影そ今に曇らぬ 氏輔
 天象歌の中に
 1414 西の海の塩路の末も雲きえて浪に入日の限をそ見る 清憲
 風
 1415 をしなへてならさぬ四方の木末にや治る国の風も見ゆらん 親敬
 野風
 1416 やとりとふ袖さむからし旅人の跡吹をくる野への夕かせ 季休
 百首歌よみ侍りける時、雲

1373 山鳥の尾ろの鏡の影たえてうつろふ中にねをのみそなく 親備

寄鶏恋 氏輔

1374 夜もあけは人もとかめんとはかりに別やいそくたかけの声

行末を契る心のふかき夜にあげぬと急ぐ鳥の音はうし 季休

寄雁恋

1376 きぬくの袖の別になきそへてうき中空にかへるかりかね 清憲

寄山鳥恋

1377 ねをそなく逢夜へたつる山鳥の尾ろの初尾の長き思ひに 兼愷母

百首歌よみ侍りける時、寄獣恋

1378 色かはる人の心の浅茅山秋のうきねを鹿もなくらむ 氏輔

寄馬恋

1379 うき人はしるや野飼のあら駒もなれてひかる、心ありとは 氏輔

月次歌中に寄鹿恋

1380 ねになくも身のよそならぬゆふへ哉妻こふ鹿の思ひしられて 兼愷

清憲

1381 なれも又うきつまこひになく鹿の思ひや同しゆふへなるらん

百首歌よみ侍りける時、寄虫恋 季休

1382 ひとりぬる夜は長月のきりくすかことかましきねこそ鳴るれ

寄蛛恋 親直

1383 くりかへしたのむ契もうき中はたゆるにやすきさ、かにの糸

1384 兼てより契りもをかぬ夕暮にかけてかひなきさ、かにのいと 清憲
〔ウ〕

月次歌の中に寄鏡恋

1385 へたてゆく心はつらし山鳥のはつ尾のか、みかけも残らて 親敬

1386 今はた、たえぬ思ひのます鏡うつる心や人にうらみむ 親直

寄枕恋

1387 よなくの思ひはつけぬつけ枕たれゆへか、る涙とかしる 氏輔

1388 逢事の夢さへうとき枕には恨もちりも猶つもりぬる 季虔

1389 身のうさのかすくつもる思ひ哉塵もはらはぬよはの枕に 親備

百首歌よみ侍りける時、寄筵恋

1390 独のみふしみの里のすかむしろいくよをあたにしき忍ふらん 季休

1391 しきわひぬまつよの数をかさねきて塵も積れる床の小筵 清憲

寄衣恋

1392 涙もやしらせそむらん恋衣思ひたつより袖ぬらせとは 氏輔

智昭

1393 こりすまに塩やくあまの濡衣うらみてのみや身をもくたさん 読人不知
〔16・オ〕

1394 逢事はかた野の原のかり衣うらむる程のたよりたになし

寄帯恋

1395 とけやらぬ人の心よ下の帯の長き契をいつかむすはん 季道

寄弓恋

百首歌よみ侍りける中に、寄湊恋

1351 ぬれ増る袖の湊のあたなみは立きはきつ、よる舟もなし 季休

1352 みなと江によるみつ汐のいやましに深くや人を思ひ渡らん 清憲

寄江恋

1353 難波江の深きうらみに朽もせて何みをつくし恋渡らん 氏輔

百首歌よみ侍りける中に、寄井恋

1354 今は又影さへ見えす遠さかる中は浅かの山の井のみつ 清憲

寄草恋

1355 かりにたに契らぬ物を夏刈の玉江の芦のた、ひとよとは 季虔

1356 風さそふ池のうき草一かたによるはおもひの猶しけりゆく 氏輔

読人不知

1357 うつりゆく契もうしや月見草の初花すりのころもへすして

寄歎冬恋

1358 山吹の花の千入を見てもしれいはぬおもひの色にそむとは 季虔

月次歌の中に、寄昌蒲恋

1359 あやめ草あやなく人をこふるかなうきにたえせぬねのみなかれて 季虔

1360 菖蒲草むすふひとよの枕にも長きねさしやかけて契らん 親直

寄竹恋

親直

1361 くれ竹のつれなき人にしらせはや身にうきふしのつもる思ひを

(14・オ)

寄木恋

1362 うき人の心の花もよそに見て身はみ山木のあたに朽なん 公

1363 かれ／＼になりにはける哉やとり木の浅きにならふもの契は 智昭

寄埋木恋

1364 人しらて朽なん果のかひやなきおもひにしつむ谷の埋木 季休

寄松恋

1365 夜深くも思ふ方よりふく風は軒端の松にまつそこと、ふ 清憲

1366 音信もうはの空にやかよふらんこぬ夜更ゆく宿のまつ風 親備

1367 山松のやますもこふる思ひかなつるにつれなき人の心を 景雄

月次歌の中に、寄杉恋

1368 しめ縄の長きをたのむ行末もかはらぬ色やみわの神杉 季休

寄柳恋

1369 いつよりかとけてむすはん青柳の糸にみたる、露のちきりは 季融

寄花恋

1370 うつり行人のこゝろの花の色ふかくはいかておもひ染けん 親暁

1371 たか方の色香や深きあた人の心のはなそ我にうつろふ 氏輔

百首歌よみ侍りける時、寄鳥恋

寄鳥恋

1372 きぬ／＼の空にうかりし鳥のねを独寝覚の床にこそまで 氏輔

寄山恋

1329 行末を誰にかとはん心よりふかくもまよふ恋の山路は 氏輔

百首歌よみ侍りける時、同じ心を

1330 今はた、袖こす浪の隙そなきかけし契の末のまつ山 兼愷

寄野恋

1331 かれ／＼のうらみも今は深草の野となるはてや秋風のそら 季虔

1332 色かはる秋こそうけれ人心あたの大野のあたしちきりは 智昭

寄橋恋

1333 恋渡る心やしるへよなく／＼にはかなくかよふゆめのうき橋 清憲

百首歌よみ侍りける中に寄関恋

1334 つれなきの人の心の岩かとにこえそわつらふ逢坂の関 兼愷

清憲

1335 逢坂の名をたのみてもかひそなき関路へたつる人のこゝろは

寄杜恋

1336 しられしな忍ふの杜の露時雨そめし思ひの色ふかくとも 氏輔〔ウ〕

1337 いかにして長き契もたのまゝし人はうき田の杜のしめなは 季休

季翹

1338 いたつらにきえん下葉の露の身はあはての杜のあはれいつまで

寄水恋

1339 わきかへる心の底をいつよりか山下みつのもらしそむへき 親直

寄河恋

1340 飛鳥川かはるは人のうきせにて思ひの渚そ身に深くなる 昌貞

1341 あたなみはたつともよしや中川の逢瀬絶せぬ契なりせば 季翹

寄滝恋

1342 いかにしてせきかへさまし袖の上にあまる涙のたきつこゝろは 季休

1343 せき兼る心の中の滝津瀬に袖はなみたの玉そ数そふ 季融

月次歌の中に寄池恋

1344 いひいてぬ底の心は月に日にます田の池の深きとしれ 義陳

寄海恋

1345 千尋ともいはぬ限は伊勢の海の深き思ひもかひやなからん 氏輔

寄浦恋

1346 もしほ火の下にこかるゝ烟さへ心にすまのうらみやはなき 季虔

清憲

1347 烟たつ空にもしるやもしほやくあまの住てふうらみわふとは

季融

1348 思ひのみつもりの浦による浪のみるめなきさに身をもくたかん

恋三十首歌の中に寄浜恋

1349 かひなくも身にやかそへんいせの海の浜の真砂の尽ぬ思ひを

寄磯恋

1350 あらいそのいはねの浪の打いてゝいはゝや人にくたくこゝろを 氏輔

(12・オ)

(13・オ)

1305	月次歌中に、春恋 春浅き雪間の草のはつかにも見せはや人にもゆる思ひを 兼愷	1317	契り置し言の葉草もうら枯て人の心の秋風そふく 読人不知
1306	秋恋 身につらき秋は木葉の色よりもかはるそ人の心なりける 氏輔	1318	吹まよふ嵐の末にゆく雲のうきてたえぬは思ひなりけり 親敬
1307	むすひをく契たえすは萩の葉の露はかりなる音信も哉 親直	1319	なひくともたのみつへしや浮雲のうはの空なる人の心を 読人不知
1308	我袖の露も時雨ももる山の下葉の色に出んとやする 尚貞	1320	消かへりしたふうき身をうき雲のうはの空にや人の見るらん 兼愷
1309	冬恋 定めなき人の心よ神無月しくる、空もうきたくひにて 季虔	1321	我も又けたぬ思ひそこりすまのうらみてたつるけふくらへに 親暁
1310	月次歌の中に、月前恋 よな／＼の袖の涙にやとしては思ひありとや月にしられん 兼愷 <small>（11・オ）</small>	1322	あまのたく烟の末にしらせはや我もうらみてもゆるおもひを 親備
1311	うき人の涕そへてかた敷の袖の露とふよな／＼のつき 季虔	1323	夕烟なひかぬ中のうらみより身はきへかへるあまのもしほ火 義智
1312	寄月恋 こよひとはたのめぬ人も山のはの月にむかへはおも影そたつ 季虔	1324	なひくへき心もしらすいつまでかおもひのけふり下むせふらん 月次歌の中に、寄雨恋
1313	今はた、袖の涙にありしよのおもかけさそふ月をやとさん 昌貞	1325	ほしわひぬ人の心のうき雲になみたの雨のはれぬたもとは 季虔
1314	見るたびに猶面影はそふ物を月やあらぬと何かこつらん 清憲	1326	こぬ人のさはりをかこつ袖の上に涙ふりそふよひのむら雨 氏輔
1315	寄月別恋 わすれしのかたみをとへはきぬ／＼の袖のなみたに有明の月 清方	1327	数々にぬれて色そふ思ひかなはてなき恋の道芝の露 兼愷
1316	五十首歌の中に寄風恋 今は身にたのむゆふへもなき物をなまつ風のおとろかすらん 季休	1328	うらかる、中は浅茅の秋の露あたの契をなにむすひけん 親暁

- 1283 くつのはのうらみを人に伝へてもおほつかなしや風のたよりは
互恨恋
- 1284 色かはる秋の末野のまくつ原うらむや同じこゝろなるらん 親敬
- 1285 我もいさ恨みや果んうきふしはかはらぬ中の心くらへに 景雄
- 1286 たか方のうらみか深き里のあまのかなたに立たぬ煙は 読人不
知
- 1287 偽のあるはならひになしはて、我かまことをや今はうらみん 景雄
月次三首歌の中に、恨身恋
- 1288 つらしとも今更たれをうらみまし心ひとつのおろかなる身は 義智
恨切恋
- 1289 あまのすむうらみを人にかけしより身はもくつ火の消んとやする 季虔
百首歌よみ侍りける時、絶恨恋
- 1290 あふ事は絶てなきさによる浪の立かへりてや身をもうらみん 季休
絶恋
- 1291 いまはた、久米路にわたす岩橋の絶にし中よふみもかよはす 氏輔
- 1292 契り置し露のかこともかきたえてふみも通はぬ恋の道芝 清憲
- 1293 たえてうき中はあき田のひたふるにおとろかすへきたよりた 景雄
になし
- 1294 今は又おとつれもなし山水のこほるかけひのたえ／＼の中 氏輔
恋歌の中に
- 1295 うき中は秋の末野のきり／＼す今はかれなんねをのみそなく 読人不
知
- 1296 露はかりうらみしよりや葛かつらかけし契も枯んとすらん 季虔
月次歌の中に、恨絶恋
- 1297 橋柱朽にし中もいつまてかむかしなからにこひわたらん 親備
絶久恋
- 1298 うき人は思ひたえても身ひとつに猶こひしさのつもる年月 景雄
夕恋
- 1299 こぬ人のつらさをあたに重ねてもまつやならひの夕くれの空 昌貞
何となく猶またれつるゆふへ哉うきをならひと思ひしる身も
- 1300 片糸のよるはまきれん方もなした、ひと筋に思ひみたれて 清憲
夜恋
- 1301 よな／＼にたえぬ思ひをうは玉の夢になしても人に見せはや 氏輔
- 1302 思ひ余るなみたを床に敷妙の枕さためてぬるよはもなし 清憲
- 1303 なにはなる芦のかりねの夢なれやかはすまくらも只ひとよにて 氏輔
限一夜恋
- 1304

1271	いつまでかはての浦のうつせ貝かひなき恋に身をくたくへき	季翹
1270	あふ事は猶かたいとのいたつらに思ふこゝろそよるはくるしき	季休
1269	夢にたにあふ夜もしらぬ契哉まゝとろまてのみ物おもふ身は	季融
1268	かれてしも又おひしける思ひ草たえぬねさしや契なるらむ	親直〔ウ〕
1267	何にかは深さくらへんわたつ海の千尋に限る思ひならねは	兼愷
1266	たえはつるうきせもしらす中川の深き契をなとたのみけん	景連
1265	こと浦になひくもしらてあま人のたくもの烟何こかるらむ	季虔
1264	今は又たか偽になりぬらんかはりはてしといひしちきりも	兼伯
1263	偽はまた身にしらぬこゝろより幾度人をかこちきぬらん	清憲
1262	晴かたきうらみの烟しゐてなとなきたる朝の身にはそふらん	兼愷
1261	逢事もたえまかちなるさゝかにのいとはるゝ身の果そくるしき	兼伯
1272	思ひ入かひこそなけれ恋の山いは木にならふひとのこゝろは	季虔
1273	いつよりか忍ふを人のかことにてわするゝ草とおひかはりけん	兼愷
1274	今はたゝよそになしても思ひ出よ契りし暮の山のはの月	景雄
1275	はかなくも心にたのむゆふへかな人はそれともおもひいてしを	読人不知
1276	いつまでか猶わすられぬ面影の忘らるゝ身にしゐてそふらん	難忘恋
1277	おもかけは猶残りけりうき人のありし契を思ふ寢覚に	実裕
1278	小夜衣うらむる袖の涙にも猶うき人のおもかけそたつ	景雄
1279	よしさらは難面き人にうきふしの積る限を恨みてやみん	親敬
1280	身の科に思ひかへして小夜衣さのみはいかゝひとをうらみん	昌貞
1281	うき数を思ひいてしと忍ふこそ心にあまる恨なりけれ	景雄
1282	人やうき我やつらきとたとる身は一方にたにえこそ恨みね	読人不知
	人伝恨恋	季虔

依涙顯恋

1241 涙川をさふる袖のしからみにもれてうき名のなと流るらん 兼道

顯絶恋

1242 末つゐにたゆともしらて夕烟たつ名を人になとらみけん 兼愷

稀恋

1243 あふ事はまとをにおれるあま衣うらみに袖のぬれぬ日そなき 兼迢

兼迢

百首歌よみ侍りける中に旅恋

1244 わするなよかりそめふしのさ、枕ひとよはかりの契なりとも 親敬

遠恋

1245 思ふ其心はかりのかよひ路はとをき境の末もへたつな 季休

1246 遠さかる中はうらみの数々を人つてにさへいふよしもなし 祐壽
(7・オ)

近恋

1247 見る影はなれて立そふ中垣もこゝろをよそに何へたつらん 兼伯

隔恋

1248 なかめつゝ人もかたみに忍ふらんへたてはおなし嶺の白雲 季虔

隔遠路恋

1249 はる／＼とへたつる中の海山にかよふこゝろの道はたえせし 親直

月次歌の中に、疎恋

1250 沖津舟よる人もなしやうと浜のうときこゝろを人にうらみて 親暁

変恋

1251 忘るなといひし其夜のかねことやかはらんとての心なりけん 兼愷

1252 末かけてたのめし事のいかならん此世にたにもかはるちきりは 親敬

1253 風かはる浪路の舟のこと浦によするや人の心なるらむ 氏輔

変恨恋

1254 かはらしといひし詞の偽をしらぬそ今の身のうらみなる 季休

俄変恋

1255 言の葉はなひくと見えし呉竹のよのまにいかてかはるこゝろそ 善弼

月次歌の中に、変契恋

1256 つらくともたのめやをかん人心かはれはかはる後のちきりを 季虔

1257 言の葉のかはらぬ色に契りしもあた浪こゆる末のまつ山 季翹

変約恋

1258 たのめしはいつはりとしもしらさりきかはるや人のまこと 季虔

なりけん

1259 うき人の心の秋の風よりやかはす言葉も色かはるらん 季融

秋の頃藤原親枚か妻の久しう音信侍らさりければ、

1260 かるかやにそへて申遣はしける 兼愷母

吹かはる人の心の秋かせにおもひみたる、野へのかるかや

厭恋

- 1218 うしや其かけのたれ尾の長き夜も別はおしきあかつきの声 親敬
- 1219 心なき鳥のねをさへ恨むなりあかぬ別をおしむ余りに 氏輔
- 急別恋
- 1220 おとろかす鳥こそうけれ言のはの残る夜なからいそく別は 季虔
- 帰恋
- 1221 立かへり見せはや人に道芝の朝露ならぬ袖のしほれを 読人不知
- 後朝恋
- 1222 消かへるあしたの原の露の身はたのめし暮をまつへくもなし 氏輔
- 兼頭
- 1223 おもかけもいと、身にそふ衣々の袖のなこりやけさのうつり香 兼頭
- 後朝切恋
- 1224 きぬ／＼にきえも果なて朝露のをき所なき身をいかにせん 兼愷母
- 逢不逢恋
- 1225 暮にもと契らていてし暁やつらきわかれの限なりけん 兼愷
- 1226 独寐の暁つけてなく鳥に有し其夜のなこりをそ思ふ 季虔
- 1227 契りきやなきて別れし鳥かねのつらさを今のかたみなれとは 景雄
- 玉津島社に十首歌奉りける時、遇不恋
- 1228 今更にねこそなかるれ芦□のうすきひとよの契はかりに 景雄
- 増恋
- 1229 せき兼る袖は涙の川淀におもひの渌そふくなりゆく 季翹
- 1230 つれなさをうらむにつけていかなれはこふる心の猶増るらん 清憲
- 月次歌の中に、追日憎恋
- 1231 けふは猶思ひそ深く染増るぬれしきのふの袖の時雨に 季昵
- 1232 日にそひてしけりそ増る思ひ草かりそめならぬ露の契に 氏輔
- 名立恋
- 1233 涙さへわか心にもかなはねはもる、うき名をせく袖そなき 季虔
- 1234 うき事のましはの烟いつよりかなひかぬ中の名には立らむ 親備
- 百首歌よみ侍りける時、歎名恋
- 1235 よそにもる君かうき名をいか、せんわかせきあへぬ袖の涙に 親敬
- 無名恋
- 1236 今は世にもれて流る、名取川あふせはなみのうもれ木の身も 清憲
- 1237 夕けふりなひかぬ中の浦風にいかてうき名の空に立らむ 親備
- 顕恋
- 1238 うき中は浅沢沼の芦のねのあらはれやすき名をいかにせん 兼愷
- 1239 もれそめし後はつ、まんかひそなき袖に余れる露のみたれを 氏輔
- 1240 たれゆへと誰を恨みん方もなしわか涙よりもれし我名は 昌貞

1193 今はた、まつよの床にうらむなりたか別路の庭鳥の声 兼愷

1194 まつよひのあたにふけ行櫓の戸にさしいる月そ人たのめなる 氏輔

1195 待わひてねられぬ床のさむしろに涙とひくる有明の月 季翹

1196 しらせはやまつよふけゆく中空の月も雲間の心つくしを 清憲

毎夕待恋 (4・オ)

1197 偽をうらみはて、もまたる、や夕くれことのならひなるらん 親敬

月次歌の中に、連夜待恋 貞如

1198 いたつらにこと、ひなる、影もうしまつよかさなる有明の月 貞如

1199 今こんといひしは人の偽をい□よなく／＼に猶たのむらむ 景雄

深更待恋

1200 まつよひの心よ何になくさめん月にもふくる影をうらみて 兼愷

1201 まつ人の影たに見えぬつれなさを月にそかこつ有明の空 氏輔

1202 ふけてとは契らぬ物をうき人の待れんとてや猶も難面き 清憲

待空恋

1203 櫓の戸の月影いたくふけにけりつれなき人をまつとせしまに 景雄

逢恋 氏輔

1204 うきにのみなれし涙のいかなれはあふ夜の袖を猶ぬらすらん 氏輔

1205 うきふしも何かのこらんさ、竹のよ、の契をかはす枕に 実懿 (ウ)

1206 かさねても夢かと思ふ小夜衣つらきうつ、にうらみ馴ては 読人不知

百首歌よみ侍りける時、初逢恋

1207 ゆく末もかけて重ねん小夜衣うらなき中と契り図めてき 親備

1208 言の葉もうつろふ秋にならふなよ結び初ぬる露のたまくら 清方

稀逢恋

1209 敷妙のまぐらのちりも稀にたに打はらへとや人のとふらむ 氏輔

月次歌の中に夢逢恋

1210 しはしたに見し涕やと、めまし夢路にこゆる逢坂の間 季融

白地恋

1211 呉竹のかりそめふしの程な□に後のよとたにたのまれもせず 季虔

別恋

1212 逢事のうれしきなからあかつきのわかれのうさを又いか、せん □輔

1213 なかめわひぬ嶺にわかる、横雲もわかきぬ／＼のつらきたくひに (5・オ)

1214 まつ宵のつらさよりけにまさりけり別にたへぬけさの涙は 清憲

1215 別路の袖の涙に影とめてかたみかほなる有明の月 読人不知

晩別恋

1216 そらねなくためしをしれば晩別も鳥にまかせさらなん 貞如

1217 あかつきのゆふ附鳥も今はとてつらき別になくねをそそふ 清憲

百首歌よみ侍りける時惜別恋

- 1171 よせてしもつるにみぬめのうらみあれやかひなくかへる浪の玉章
百首歌中に、祈恋
- 1172 三輪の山祈らぬ物を神杉のつれなき色をしるしなれとは 清憲〔ウ〕
祈難逢恋
- 1173 きふね川逢せもしらすしら浪の深きやよその契成らん 兼愷
祈難逢恋
- 1174 いのるそのかひこそなけれ逢坂の関も神も人のこゝろも 読人不知
祈行末恋
- 1175 神垣にひくしめ縄のくりかへし長き契の末やたのまむ 兼倫
契恋
- 1176 偽のある世なからもわするなといひし契はしみてたのまん 昌貞
さらに又契るはあやなあた人のうき偽をうらみなれても 親直
- 1177 契久恋
- 1178 年月をふるの高橋末遠くかけてたえせぬ契ともかな 親備
月次歌の中に契行末恋
- 1179 逢事に命はかへつ行末をたかこゝろより猶契るらむ 季虔
夢契恋
- 1180 夢にたに契かさねん小夜衣うらむる中なくさめにして 氏輔
誓恋 昌貞
- 1181 ちかひてし身の行末もいかならんかはるにやすき人のこゝろは
- 1182 いつはりのある世をせめてたのまゝしつれなき中のかはり 季虔
もやする 憑恋
- 1183 言のははなをさりなからさりとともと深き心の中や憑まん 智昭
月次三首歌に馴恋
- 1184 ほしわびぬしくるゝ山のなら柴のなれ行まゝにぬらす袂は 季休
あま人の塩馴衣なれてたにかさね□夜半を猶やうらみん 兼頭
- 1185 不馴恋
- 1186 はしたかのなれぬ心をいかゝせん初狩衣うらみわひても 親備
不逢恋
- 1187 逢までとたのむ命のいつまでかうき年月をあたにかそへん 公〔ウ〕
さても猶うきにたへたる命かなわかあらましの心つよさに 兼愷
- 1188 読人不知
- 1189 こりすまのうらみも深し夕烟なひかぬ中にきえかへる身は
百首歌中に同じ心を
- 1190 恋しなん夜半の烟の末をたになひかぬ人もあはれとは見よ 兼愷
義智
- 1191 あふまての契もさすかたのまれましたたへぬつらさによはる命は
月次歌に難逢恋
- 1192 いたつらにあはての浦の夕烟やかて消なんはてそかなしき 義直
待恋

- 1149 たか為にもらししかぬらん谷水のわきかへりつ、思ふこゝろを
欲言出恋
兼愷 (1・オ)
- 1150 あたなみは立増るともうき数を打出の浜のうちいて、見ん
月次哥の中に、洩初恋
季虔
- 1151 かひなしや人の心の常盤木に袖の時雨はもらし初ても
忍恋
兼愷
- 1152 せく袖もやかてかひなくもれやせん忍ふ心にあまる涙は
公
- 1153 末つるに名にや立へきなにはなる芦のしのひにもゆる烟も
氏輔
- 1154 ともすれは夜床にもる、涙哉忍ふによはるこゝろならねと
しられしな忍ふの浦にやく塩のからくも下にもゆる思ひは
季融
- 1155 百首歌よみ侍りける時、忍久恋
清方
- 1156 いつよりか色にはいてん年月をあたに忍ふの杜の言の葉
清方
- 1157 もるもうし^①ふもつらし身ひとつの心をわくる袖の涙は
忍涙恋
兼愷 (ウ)
- 1158 せきかえし^②のふ涙をあはれとも袖より外にたれかしるへき
親敬
- 1159 独ねのまくらもしらし夢にたれこゝろゆるさぬ夜半の涙は
季休
- 1160 五社奉納歌の中に、互忍恋
景雄
- いつれより乱れ初ななどはかりもいはれぬ中に忍ふもちすり
忍親昵恋
- 1161 ちらすなよ共に忍ふの杜の露連なる枝の風はふくとも
聞恋
兼愷
- 1162 いつまてか見ぬめの浦による浪の音にのみやは袖ぬらすへき
見恋
季融
- 1163 いひやらん便もなみの沖津舟はの見てしより俤にたつ
月次歌の中に纔見恋
氏輔
- 1164 ほのかにも雲間をわけてゆく月の影見しよりそ思ひ初てき
百首歌よみ侍りける時、不見恋
季融
- 1165 い^③よりかよそになるみの沖津舟みるめかるへき便たになし
尋恋
親備
- 1166 とひやらんしるへも今はかれ^④の契あたるもすの草くき
清憲
- 1167 たつぬへきしるしも見えすみわの山すきし契の果やいかなる
百首歌よみ侍りける中に、尋縁恋
清憲
- 1168 はてしなき思ひをこめてむさしの、草のゆかりを猶や尋ん
通書恋
清憲
- 1169 浪あらき人の心のうと浜にかよふ千鳥の跡もかひなし
兼愷
- 1170 浅からぬこゝろの程はくみてしれうき中川の水くきの跡
返書恋
景雄
- 季虔

歳暮雪

1133 白雪のつもり果たる野山にも迷はぬ年やくれて行らん 季休

花月雪三十首歌よみ侍りける中に

1134 春秋の花と月との名残まで雪にとちめて年そくれぬる 兼愷

年の暮に雪のふり侍りける時

兼愷母

1135 いたつらにまなはぬ窓にふる雪のつもりて老の年もくれぬる

歳暮山

1136 くれてゆく年は逃れん方やなきうき世隔つる山の奥にも 氏輔

歳暮関

1137 逢坂の関の小川の早き瀬によとまぬ年も越て行らん 親敬

1138 年波のくれ行けふやうらみましこまの関守せきもとめなて 季翹

歳暮川

1139 おしめとも立もかへらぬ早川の流れてくる、年浪はうし 重朝

月次歌の中に歳暮鶏

1140 くれてゆく年はひと夜の別ともしらてや鳥の声いそくらん 季融

除夜

1141 夢とのみ過こし方の日数さへ年のひと夜におとろかれぬる 親暁

□はすのつこもりの夜よみ侍りける

1142 うきふしは身にこそつもれ呉竹のひとよ計の年のなこりに 景雄「ウ」

伊集院 兼愷

(下巻)

浪のもくつ 下

浪のもくつ 下

二冊の中

浪の藻屑 卷之五

恋部

初恋

1143 もらさしなけふ分初る恋草にならはぬ袖の露ふかくとも 兼愷

1144 おもひたつはつ花衣いつよりかうらなき色を人にしらせん 親敬

1145 分そむる恋の山路の末つるになけきこりつむ身とや成なん 氏輔

三十首歌よませ給ひける時、同じ心を

1146 しけりゆく末いかならん思ひ草露分そむる袖のみたれは 公

不言恋

景雄

1147 いは、やと思ふはかりに年もへぬかならすつ、□心ならねと

思不言恋

氏輔

1148 なをさりにいひもいてなは思ひ川わたらぬ先に名をや流さん

読人不知

1110 賤やさそかしらの雪もつらからんなきこりつむ年の終りに

椎柴

1111 時雨□は残る緑の椎柴もしゐて嵐のはらふはけしき

季休

袈

兼迢

1112 ふしわふる野へのさ、屋のいかならん袈もさゆるよはの嵐に

月次歌の中に、寒閨袈

親直

1113 さゆるよはとけて結はん夢も□し閨のふすまに霜をかさねて

〔ウ〕

炬火

1114 吹おこすすきまの風を光にて残る夜さむきねやのうつみ火

季虔

1115 かきおこす光も薄きうつみ火に老かよ深き程もしらる、

氏輔

月次歌の中に、炬火似春

1116 雪深き軒端の梅も埋み火のあたりの春にまつ句はなん

兼愷

1117 のとかなるあたりはさすか春夜の夢にそむかふ閨の埋火

昌貞

百首歌よみ侍りける時、寒夜埋火

読人不

1118 かきおこし向ふも寒し閨の上はいくへか雪のうつみ火の本

冬歌の中に

1119 夢さそふねやの霰のそよさらに又かきおこす夜半の埋火

景雄

仏名

1120 九重にかゝくるけふのとしひも三世の仏の光そふらむ

季虔

早梅

〔80・オ〕

1121 雪深き年のこなたにかほる也春や隣の梅のはつ花

季虔

1122 吹にけり春も隣の中垣に匂ひへたてぬ梅の初花

氏輔

月次歌の中に、歳中鶯

1123 鶯のこゑのみけさや匂ふらむまた冬こもる雪の梅かえ

親敬

冬歌の中に

1124 雪の中に冬こもりぬる草も木も恵にもれぬ春や待らん

氏輔

歳暮

1125 おしめともすくる月日はと、まらてうき身に年のなとつもるらん

親敬

1126 月も回もあたに積りて何事をなすとはなしに年そ暮行

清憲

1127 春秋をたゝいたつらにすきの戸のあけぬ暮ぬと年もいぬめり

読人不

〔後〕

1128 ひと年をあたにくらせる怠りもけふのなこりに歎きそへまし

義直

〔前〕

老ての後、年の暮によみ侍りける

1129 年月のつもれは老となる身にも何ゆへ春の猶またるらん

季昵〔ウ〕

兼愷母

1130 うき事の数々つもる老か身□るゆく年やそへてなけかん

惜歳暮

1131 いたつらに過し月日の今更に何おしまる、年のなこりそ

公

1132 あすよりの春に心をなくさめてさのみは年のくれも惜まし

昌貞

- 1088 申遣したりければ、かくなんよみて遣しける
月はや入ぬる後の山陰も雪を光にたつねてや見ん
隣雪 親敬
- 1089 とはれとふ道たに絶て中垣のへたても深くつもる白雪
庭雪 氏輔
- 1090 友をまつ心の道もうつもれて跡なき庭そ雪にさひしき
庭の面は我さへ跡のいとはれつ人をもとはし今朝の初雪
雪の降つもりけるあしたにより侍^四ける
かれはてし庭の人目もけさは又雪にまたる、蓬生の宿 読人不知
雪埋苔径と云事を
- 1092 雪埋苔径と云事を
読人不知
- 1093 むす苔に跡たえ果し山陰も又今さらの雪の下道
竹雪 景徳公
- 1094 うつもる、軒端はくらきくれ竹もはらふにおしきけさの白雪
むらす、め峙やたへぬ呉竹のよふかき雪に声さはく也
雪埋松 昌貞
- 1096 置霜に残るみとりもしら雪の色にはもれぬ軒の山松
百首歌よみ侍りける時、常盤木雪
染あへぬ時雨の跡のときは木につれなき色をうつむ白雪
鷹狩 季休
- 1098 はしたかのとやまの夕日影さえて狩場の小野に風さはく也
氏輔^ウ
- 1099 狩人のならしの岡にふる雪のしらふの鷹も色まかふらん
鷹狩日暮 季休
- 1100 帰るさは月待いてん狩衣あかぬすそ野にけふをくらして
百首歌よみ侍りける時、雪中鷹狩
みかり野はや、うつもれてたか人の払ふにたへぬ袖のしら雪
神楽 季休
- 1101 さゆるよの霜のしらゆふかけそへてくらぬ月に星うたふこゑ
神垣の杜の榊葉おりかへしうたふもかれぬ本末の声
月次歌中に、暁神楽
すみ渡る天の岩戸もほのく^一とあけ方近しあさ倉の声
杜神楽 季休
- 1102 小夜深きこのまに見えて神垣の杜の庭火もほのかなるかけ
百首歌の中に、炭竈
炭かまの烟の末もさえくれて雪けになりぬをの、山里 読人不知
炭竈烟
- 1103 吹おろすみねの嵐も炭かまのけふりの末に見えてさむけき
雪の色に高ねははれて炭かまの烟にくもる小野の山もと
薪 実方
- 1104 しつたたく烟も寒し雪の中に爪木も深く積る山かけ
親敬 智昭

雪歌の中に

1069 雪はる、芦屋の浦の夕なきに間近くなりぬ紀路の園山 清憲

島雪

1070 沖津浪明はなれ行雲間より名にあらはる、雪の島山 季融

月次歌の中に洛陽雪

1071 月花の都もけさはしら雪の光やさらにみかきそふらむ 季虔

1072 朝とくもつかふる人や九重の大路の雪に跡をつくらん 氏輔〔ウ〕

故郷雪

1073 跡つけて誰かはとはん白雪のふりにし里の夕暮の庭 季虔

雪の降降りける時志賀にまかりて

1074 花その、春や昔の跡たえて面影うつす雪のふる郷 昌貞

古寺雪

1075 山寺の菊も紅葉も打すきて色なき庭につもる白雪 兼愷

親敬

1076 しきみつむ山路もさこそ絶ぬらんけさはいくへの雪のふる寺

雪三十首歌中に、遠村雪

1077 ましはたく畑やしるへしら雪の峯よりつ、く山本の里 清方

山家雪

△(墨消一首)

1078 軒近き松の風たにうつもれて雪の底なる山陰の庵 親直

1079 山里に日数つもらはいかならんけさに絶る雪の下道 読人不知〔77・オ〕

(詞書・歌一首墨消)

あやめ田の山莊にて雪の降降りける時

1080 音信も雪にたえたる山路かな心のまつ風もうもれて 兼愷

1081 雲はる、後も外山の梢より嵐にふれる庭のしら雪

同じ山莊にて、雪の降りける時人の許に申遣しける

1082 山深く雪にとちたる松の戸のまつにもけさは音圖そなき 兼愷母

雪の降り侍りける時同じ山莊にまかりて

1083 柴人のこと、ひ馴し便まてたゆる山路の雪そしつけき 親敬

1084 ふり増る庭の苔路も今更にたえて塵なき雪の山陰 兼備

雪のふりける時同じ所にやとりて

1085 庵近き椎の下柴折たきて昔かたりもつもるしら雪 季虔

1086 谷水の音も氷りてふくるよの雪にしつまる軒の松風 親備〔ウ〕

同じ所に兼愷やとり侍りける頃、雪のいたうふり

つもりける日よみて遣し侍りける 季融

1087 ふもとたにとふへき道はうつもれつきひしきかに雪の山陰

平季虔か山莊風月楼といへるに雪のふり侍り

ける頃やとりゐて、五言のから歌を作り空庭人不

到 風雪坐陰々 老矣吾誰待 前溪月亦沈と

1046	出る日も光をそへてよの程の雪に晴たる山そまちかき	季虔
	夕雪	
1047	雲かゝる外山は早く暮初て猶さやかなる庭のしらゆき	智昭
	百首歌よみ侍りける時、夜雪	
1048	窓くらき軒端の竹の下折によのまの雪の深さをもしる	季休
	連日雪	
1049	さひしさを誰にとはれん道もなし日数積れる庭の白雪	昌貞
1050	草の戸の明ぬくれぬとふる雪に道踏分てとふ友もなし	景雄 (75・オ)
	月前雪	
1051	さく花の光を見せてはるゝよの月も照そふ木々のしら雪	親敬
	山雪	
1052	白雪のふりつもりては花の名に又あらはるゝみよしの、山	氏輔
1053	曇りなき光も晴て日にみかく珠城の山のけさの白雪	清憲
	逍遙舎十景歌の中に、白山晴雪	
1054	降つもるけさは其名もあらはれて雲みにはるゝ雪の白山	公
1055	いつる日も光さやかに雲晴て雪のしら山名こそかくれね	親直
1056	はれ渡る夜半の時雨の跡見えて初雪白き山のはの空	景雄
	百首歌の中に岡雪	
1057	かきわくる跡見えぬまで水茎の岡の浅茅につもる白雪	読人不
	野雪	
1058	旅衣わくる日数も積りそふ雪やかきりのむさしの、原	季虔 (ウ)
	原雪	
1059	狩人の衣手さえてはしたかのすゝのしの原雪ふりにけり	読人不
	雪のふり侍りける日、粟津を過るとて	
1060	逢坂の山のしら雲へたてきて雪に分いるあはつの、原	昌貞
	関雪	
1061	さやかなる雪の光に関の戸もあけぬと告て鳥や鳴らん	親敬
1062	あけぬれと朝たつ人の跡もなしとさせる雪の白川の関	季融
	百首歌よみ侍りける時、行路雪	
1063	たれかけさとかふみわけし跡みえて雪にまよはぬ山のした道	親敬
	雪十首歌の中に	
1064	誰をとひ誰にとはれんかよひ路も思ひたえたるけさの白雪	季虔
	池上雪	
1065	よの程にむすふ氷も深からん雪にとちたる今朝の池水	季融 (76・オ)
	湖雪	
1066	鳩の海や立そふ浪も白妙の雪吹おろ比良の山かせ	親直
	海辺雪	
1067	打よする浪もひとつに吹上の浜松しろし雪のあさかせ	季融
	百首歌よみ侍りける時、浦雪	
1068	浪の上はふりもつもらぬ圃なきに雪の苦ふく浦の釣舟	親敬

月次歌の中に鶯

1024 つらゝゐる涙の川の夜半の床うきねのをしや独鳴らん 兼愷

河鶯

1025 ふもと川嵐をさむみたつをしの色にみたる、水の紅葉々 季虔

残雁

1026 越路より立をくれてやさゆる日の雪けにきぬる衣かりかね 清憲

百首歌よみ侍りける時、網代

1027 かゝり火も更ゆく夜半の川風に床寒からし宇治のあしろ木 季休

月照網代

1028 ふけにけり川瀬の浪も音すみてあしろにひをのよるの月影 親敬⁽⁷⁾

1029 田上や河風さえてすむ月の氷をたゝむ瀬々のあしろき 読人不知

霰

1030 関近き葉ひろかしたのは玉あられたまらぬ夢^四よはに碎くる 景雄

1031 ふりしきる音もあられの玉さゝに乱れてきをふよはの山風 義直

夜霰

1032 月影もくもらぬ庭の玉霰光をちらす風のさむけさ 氏輔

百首歌の中に、霰破夢

1033 そよさらに霰みたる、呉竹のよふかき窓に夢もくたけて 季融

月次歌の中に、霰

1034 春雨に花ちる山の面影もけさのみそれにみよしの、里 季虔

雪

1035 花紅葉さそひ馴にし山風はけさも木末の雪にいとはん 兼愷

1036 春の花秋の紅葉の俤もあもひけたれん木、のしら雪 昌貞^(74・オ)

(墨消一首)

1037^(後) ふりそめて友まつ雪のけしきにも独はおしき明ほの、庭 季虔

1038 かた敷の衣手さえし程みえて明ると山につもるはつ雪 清憲

1039^(前) 冬枯の草木か上もめつらしき花を色なるけさの初雪 公夫人

山初雪

1040 ふくるよの時雨の雲もほのゝと嶺にわかる、初雪の空 季虔

百首歌よみ侍りける時、浅雪

1041 とふ友の跡たにまたすきえやせん砌に浅き今朝の初雪 清憲

深雪

1042 冬こもる蓬か奥にふる雪のとはれぬ庭をいくへとつらん 景雄

1043 ふみ分る程こそ人もまたれけれ思ひたえよと積る白雪 読人不知⁽⁷⁾

朝雪

1044 昨日こそ山のはつかに見そめしもけさは幾重の庭のしら雪 義智

雪のふりけるあしたある人の許に申遣^四ける 兼愷

1045 やかて又つもらは跡のいとはれんけさふる雪にとふ友もかな

雪朝

1000	うつりくる光も寒しさ、のはのさやくみ山の霜の上の月	親敬
1001	冬枯はあらはにはる、山のはの木末の雪を出る月かけ	昌貞
1002	さやかなる光もそひて山端の雪にみかける冬夜の月	重朝
1003	河冬月 山川のよとむ流に影さえて月も氷を猶かさぬらん	義陳
1004	千鳥 乱声の枯葉を渡るうら風によはの千鳥も声さはく也	氏輔
1005	月次歌の中に暁千鳥 あま人の夜半のね覚の友千鳥月もふけるの浦伝ふこゑ	読人不知
1006	夜千鳥 なく声も遠くなる尾の浦千鳥戸渡る浪に月を残して	兼愷 (72・オ)
1007	難波なる三津の浜風よや寒きこと浦かけて千鳥鳴也	景雄
1008	河千鳥 千鳥なくさほの河風さえぬらし暁かけて声うらむなり	季虔
1009	百首歌よみ侍りける時、浦千鳥 小夜千鳥妻とふよさの浦風に声吹わたす天のはし立	読人不知
1010	須磨の浦にて、夕に千鳥の鳴を聞て △(墨消一首、次の歌に書替)	
	夕汐のさそふかすまの浦千鳥むれてなきさに声そ満くる	昌貞
1011	よる浪の高師の浜になく千鳥夕しほ風に声もしほれて	涼相君
1012	月ふけて千鳥なく也さ、波や志賀の浜風く吹らし	景雄
1013	百首歌の中に、島千鳥 沖津かせ浪よせくらしいせ嶋や干潟の千鳥立さはきなく	清憲 (7)
1014	旅泊千鳥 更る夜の床の浦風身にしみて浪のうきねに千鳥なく也	親敬
1015	なれも又ねぬ夜やうらむ浦千鳥浪の枕にそふこゑ	実秘母
1016	水鳥 霜払ふ羽風もさえて水鳥の池の夜床やさそ氷るらん	親暁
1017	水浅き沢田のうきにゐる鴨の下やすからぬ思ひにやなく	清園
1018	寒夜水鳥 池水にうきねや寒き芦かもの浪のまくらに月も氷りて	公
1019	百首歌よみ侍りける時、月前水鳥 つはさにもまなくや氷る水鳥のはらへはかゝる浪の月影	兼愷
1020	払ひあへぬ霜を重ねて水鳥の芦間の床さゆる月影	季休
1021	川水鳥 冬川に定めぬ浪のうき枕をしのともねも契るまやなき	親暁 (73・オ)
1022	池水鳥 朝日さす池の氷に打はふきこゝろとけてやあそふ水鳥	兼倫
1023	床寒き池のつら、やつらからん芦間にさはく水鳥の声	親直

- 976 萩か花跡なき野への霜枯に鹿のうらみや猶残るらん 兼愷
- 977 花薄まねくも秋の色ならて枯野にさゆる袖のゆふ霜 季翹
- 寒蘆
- 978 霜寒き入江の芦のよなく／＼にうらふく風も音そかれゆく 智盈
- 江寒蘆
- 979 こく舟も数あらはれてみなと江の浪におれふす芦の霜枯 親敬
- 980 なには江の芦の枯葉に霜さえてよ深き月にそよく浦風 尚貞
- 月次歌の中に、池寒蘆
- 981 霜かれて汀にたてるしほれ芦の陰さへ寒き冬の池水 昌貞
- 氷
- 982 早き瀬はむすひもあへす山川のゐせきの浪やまつ氷るらん 親直
- 983 山水はせ、の岩間に音たえて氷にのこる夜半の河かせ 親備〔ウ〕
- 月次三首歌の中に、氷始結
- 984 吹おろす嵐を寒み松陰の岩間の水やこほりそむらん 親敬
- 橋下水
- 985 下むせふ水の流はとちはて、こほりにわたす谷のかけはし 季融
- 河水
- 986 里人もまたふみわけぬ朝川の氷の上にかせ渡るなり 尚貞
- 滝氷
- 987 岩かねの浪のしら糸むすほ、れ氷をさらす布引のたき 兼愷
- 988 山松に音を残してふくるよの嵐にこほる滝のいは浪 季虔
- 湖水
- 989 さえ／＼しよのまのひらのねおろしにまの、入海〔ウ〕さ氷るなり 清方
- 990 冬かれし尾花か浪も音たえて氷にさゆるまの、うらかせ 兼愷母
- 井氷
- 991 くむ人の影もたえぬる山の井のあかて幾重か猶氷るらん 親直
- 百首歌よみ侍りける中に、掛樋氷
- 992 よを深みこほりにけりな山里の竹の掛樋の音信もなし 読人不知
- 冬月
- 993 霜白き庭の落葉に影さえて嵐の後の月そ夜ふかき 兼愷
- 994 さえ増る庭のまさこに白妙の霜を重ねて月そうつろふ 清方
- 冬月冴
- 995 袖の上も氷れる月の影ふけて霜をかたく床のさむしろ 義園
- 寒月
- 996 夏の夜も霜置まよふ真砂地にこほるは寒き冬の月影 親敬
- 997 すむ影のいと、身にしむ冬夜は月の桂も霜やをくらん 清憲
- 月次歌中に、寒夜月
- 998 霜さゆるしつかさ、屋のよはの月ねられぬ袖にかこちてや見る〔ウ〕 季融
- 百首歌よみ侍りける時、冬暁月
- 999 冬枯の木末の霜を光にて残るもさむし有明の月 親備
- 山冬月

木枯

(ウ)

竹霜

954 山陰の落葉を空に吹たて、雲にしくる、こからしの声 宗秘

965 染つくす秋にはもれて置霜の色を花なるいさ、むら竹 季虔

955 紅葉々はさそひ尽してこからしの風も色なき軒の山陰 昌貞

966 朝日かけうつる末葉の霜きえて雫も寒き窓の呉竹 読人不知

冬歌の中に

袖霜

956 花になれ紅葉にわけし山陰もうつれはかはる木々の冬枯 氏輔

967 とけてねぬ夜寒の霜そ氷りける露には馴しかた敷の袖 兼愷

月次歌の中に寒松

冬夜と云事を

957 散はてし木々にをくれて松ひとり残るもさむき冬かれの山 季虔

968 さえ増る老のね覚の床の霜袖のつら、も猶結ふらん 氏輔 (ウ)

冬朝松

残菊

958 朝日さす上葉の霜やとけぬらん緑にかへる岡の辺の松 兼愷

969 咲匂ふ花もときはの松陰に霜をしのきて残るしらきく 智昭

霜

籬残菊

959 ふけて猶月影白し浅ちふの末葉の霜やむすひそふらん 景雄

970 霜かれのまかきの菊の一もとに残れる秋の色もさひしき 昌副

960 日影さす竹の末葉の朝しめりよのまの霜の跡も寒けし 読人不知

百首歌よみ侍りける時、寒草

曙霜

971 露深き草の袂も枯はて、尾花か末は風もとまらず 景雄

961 さえし夜の月はまさこに影きえてはつ霜白し明ほの、庭 兼愷 (69・オ)

野寒草

夜霜

972 秋の色の残るもあたのかたみ哉花野の跡の霜の下草 親直

962 窓近き竹の末葉の打さやきよはにや霜の置増るらん 昌貞

973 霜深きあしたの原の花薄ほのかにたてる色もさひしき 読人不知

百首歌よみ侍りける中に野霜

庭寒草

963 秋に見し花の千種の色々もひとつにむすふ野への霜枯 清憲

974 なく虫の声は跡なき垣ねにも猶かれ残る霜の下萩 季融

月次歌の中に行路霜

百首歌よみ侍りける中に寒草処々

964 霜白き道のゆくての村消に朝たつ人の跡も寒けし 季虔

975 置余る朝けの霜の花薄むら／＼残る色も寒けし 親敬 (70・オ)

枯野

あやめ田の山莊にて

931 このはさへ山めぐりするゆふへ哉時雨てきをふみねの嵐に 兼愷

落葉

932 村時雨晴行跡の山かせにくもるともなく木葉ふるなり 季虔

933 秋の色やあらしの末に残るらんもろき木葉は枝にとまらて 季融

読人不知

934 山風の音もしくれて行雲のかさなる嶺にこのはふるらし

落葉風

935 吹おろす風のまに／＼さそはれて行ゑきためぬみねの紅葉々

親敬

936 散はてし軒の木末は音たえて庭の落葉にさはく山かせ 昌貞

落葉混雨

937 ちる程も猶やそむらん村時雨さそふにあかぬ木々の紅葉は 親敬

938 さそはるゝ木々の紅葉のふりそひて雨も色つく軒の山かせ 親暁

百首歌よみ侍りける時、朝落葉

939 ふりまかふ夜半の時雨の跡晴て落葉にさやく庭の朝霜 季虔

夕落葉

940 夕くれは猶身をしほる山風に思ひみたれてこのはちるなり 季道〔ウ〕

夜落葉

941 風さそふ軒の木葉やさゆるよの月にくもらぬ時雨なるらん 親備

あやめ田の山莊にて、夜深く落葉を聞て

942 ふりかはる軒の木葉の音すなりよひの時雨の跡の山かせ 兼愷

同じ所にやとり侍りける夜

943 月さゆる軒の嵐にね覺して折々落るこのはをそきく 景雄

葉落月明と云事を

944 よな／＼にひまもる月の影そひてこのははれ行軒の山かせ 季融

杜落葉

945 染はてし後は木葉もあらはにて時雨にはるゝ月よみの杜 季虔

山路落葉

946 分かよふ鹿の跡さへうつもれて深き山路につもる紅葉々 智昭

百首歌よみ侍りける時、河落葉

947 ちりしきて瀬々にしからむ紅葉々の錦にせける山川の水 清憲

高雄山に登り侍りける時

948 山風に紅葉吹おろす清滝の岩瀬の浪も色かはるらし 読人不知

山家落葉

949 やり水の音も落葉のしからみにや、枯増る冬の山かけ 読人不知

屋上落葉

950 よのほとはは時雨の音のすきの屋にあけて紅葉の錦をそふく 兼愷母

百首歌の中に、窓落葉

951 夕日さす梢の紅葉さそひきて窓にしくるゝ軒の山かせ 親敬

庭落葉

952 散つもる庭のこのはの紅みに苔のみとりも色かはり行 季休

953 吹払ふ風の跡たにうつもれてこのは散しく庭のかよひ路 有儀

浪の藻屑 卷之四

冬部

初冬

910 冬のくる日影もさえて浮雲の朝ゐる山やまつしくるらん 親敬

911 山風にもろき木葉を先たて、心をしほる冬はきにけり 景雄

912 冬きぬとけさはこのはもしくる也風の行ゑに秋をさそひて 季融

初冬時雨

913 染はてし秋のなこりも今はとてこのはを色に時雨ふるらし 季昵

兼愷母

914 行秋のなこり露けき袖の上にうきを重ねてけさはしくる

伊勢太神宮に五十首歌奉りける時、同じ心を

915 ふる方も定めぬ空の初時雨けきたかりに冬を告らん 兼愷

初冬風

916 聞馴し軒端の松の風たにもけさより冬にかはるはけしき 慈誠君〔66・オ〕

917 けさよりは四方のこのはもさそはれて時雨を急ぐ冬の山風 景香

初冬木枯

親暁

918 行秋のなこりをけさやさそふらんはけしくなりぬ木々のこからし

時雨

919 吹きそふ風をたよりに幾度かしくれてすくる浮雲の空 親敬

〔ウ〕

920 山のはに晴る、と見えし浮雲は軒の夕日に又しくるなり 尚貞

暁時雨

921 ^(後) あかつきの袖の涙もふりそひぬ老のね覚をさそふ時雨に 氏輔

(一首墨消して前歌に書替)

時雨過と云事を

922 ^(前) ね覚とふ時雨はよそに過ぬらし老のまくらに露をのこして 季道

百首歌よみ侍りける時、夕時雨

923 ふく風の音羽の山の夕時雨やかて都の月にふるなり 読人不知

夜時雨

924 小夜時雨はれてはくもる浮雲に月の光もさためなきそら 実裕

925 いくたひか閨の時雨の音信て見はてぬ夢のなこりとふらん 季休

読人不知

926 晴くもる夜半の時雨も定めなき世のことはりに袖ぬらせとや

兼愷母

月次三首歌の中に、深夜時雨

927 ふくるよの老のね覚のおりからや物思ふ袖に猶しくるらん

時雨雲

928 定めなき空の浮雲うきてのみ風をこゝろに時雨でやゆく 智昭

読人不知

929 山風の音も高ねのあなたよりしくれて渡る雲のかけはし

杜時雨

930 染あへぬこのはも今はもらさしと常盤の杜や猶しくるらん 氏輔

- 888 秋の色にはやくも染る紅葉、の錦の岡やまつしぐれけん 親敬〔ウ〕
- 河紅葉
- 889 いは浪も秋の色にやたつ田川岸のもみちの影をうつして 季休
- 百首歌よみ侍りける中に杜紅葉
- 890 日にそひて染こそ増れ露時雨はさぬ雫のりのもみち葉 清憲
- もすのなく野中の杜の夕日影さすか色こき栞の紅葉、 読人不知
- 行路紅葉
- 892 秋深き色に出けり紅葉、の下ゆく袖もそむるはかりに 季休
- 兼愷かあやめ田の山荘に紅葉見給はんとていらせ給ひける時
- 893 露霜に色染増る山陰の紅葉の錦またやきて見ん 公
- 894 山深き庭の紅葉のから錦おりく又や立かへりみむ 公夫人
- 同じ所の紅葉見にまかりける時
- 895 尋ねくる人も心や染そへんもみちにかこふ秋の山かせ 季虔〔64・オ〕
- 896 山陰に染しもみちもすむ人の心と深き色は見ゆらん 氏輔
- 897 雨はる、このまの夕日もりかへてもみち照そふ山陰の庭 季融
- 同じ所の紅葉の半散ける頃
- 898 紅葉、の盛も今はすきの戸のさすかちりかふ頃のさひしき 親敬
- 暮秋
- 899 なこりなく木々のこのはもさそはれて嵐の末に秋そ暮ゆく 兼愷
- 900 山のはの時雨を送る浮雲に立別れてや秋の行らん 兼伯
- 惜暮秋
- 901 身ひとつにうかりし秋よ今更に暮行空をなにおしむらん 季虔
- 百首歌よみ侍りける中に、暮秋月
- 902 よなくに馴こし月も行秋のなこり有明の影そすくなき 氏輔
- 暮秋霜
- 903 行秋も今はなこりの夕露にむすひかへたる庭のはつ霜 季道〔ウ〕
- 暮秋川
- 904 紅葉、も流れてはやき河水のよとむとなしに秋そ暮ゆく 兼愷母
- 暮秋紅葉
- 905 今はた、くれ行秋の手向山木々の紅葉やぬさとちるらん 氏輔
- 906 暮て行秋はかたみもとめしとや木々の紅葉をさそふ山風 氏尹
- 暮秋草
- 907 行秋の末野の尾花うらかれて袖になこりの露やかくらん 季道
- 百首歌よみ侍りける時、暮秋虫
- 908 虫のねも秋の末野のまくつはらかる、や同しうらみなるらむ 季休
- 九月尽
- 909 くる、日はみしかき秋のなこり哉あたる名のみ長月の空 季翹

菊露

867 咲匂ふ色を深めてしら菊のまかきに余る花の朝つゆ

親暁
(62・オ)

868 露ながら折てかさゝん白菊の色そふ花に袖はぬるとも

季翹

水辺菊

869 さく花も千年の影やうつすらん流れてたえぬ菊の下水

兼頭

百首歌よみ侍りける時、河上菊

870 くむ人の千年もしるしら菊の花の下ゆく谷川の水

清方

浜菊

871 よる浪も立そふ色や白菊の花に匂へる秋の浜かせ

実懿

藤原兼貞か庭の菊の花盛なる比見にまかりて

872 かす／＼の花も盛にさく菊のまかきにこもる千世や幾千世

氏輔

873 色も香も深きやいづれませの内に秋を争ふ菊のさかりは

庭なる菊の花見給はんとて

君貴典公典いらせ給ひて御歌とも賜はりける時

874 言の葉の花を待えてみきりなる菊も千年の色や添らん

兼貞ウ

逍遙舎の松菊径といへるにて

875 いく秋も栄へん松の下道に千世をかさねて匂ふしら菊

親敬

鵲

876 うらかるゝ杜の木末になくもすの声に暮ゆく秋もさひしき

清憲

秋歌の中に

877 鵲のなくあしたの原の露霜に尾花打ちり秋風そふく

氏輔

薦

878 つれもなき山の岩ほのつた紅葉をのか秋とや色に出らん

智昭

紅葉

879 夕日影さすや赤地の唐錦おりはへさらすみねのもみち葉

親敬

880 ひまなくもしくるゝみねの紅葉ゝは幾千入にかそめんとすらん

親備

秋歌の中に

881 立田姫たへぬ思ひの涙にや染しこのはも色にいつらん

兼愷
(63・オ)

紅葉浅深

882 山姫のいかに染てか紅葉ゝの深きに浅き色をわくらん

親敬

百首歌よみ侍りける時、雨後紅葉

883 夕時雨はれゆく跡は山のはの松も紅葉の色にわかるゝ

氏輔

飛岡天神奉納歌の中に夕紅葉

884 村しくれはれゆくみねの紅葉ゝは向ふ夕日も色や染らん

善弼

句題歌よみ侍りける時、紅葉をわけてといへるを

885 一しほの色や照そふ立田山もみちをわけて出る月かけ

智昭

山紅葉

886 染てけり山は千入のくれなるに露も雫も色かはるまで

兼愷

887 むら時雨染し紅葉も露霜の深き山辺や色を添らん

智昭

- 845 夜寒なる月にうらみて初霜のふるさと人や衣うつらん 季翹
- 夜擣衣
- 846 たか里も思ひや同じ長月の夜寒の衣打あかすこゑ 親備
- 847 うら風も夜や寒からしなには女か芦のしの屋に衣うつなり 清憲
- 霧島社奉納歌の中に同じ心を
- 848 心からたへぬ夜寒の秋風を誰にうらみてころもうつらん 景幹
- 海辺擣衣
- 849 難波人芦火の烟たき捨て塩馴衣月にうつらし 季虔
- 850 夜を寒みねられぬ床の浦浪に思ひくたけて衣をやうつ 景雄
- 山家擣衣
- 851 山里の嵐や秋にさえぬらん雲より奥にころもうつ声 季融
- 百首歌よみ侍りける時、田家擣衣
- 852 夜寒なる小田のかりほの稲筵たれしきわひて衣うつらん 氏輔
(61・オ)
- 秋夜長と云事を
- 853 秋は猶千々に物思ふね覚哉明やらぬ夜の長月の空 義陳
- (一首墨消して右歌に書替)
- 野分
- 854 百草の花にはおほふかひもなし野分にたへぬ庭の袖垣 兼愷
- 855 こゝろさへくたくる花の百草に野分の跡の庭そさひしき 貞如
- 野分し侍りける後、ある山里にまかりて
- 856 吹しほる野分の跡の八重律はるゝもさひし秋の山かけ 清憲
- 秋の半なる比風いとわきたちていみしうはけしかりける時
- 857 秋の田のいなは吹しくあらしには民の心もさそしほるらん 公
- 月次歌の中に、嵐
- 858 なれてたにさすか心のさはく哉嵐にたへぬ柴の戸ほそは 季虔
- 葛
- 859 あれ増るしつか垣ほのくつかつら風にうらみてくる人もなし 親直
- 百首歌よみ侍りける時、岡葛
- 860 何をさは忍ふの岡のくつの葉のうつろふ秋にうらみかほなる 清憲
(ウ)
- 重陽宴
- 861 くむ手にも千年をかけてにはふらし尽せぬけふの菊の盃 氏輔
- 九月九日人の山荘にまかりて
- 862 いく秋もつきぬ齡をくみしるや山路の菊の花の下水 清憲
- 菊
- 863 をく霜の色をかさねていく秋もかれなて句へ庭のしら菊 公
- 864 百草の花より後はひと本の菊に色そふ庭のはつ霜 親備
- 月照菊花
- 865 さやかなる色こそわかね白菊の花と月とおはなしまかきは 季融
- 月次歌の中に菊籬月
- 866 うつりくる月に下葉も色そひぬ籬の霜の白菊の花 読人不知

- 雁初来
- 822 秋寒き朝けの風にさそはれて今やきぬらん衣かりかね 清賢
- 月次歌の中に聞雁
- 823 初雁のうはの空なる音信もきく人からの身にやしむらん 貞如
- 月前雁
- 824 雲霧をつはさにはらふ初雁の声もほのめく山端の月 重朝
- 825 さし昇る月にからの声そひてみ舟の山を雁やこゆらん 季虔
- 826 ひとつらの数もあらはに澄るよの月にそ渡る天つ雁かね 兼道
- 夕雁
- 827 白雲もたなひく空の夕月夜ほのかに渡る初雁のこゑ 親暁
- 828 物おもふゆふへの空になく雁の涙や袖の露さそふらむ 季道
- 嶺雁
- 829 澄のほる月の光にさそはれてみねこす雁の数もかくれす 兼倫^(ウ)
- 百首歌よみ侍りける中に、湖上雁
- 830 月にふくひらのねおろし小夜更て堅田の浦に落る雁かね 清方
- 鶉
- 831 手枕の野への秋風さえぬらし床しめかねてうつらなくなり 季虔
- 832 山科の岩田の小野の花薄ほにあらはれて鶉なく也 景雄
- 月次歌の中に、夜鶉
- 833 床寒き野への真葛の秋風をよはにうつらのうらみてや鳴 季融
- 百首歌よみ侍りける時、鳴
- 834 さそはる、夢もはかなし沢水に数かく夜半の鳴のはねかき 季虔
- 月前鳴
- 835 水寒きかり田の面にふす鳴の床もあらはにやとる月かけ 親敬
- 田鳴
- 836 門田なる夜半のなるこの秋風に驚かされて鳴や立らむ 氏輔^(60・オ)
- 837 長きよに山田もる身のうき数もかそへてきくや鳴の羽かき 季休
- 擣衣
- △(墨消一首)
- 838 槌の音もとをちの里の小夜衣千々の思ひをかそへてやうつ 親直
- 839 嵐ふく岡辺の里の夜を夜を深み音もまとをの衣打也^(ママ) 景雄
- 月次三首歌の中に、聞擣衣
- 840 哀さはよそのね覚に聞わひぬ更ゆく月に衣うつこゑ 兼愷母
- 擣衣遠近
- 841 をちこちに夜寒をわふる友そとや声をかはして衣うつなり 季融
- 擣衣幽
- 842 さそひこし風のちからもたゆむらんふけて礎の遠さかるこゑ 兼愷
- 月下擣衣
- 843 から衣身にしむ月の初霜をいくよ重ねて打明すらむ 親敬
- 844 しつやさそねぬよ重ねる恨をも月に忘れて衣うつらし 氏輔^(ウ)

- 800 とちはつる草の戸ほそのひまとめてかはらぬ友と月やとふらん
古宅月
- 801 古へを忍ふの露にやとりきてふるの軒端の月もさひしき 公夫人
閑居月 季虔
- 802 あはれ又露をよすかの月ならてたれかはとはん浅ちふのやと
閑庭月
- 803 かきこもる浅茅か庭の露けさもとひくる夜半の月や知らん 親敬
月前草
- 804 風渡る葉末の露にやとりきて月もみたる、庭の浅茅生 涼相君
月十五首会に、月前竹
- 805 をく露の光も見えて呉竹のよふかき窓になひく月かけ 季翹
月前竹風
- 806 打なく竹の末葉の秋風にはれてはくもる窓の月かけ 読人不知
月十五首歌の中に、月前松風
- 807 雲霧は跡なくはる、山端の月にしくれて松風そふく 尚貞
月前舟
- 808 澄渡る月の出汐にさそはれてゆくゑ定めぬ秋のうら舟 親敬
もしほやく浦輪の小舟漕いて、烟のよそに月や見るらん 氏輔
- 810 浦浪に月のよすからひくあみの目をもあはせぬあまのよひ声 親敬
月五十首歌の中に、月前網

〔58・オ〕

- 811 あかなくにやとせる月のよなくは夢もむすはぬ露のさむしろ 景雄
月前筵
あるよは月を見てよみ侍りける
- 812 見るまゝに袂そぬる、秋のよの月の桂の露や散らん 季融
月歌の中に
- 813 やとりきて月も哀と思ふらんね覚露けき老のたもとを 氏輔
なとてかくはれぬ思ひそ老らくのむそし馴ぬる月にとは、や
- 814 月添秋思 昌貞
- 815 身のうさもなくさみぬへき月影に秋のあはれのいかてそふらん 氏輔
月次歌の中に、翫月
- 816 友とのみめてこし月よ秋ことにつもれる老をあはれとも見よ 親暁
- 817 そことなくさそはれ渡る心かなふけゆくまでの月にうかれて 兼迢
惜月
- 818 ふくるよも残り少き老か身に猶おしまる、有明の月 季融
心さへ山のはまてもうかれゆく傾く月をおしむ余りに 雁
- 820 芦辺より友よふ声のへたてなく空にも雁の又さそふらん 義武
呼かはす声をほにあげて久堅の天の戸渡る雁の一行 義智
- 821

〔59・オ〕

〔ウ〕

- 778 山寺のかねのひ、きも更はて、かはらの松に月そかたふく
田家月
- 779 足引の山田のひたも音すみて庵もる月に秋風そふく
親敬
- 780 をしねもる山田のいほのいをやすくねられぬ月に鹿も鳴也
昌憲
- 781 西はる、雫の田井にすむ月の影はいなはの雲もさはらす
読人不
田月
- 782 更渡る田面のなるこ風たえて稲葉におもる露の月かけ
親備
- 783 月次歌の中に水郷月
かたしきの袖にやとしてよなくの月になる、や宇治の橋姫
季融
- 784 すむ月も光くたけてちる浪の玉島川に秋風そふく
親敬
- 785 山家月
松の戸のさしもさひしき秋夜をなくさめよとや月のとふらん
季道
- 786 友とのみ馴ぬる月も柴の戸のさすかふけ行影はさひしき
景連
- 787 人とはぬみ山の松の下庵はもりくる月の影もすくなき
読人不
山里も同じ浮世の月なから心ひとつすすみまさりける
- 788 百首歌よみ侍りける中に同じ心を
昌貞
- 789 世のうさに思ひやかへん山里のこのまの月のこ、ろつくしも
月あか、りける夜くま原山といへるにやとりて
兼愷
- 790 ふしなれぬよさむをそへてさ、のはのみ山の月に秋風そ吹
更るよの尾上に遠き鹿のねを軒端の月にすましてそ聞
- 791 792 木間もる月の光も身にしみて秋すましましきよるの山かせ
清憲
- 793 あやめ田の山荘にやとり侍りける時
兼愷
- 794 山風のた、き捨たる松の戸にまつとしもなき月そとひくる
氏輔
- 795 同じ山荘にまかりて月見侍りけるに
氏輔
- 796 すむ月もこ、ろと清き光かなちりの世しらぬ山のした庵
氏輔
- 797 よなくの月にとはれてまつ戸のさすか心もすみ増るらむ
景雄
- 798 岩つたふかけひの水も音すみて軒端の山の月そ夜深き
長月の半なりける頃、兼愷あやめ田の山荘に宿り
る侍りけるか、からうたを作りて鶴山含宿霧 秋気
一凄然 落葉疎林雨 晴風深竹烟 開簾迎皎
月 欹枕聴清泉 窓下白雲夢 覺来独自憐と
申贈りければ、同じく詩を作りて答へ侍りける奥
にかくよみてかきそへ遣しける
月のみやなれてとふらん山窓のさすかさひしき秋の寐覺を
をのれか山荘の風月楼といへるにてよる
月にく軒の外山の松風にくらぬ夜半の時雨をそきく
同じ所に月見にまかり侍りける時
世はなれて心もいと、すめるよの月にふけゆく軒のまつ風
百首歌よみ侍りける時、月幽栖友
季休

月次歌の中に湖辺月明

754 空晴て水いさきよし鹿崎の松のひと木や月のくまなる 季虔

海上月

755 宵のまのあまの漁火影きえて海原とをく月そうつろふ 公

756 紀の海や浪のいつくもはる、よの月にうかへる浦のはつ島 兼愷

757 うき枕定めぬ浪の月影に猶あくかれんおきつふなひと 読人不知

海辺月

涼相君

758 いとまなきわか身をうらのあま人や月にもしほの烟たつらん

759 山のはもしらぬ浪路の幾千里月吹をくる八重の塩かせ 季虔

尚貞

760 もしほやく烟もたえてふくるよの月にこゝろやすまのうら人 〔55・オ〕

761 浦人の汐くむわさも心あれやねぬよの袖に月をやとして 景雄

浦月

兼愷

762 よなくの影もしほにくみそへて月にやなる、袖のうら人

763 露深き尾花か浪にすむ月の影もた、よふまの、浦風 季虔

磯月

764 いさりするあまのかゝり火さよ更て月になりゆく磯の山陰 親敬

765 岩こゆる磯辺の浪のよせかへり玉ちり増るよはの月かけ 親暁

兼道

766 あらいそのみるめくらぬ塩風にくたけてよする浪の月かけ

花月五十首歌よみ侍りける中に、島月

767 浪間より見ゆる小島にすむ月の氷をよする秋の塩かせ 親敬

月歌の中に

768 いさきよき入江の浪の玉津島月も光や猶みかくらむ 義智

崎月

769 さ、浪や浦ふく風も音すみて月そよわたる志賀の唐崎 親敬

百首歌よみ侍りける時、都月

770 雲霧の山をはなれて澄のほる月の都の空そくらぬ 昌貞

故郷月

771 すみ捨て野となる庭の蓬生に宿もる月の影も露けし 公

772 すみあらず軒の忍ふをより兼て影もやつる、ふる郷の月 季融

古寺月

773 松にふく嵐もすみて山寺の軒端の月のかけそ夜ふかき 公

774 くもりなきたか野の奥の灯に月も世に似ぬ光をやそふ 清憲

775 山寺の月の光もこゝろからうき世の外にすみ染の袖 読人不知

古寺暁月

776 心こそすみ増りけれ高野山暁月のかけをむかへて 季融

ある山寺にて月を見て

777 入相のかねより後は風の音も月にしつまる秋のやま寺 清憲

読人不知

- 730 やすらはて月にやこえん旅人のゆき、の岡に日はくれぬ共 親敬
谷月
- 731 谷深き木の下陰の埋れ水月もさこそはすみうかるらん 景雄
杣月
- 732 斧のえの朽木の杣の夜半の月しらすいくその秋にすむ覧 親敬
杣人の宮木引なる音たえて月にそすめるみおの山かせ 尚貞
- 733 橋月
- 734 いく秋もかけて絶せぬ契とや月すみ渡る久米の岩橋 義直
関月
- 735 秋風のふくにつけても白川の関屋の月の影そ身にしむ 季虔
野月
- 736 百草の露分のほりすむ月の影もはてなき武蔵野の原 正盈
雲烟たつとも見えぬあつま野に光みちたる秋夜の月 清憲
- 737 野月明といふ事を 氏輔
- 738 なひきふす萩の下葉の露までもやとりもらさぬのへの月影 氏輔
野径月
- 739 旅衣わけゆく袖の露なから月をそはらふ野路の篠原 読人不知
秋名所歌の中に
- 740 舟よはふ遠の河浪音ふけて淀野の月にすめる秋かせ 兼愷
逍遙舎十景歌の中に高野夜月
- 741 澄のほる影も高野の秋の空月にか、らん雲霧もなし 親直
- 742 なく鹿の声も高野の秋風にや、すみ昇るよはの月影 清方
水辺月
- 743 鬘とむる湊やいつこゆく水になかれてふくる秋のよの月 氏輔
河月 (54・オ)
- 744 河音もくもらぬ夜半の秋の水空よりかけてすめる月影 公
- 745 秋のよは光を花のよしの川月も浪間に乱れてそちる 季虔
- 746(後) 河風もや、身にしみてふくるよの月の氷を渡るかち人 読人不知
747(前) みな川瀬も清しつくはねの嶺より落る月をやとして 義陳
名所川月
- 748 はる、よの水音すみて夏箕川照そふ月は山陰もなし 季融
清滝川に月見にまかり侍りける時
- 749 秋はた、心の水も清滝や川瀬の月のすむにまかせて 読人不知
滝月 読人不知
- 750 亀の尾の滝の白糸くりかへしよろつ代へてや月もすむらん
月十五首歌の中に、池月
- 751 ます鏡ちりもくもらてすめるよの月の光も広沢の池 季融
湖月 (ウ)
- 752 曇りなき鏡の山にすむ月の影をみかける嶋の海顔 智昭
- 753 海原の嶋照まきる月影に志賀の浦浪よるとしもなき 兼伯

月

- 707 秋夜の長きを誰とあかまし月に友なふ心ならずは 兼迢
- 708 秋津洲の秋の光も曇りなくもろこしかけて照らす月影 清方
- 709 ふけゆけはよもの嵐もしつまりて塵なき空に澄る月かけ 清憲
- 月十五首歌の中に
- 710 久方の空すみのほる月影に星の光そまれになりゆく 読人不知
- 八月十五夜の月見侍りける時
- 711 へたてなき影や八隅に満ぬらんとよ芦原の中空の月 氏輔
- 712 晴てゆく雨のなこりの雲間より名にあらはる、望月の影 季虔
- 十五夜の月池にうつれるを見給ひて
- 713 曇りなき池の鏡にてる月はもなかの影やみかきそふらん 公
- 十五夜の月見んとて人の山荘にまかり侍りける時
- 714 跣にあへは光ことなる山里の月にしらふるみねの松かせ 親備
- 八月十五夜、やまひにふしてこもり侍りける時、人々
- 月見の会催しけると聞てよみ遣しける
- 715 見る影は同じ最中の秋なから心にさひし浅茅生の月 季虔
- 九月十三夜
- 716 名にしおふ月の光も玉くしけふた夜の秋にみかき添らん 季翹
- 侍月
- 717 くる、よりやかて心にかゝりけり月まつ方のみねのしら雲 季虔
- 718 山のはに月をまたる、夕暮の心や空にまつむかふらむ 季融
- 月初昇
- 719 山端の夕ゐる雲もや、はれてさそふ嵐に出る月かけ 景雄
- 月前雲
- 720 立まよふいく村雲にいくたひも待いて、みる中そらの月 祐貞⁽⁷⁾
- 月前風
- 721 雲の波はらひつくして久堅の月のみふねに秋風そふく 親敬
- 722 山のは、猶雲霧の晴やられて空ゆく月にすめる秋かせ 読人不知
- 月三十首歌の中に、月前清風
- 723 草木にはふく共見えすすめるよの月におほゆる袖の秋風 親備
- 月前露
- 724 しら露も光をそへて深き夜の月にみかける庭の玉さ、 公
- 山月
- 725 澄昇る影もさやかに雲はれて尾上の月に残る松かせ 智盈
- 726 かねの音も嵐の末にすめるよの月にくもらぬ小初瀬の山 清憲
- 727 かつらきや影も高間の山風に雲のよそなる秋夜の月 善弼
- 花月五十首歌よみ侍りける時、深山暁月
- 728 ふく風も露にしつまる奥山の槇の葉白し有明の月 兼愷^(53・オ)
- 729 □のねもかすかにすめる山里の松のこのまに有あけの月 親備
- 月五十首歌の中に、岡月

(52・オ)

(53・オ)

- 秋の頃大峰に登り侍りける時
684 山風のすゝふく音も身にそしむ吉野の奥の秋の夕暮 慶昵
- 閑居秋夕
685 かきこもるよりもき葎の奥までもうきはへたてぬ秋の夕暮 景雄
- 秋風
686 古へを忍ふの軒に音信て夕露さそふ袖のあきかせ 親備
- 田秋風
687 色になる稲葉みたれてちる露の雫の田井に秋風そふく 氏輔〔ウ〕
- 逍遙舎十景歌の中に、山田杜風
688 小山田のいなはの雲の打なひき露もしくれてわたる秋かせ 季休
- 689 いほ近き山田のいなは吹すてゝなるこに残る秋風のこゑ 清憲
- 秋田
690 かり残す山田のをしねもるいはの今いくよとか鳴子引らん 氏輔〔ウ〕
- 691 秋風に露も乱れて白鳥の鳥羽田の稲葉色つきにけり 季虔
- 692 山本に霧晴わたる朝風に田面のいなは末さはくなり 清憲
- 秋歌の中に
693 くれ竹のふしみの小田に雁なきて朝風寒し秋の山もと 景雄
- 田家秋寒といふ事を
694 露深き門田のをしね色つきてねぬ夜を寒み秋風そ吹く 親備
- 稲妻
706 東路を遙にいてゝ九重の雲井にむかふもち月のこま 読人不知
- 705 曇りなき世に逢坂の関の戸をさゝてむかふる望月の駒 季休〔ウ〕
- 704 立まよふ浪路の霧や深からん空にそえかふ沖のつりふね 清方
- 百首歌よみ侍りける時、駒迎
703 わたしもありやととはんゆふへ哉すみ田河原の霧の迷ひに 親敬
- 海辺霧
702 水の上はなひくもくらき朝霧にうきてそあくる河つらの里 兼愷
- 月次歌の中に、古渡霧
701 さす棹の雫も袖にしからんきりの下ゆく宇治の河ふね 読人不知
- 水郷霧
699 関の戸はあけてもくらき霧の中に猶こえわふる足からの山 氏輔
- 河上霧
698 風渡るあしろの浪の音すみて夜深くなりぬうち河霧 季休〔51・オ〕
- 関霧
697 山里に哀立そふ夕霧のまかきの野辺に鹿もなくなり 季融
- 百首歌よみ侍りける時、夜霧
696 出る日のうつろふ嶺は晴初て山もと深き秋の朝きり 兼頭
- 霧
695 爰にきえかしこに照らすいな妻は影を宿さん露のまもなし 智昭

- 660 有明のつれなき妻をとひわひてうき暁に鹿の鳴らむ 兼愷
- 夕鹿
- 661 秋風もゆくへを寒み奥山にこのは乱れて鹿そなくなる 親敬
- 662 山深き秋はゆふへの哀さを忍ひかねてや鹿もなくらん 季虔
- 月次歌の中に夜鹿
- 663 妻こひのたへぬ思ひか深きよの月に恨むるさをしかの声 清憲
- 664 まさきちる外山の嵐秋ふけて鹿も夜寒の月に鳴なり 景雄
- 大野といへる所にやとらせ給ひける時 景德公
- 665 ふし馴ぬ野へのさゝ屋のさひしきに鹿のね送るよはの秋風 山里に宿り侍りける夜、鹿のなくをきゝて
- 666 きく人も秋の哀にあかすよの思ひや同じ小男鹿の声 親善養母
- 山鹿 「(49・オ)」
- 667 なく鹿もはれぬ思ひか夕月夜をくらの山の霧の迷ひに 親敬
- 668 なく鹿の妻とふ声もさよふけてやゝすみ増る山端の月 季休
- 野鹿
- 669 をさゝ原よ深き露のをきふしに野風を寒み鹿や鳴らん 季虔
- 670 小男鹿の妻とふ野への夕暮は露や涙に置そはるらむ 景雄
- 671 萩か花うつろふ野への露霜に鹿のふしとも夜寒なるらし 飛岡天神宮奉納歌の中に、野外鹿
- 672 妻こふる野への夕霧立ならし深き思ひに鹿やなくらん 季融
- 海辺鹿
- 673 あまもさ身にしむ秋の夜半ならん鹿のねさそふ磯の山風 兼愷
- 田家鹿
- 674 夢覚る山田の庵の秋風に鹿のね遠く月そかたふく 景雄
- 675 をしかなく山田のをしね色つきてかりほの秋や夜寒成らん 清方「ワ」
- 秋夕 兼愷
- 676 たか里もたへぬは同じゆふへかとはゝや人に秋のあはれを 兼愷
- 677 夕暮の袂よなにゝしほらんむなしき空の秋を詠めて 景雄
- 678 身に堪へぬ誰か夕暮のならひより秋を哀となかめきぬらん 種定
- 百首歌の中に秋夕傷心と云事を
- 679 ならはしの秋の哀も心からうき身にたへぬゆふへならすや 景雄
- 秋夕露
- 680 老は猶こゝろの秋の深ければわきて身にしむ袖のゆふ露 氏輔
- 681 心より置そふ袖の露けさははらひもあへし秋の夕風 親備
- 山家秋夕
- 682 逃れすむみ山の奥に詠めても猶うき時や秋の夕くれ 読人不知
- 韻歌百首よみ侍りける中に
- 683 世をよそに思ひすてゝも夕暮のうきは身にそふみ山辺の秋 兼愷「(50・オ)」

- 638 ねや近くとひよる夜半の葦秋のうきねやともになかまし 兼伯
夜虫
- 639 くつかつらくる、よことの秋風を野へにうらみて虫の鳴らむ 季融
百首歌よみ侍りける時、野虫
- 640 秋寒き手枕の野のきり／＼霜夜の床やわひて鳴らん 読人不知
霧島杜奉納歌の中に、虫近枕
- 641 寐覚とふ夜半の枕のきり／＼秋の哀をかそへてやなく 実比
五杜奉納歌の中に同じ心を
- 642 うき秋の露のやとりと葦ねられぬ夜半の枕とふらむ 兼愷母
虫声非一
- 643 暮深きよもきか庭のさひしさもひと方ならぬ虫のこゑ／＼ 兼迢
虫声滋
- 644 風渡る花野の露になく虫も色の千種に声そみたる、 昌貞
虫声幽
- 645 むしのねもかすかになりぬ浅ち原うられ増る霜や置らん 氏輔
秋歌の中に
- 646 虫の音のうらかれてゆく浅ちふに有明の月も影よはる也 清憲
松虫
- 647 色かはる浅茅か原の露霜に猶かれ残る松虫のこゑ 兼貞
- 648 人とはぬあさちか庭の月影にたか心とやまつむしのなく 季休
ある山里にまかりける時、松虫のなくを聞て
- 649 軒端なる木末の風はしつまりてくる、まかきの松虫の声 景雄
句題十首歌よみ侍りける時、はた織虫のと云事を
- 650 くりかえし長き夜寒の秋風にはた織虫の声そ隙なき 兼定
鈴虫
- 651 狩衣すそ野の暮に聞ゆなり鷹の尾ふさの鈴虫の声 兼愷
蟋蟀
- 652 霜迷ふまくつか原のきり／＼秋の夜寒をうらみてやなく 親敬
きり／＼秋の思ひや長きよに鳴もよはらぬ暁のこゑ 読人不知
- 653 鹿 鹿
鹿
- 654 かりころもころも夜寒の秋風に裾野の鹿の声そうらむる 氏輔
- 655 鹿のねもふけて数そふ秋夜の長き思ひに妻やこふらん 清晴
韻歌百首よみ侍りける時、秋歌の中に
- 656 吹風の身にしみそむる秋よりや尾上の鹿もねにはなくらん 兼愷
月前鹿
- 657 雲はらふ風の山にたつ鹿のなくねもたかくすめる月かけ 親敬
- 658 妻こふる鹿も思ひや長月の有明の月にわひてなくらむ 氏輔
- 659 鹿のねもすみのほる也高まとの尾上の月に妻やとふらん 清憲
百首歌よみ侍りける時、暁鹿

女郎花露

615 をみなくし心よはくやなひくらんむすひもはてぬ露の契に 季虔

蘭

616 やとりきて匂ふも深し藤袴ほころひそむる野への夕露 季休

617 花の色やはころひぬらん藤はかま裾野をかけて匂ふ秋風 氏頭

荳蔻

618 秋風も何さそふらん荳蔻かやの乱れやすきはをのかこゝろを 兼伯

百首歌よみ侍りける時、槿

619 をく露も光へたてぬ薄霧のまかきにしらむ朝顔の花 昌貞

垣槿

620 松垣に日影へたつる露のまを花の千年と咲る朝かは 兼愷

草花

621^(後) 露わけていさ見にゆかんむさし野の一もとならぬ花の百くさ 読人不知
(46・オ)

622^(前) 咲まじる秋の千種のさま／＼に花野の露も色そ分る、 兼愷母

草花風

623 打なく野への千草の秋風に乱れて匂ふ花の上の露 公

624 萩か花吹しくころの秋かせに野への錦の色そみたる、 親直

朝草花

625 明わたる花野の露にうつろひて日かけほのめく霧の下草 読人不知

月次歌の中に、草花盛

626 花ならぬ野へこそなけれ色々の秋をつくせる露の百草 季虔

秋野といふ事を

627 夏深き野への緑のいつよりか花の千種に色かはるらん 景德公

露

628 老らくの袖になれてやよなくのね覚を時と露の置らん 氏輔

629 身のうさのそれとはなしに置まさる夕暮ことの袖の上の露 重朝^(ウ)

夕露

630 物思ふ袖の上よりをきそめて草葉にあまる秋の夕露 季虔

草露

631 秋といへはたかならはしの思ひ草わきて露けきゆふへなるらん 智昭

野露

632 百草のひもとく花の色々にわかれてむすふ野への朝つゆ 公夫人

633 霧はる、野への千草の朝しめり色もひとつになひく白露 景雄

百首歌よみ侍りける時、野径露

634 ぬれつ、も宿りやとはん旅衣すそ野に深き秋のゆふ露 季休

虫

635 百草の露もみたる、夕風にやとりきたためぬ虫のこゑ／＼ 氏頭

月次三首歌の中に、夕虫

636 露むすふ夕日かくれの浅茅生に夜をまつ虫や声いそくらん 兼愷^(47・オ)

637 夕露のうつむは深き浅ちふにや、虫のねのあらはれてなく 季休

592	今更にたれにかこたん秋風のつらさをうへし庭の萩原	氏輔	(44・オ)
	聞萩	季虔	
593	萩の葉はいかなる風のやとりとてきく人さへに袖しほらん		
	夕聞萩		
594	さひしさの色には見えぬ秋風をゆふへの萩の上葉にそきく	兼愷	
	百首歌よみ侍りける時、夕萩		
595	ならはしの秋しもつらき夕暮に猶身をしほる萩の上風	清憲	
	夜萩		
596	なをさりの音も身にしむ秋風をよなくやとす庭の萩原	親敬	
597	萩の葉の音こそ残れ老らくの夢は跡なきよはの枕に	季呢	
	山家萩		
598	音信のたえぬもさひし山里に人目はかる、庭の萩はら	季休	
	月次歌の中に故郷萩		
599	すみ捨したかふるさとの萩のはに幾秋風のやとりきぬらん	親敬	(ウ)
	簷萩		
600	くれ深き秋のあはれをさそひきて軒端に餘る萩のうは風	親暁	
601	音つる、風を枕にき、なれて夢にさはらぬ軒の下萩	季虔	
	萩破夢		
602	おとつれも身にしむ比の萩の風夜深き夢を何さそふらん	涼相君	
	萩		
603	紫の色にうつろふ狩衣わくるすそ野の萩かはなすり	義直	
	月次歌の中に、萩露	兼愷	
604	よなく／＼に乱れやまさるさをしかの妻とふ野への萩の上の露		
605	朝なく／＼見せはや人に花の上の露もさかりの萩のまかきを	親暁	
	水辺萩	親敬養母	
606	さく花のしからみかけてむらさきの渚やせくらん萩の下水		
	或人の山荘の庭に萩の咲みたれけるを見て		
607	咲匂ふ庭の真萩になく鹿のこゑをもさそへ軒の山風	氏輔	(45・オ)
608	小男鹿も馴てやすまん山里の籬の野への秋萩の花	清憲	
	百首歌よみ侍りける時、薄		
609	朝霧のまかきの野への花薄ほのかに見えてなひく秋風	季休	
	風前簿		
610	秋風にみたる、野への糸薄露の契も結ふまやなき	景德公	
	野薄		
611	打なひく野への千草は暮初て尾花に風の色そ残れる	季虔	
612	旅人のゆき、もたえてくる、野に尾花か袖の誰招くらん	親善	
	月次歌の中に、古砌薄		
613	まねくとも誰とひよらん花薄野となりはつる庭の秋風	親敬	
	百首歌よみ侍りける中に、女郎花		
614	口なしの色も露けき女郎花いはぬ思ひに猶みたるらん	清憲	(ウ)

569	よなく／＼にや、影そはん久堅の月の桂に秋はきにけり	親敬 <small>〔ウ〕</small>
570	散りそむる一葉の桐のこのまより秋ほのめかす三日月の影	尚貞
	初秋夕	
571	さひしさも萩の葉音に告初てゆふへの風に秋や立らむ	氏輔
	初秋露	
572	浅ちふにけき置そむる白露のさやかに秋の色をみすらん	兼定
	初秋萩	
573	萩のはにこそそのやとりを忘れすも又おとつる、秋の初風	季虔
	幽棲秋来	
574	人とはぬ露のやとりの八重葎わか身ひとつの秋やきぬらん	重朝
575	露けさも猶いかならん蓬生のしれける宿に秋はきにけり	清憲
	残暑	
576	けふも猶外面のならの下涼みてる日は秋の空としもなし	兼愷
	七夕	
577	初秋のみしかよなから年ことに契りは長き星合の空	正休
578	いは浪のよるそ短き天の川星の舟出もさそ急くらん	清憲
	織女契久	
579	織女の五百はた衣いく秋かたえぬ契をかさねきぬらん	親暁
	七夕風	
580	しほれこし天の羽袖もほしあひのゆふへ涼き秋のはつ風	兼倫
581	天の河深き契やむすふらん水かけ草のかれぬためしに	氏輔
	七夕当座会に七夕衣	
582	七夕の天の羽衣かさねてもうすき契や猶うらむらむ	季翹
	同じ折、七夕舟と云事を	
583	たなはたの天の河舟秋ことにさしもたえせぬ逢瀬成らし	政盛
584	彦星の思ひもきこそはる、よの月にこくらん天の河舟	読人不 <small>〔ウ〕</small> 知
	七夕枕	
585	たなはたのあふは一夜の天の河水かけ草の枕ゆふらん	景雄
	百首歌よみ侍りける中に、七夕糸	
586	秋ことにたえぬ契もたなはたの手引の糸のよるそ短き	清憲
587	織女もねかひの糸のくりかへし長き契をさそむすふらむ	景之
	七夕別	
588	天の河水まさるらしたなはたなこりは深きけさのなみたに	種定
	七夕後朝	
589	たなはたのなこり尽せぬ涙にやけさ梶の葉の露もそふらん	氏輔
590	明わたる天の川浪立かへり又こん秋のあふせたかふな	季融
	萩	
591	たか世より秋を哀に聞なして身にはしむらん萩の上かせ	季虔

△(墨消一首)

松下泉

550 苔のむす岩間のいつみ結ぶ手にす、しきそふる松の下風 昌都(7)

百首歌よみ侍りける時、夏祓

551 みそき川ぬさも流れてゆく水にとまらぬ夏の限をそしる 氏輔

川夏祓

552 夕浪に秋風たちぬみそき川はらふ袂は夏ものこらす 季翹

553 みそき川夕浪す、し麻のはのよるせや夏のとまりなるらん 昌貞

月次歌の中に、荒和祓 善弼

554 夏の日もけふみなつきのみそきせん秋はあすかのかはる洲瀬に

六月祓

555 みそきする袖のあつさもあらふらん夏と秋との中川の水 兼伯(41・オ)

(7)

浪の藻屑 卷之三

秋部

立秋

556 袖の上もけさはす、しくなりぬ也庭のひと葉の秋の初風 涼相君

557 よの程に露も置そむる玉さ、のは山す、しく秋はきにけり 季融

百首歌よみ侍りける時、立秋風

558 ふく風もきのふにかはる音羽山音にたて、や秋のきぬらん 清憲

立秋露

559 散そむる一葉の上の朝露はいつれかさきに秋を見すらん 季虔

景雄

560 いつくより秋はきぬらんかた敷の袖にまつしるよはの露けさ

立秋夜

561 夜深くも音信そめて荻のはの身にしむ風に秋やきぬらん 季休

百首歌の中に、新秋風

562 けさよりは衣手す、しうつせみのは山かすその秋のはつ風 兼愷

563 外山なる松ふく風もけふよりはうきをしらふる秋や立らむ 氏輔

野新秋

564 鹿のねも急きやすらん宮城野の小荻花さく秋はきにけり 景雄

早秋

565 手にならす扇も今はをく露の袖にす、しき秋のはつかせ 景德公

566 夕月のほのめきそむる山のはに西こそ秋の色も見えけれ

田早秋

兼愷

567 けふよりは小田のはつほもあらはれて年ある色に秋はきにけり

浦早秋

568 難波潟芦のひとよに吹そめてけさはす、しき秋のうら風 清憲

花月五十首歌の中に、初秋月

(42・オ)

- 528 夕立のはれゆく跡も塩かまの烟の末にくもる浦かせ
季虔
- 月次歌の中に行路夕立
- 529 袖の上はぬれしなこりの露ながら日影に向ふ野路の夕立
昌貞
- 百首歌よみ侍りける時、夕立晴
〔39・オ〕
- 530 夕立のなこりの露の玉かしは入日うつろふ陰もす、しき
親敬
- ある山里にて夕立のふり過ける時
- 531 夕立のすくるもす、し山里の軒端の松に露を残して
昌貞
- 雨後蟬
- 532 夕立は外山の松にふり過てなこりの蟬のこゑそしくる、
兼愷母
- 五杜奉納歌に同じ心を
- 533 村雨ははる、岡辺の松風にす、しく残る日くらしの声
保定
- 杜蟬
- 534 ねをたて、なけきの杜になく蟬の涙もしけし木々の下露
兼愷
- 樹上蟬
- 535 風渡る柳の木末かたよりに乱れてひ、くせみのもろこゑ
智昭
- 気色の杜にてよみ侍りける
- 536 なく蟬の声もしくれて秋近きけしきはす々し杜の下風
清憲〔ウ〕
- 百首歌中に、扇
- 537 秋風もまつかよふらん涼さをよなくさそふねやの扇に
氏輔
- ある人雪をゑかける扇を見せ侍りければ
- 538 ならす手にこすゑの雪をうつしゑの扇の風や夏の外なる
兼愷
- 納涼
- 539 あすも又きてこそとはめ蟬の羽の衣に秋をまつの下陰
季休
- 540 むすふ手の雫に秋も浮ふらん夕日かくれの山の井の水
祐陵
- 百首歌よみ侍りける時、夕納涼
- 541 山風のゆふへす、しき夏衣立うくもあるか杜の下かけ
氏輔
- 夏夕といふ事を
- 542 外面なるならの広葉の夕風に雨のなこりの露そこほる、
景雄
- 水辺納涼
- 543 わきかへる音さへす、し山陰の岩垣清水夏をへたて、
兼定〔40・オ〕
- 544 しみつせくあたりの岩は苔むして緑す、しき松かねの床
清憲
- 海辺納涼
- 545 浦風もひと木にやとす下陰は夏こそなけれ志賀の浜松
読人不知
- 月次歌中に松下待風と云事を
- 546 浪あらふ磯への松の下す、み秋をよせくる浦風もかな
兼愷
- 人の山荘にす、みにまかり侍りける時
- 547 村雨のすきの下陰露ちりて入日す、しく山かせそふく
季虔
- 548 山風のふかぬたえまも岩かねの泉に夏を忘れてやすむ
清憲
- 549 涼さの深きやいつれ山陰の岩もる水にかよふまつかせ
読人不知
- 泉

- 505 逍遙舎十景の中に柳河螢火といふ事を
打けふる岸の柳の河風にもゆる螢のかけなひくなり
季虔
- 506 風渡る柳の河の夕やみにてらすほたるもかけそみたる、
江螢
景雄
- 507 とふ螢光もす、し夕塩の入江の浪の玉とみたれて
兼道〔ウ〕
- 508 夕露の玉江の芦のうら風に光みたれてほたる飛かふ
読人不知
- 海辺螢
- 509 漁火の影やほのめく夕浪のまかきか島にてらす螢は
清憲
- 叢螢
- 510 暮深き露の光もあらはれてほたるみたる、庭の浅茅生
仲堅
- 月次三首歌の中に、窓螢
- 511 今さらに何かあつめん怠りのわかよふけゆく窓の螢は
季虔
- 512 ともしひの夜深く残る影ならてあつめぬ窓に螢とひかふ
義智
- 螢火稀
- 513 夏草の下ゆく水にとふ螢うつすもまれの影はさひしき
季翹
- 百首歌よみ侍りける時、夕顔
- 514 心なきしつか垣ほの花にたに光やそふる夕かほの露
兼愷
- 山家夕顔
（38・オ）
- 515 をく露もあはれはかけよ山里のいは木中の夕顔のはな
景雄
- 蓮
- 516 打なひく池のはちすの夕風に水の浮葉の露もす、しき
公
- 517 夕立の跡も涼きき、波に露の玉ちる池のはちす葉
池蓮
親暁
- 518 浪こゆるはすの浮葉にをく露のこほれて匂ふ池の朝風
妙法山といへる寺にて池の蓮を見て
親直
- 519 池水も心す、しくみかくらん法のはちすの露のしら玉
氏輔
- 520 所からたへなる法の花なれや濁にしまぬ池のはちすは
氷室
清憲
- 521 ふく風もさゆるひむろの山陰に深くや冬の猶残るらん
氷室涼
清憲
- 522 す、しきは夏こそなけれ氷室山てる日もよそにすきの下陰
兼定〔ウ〕
- 夕立
- 523 風さはく尾上の松はや、はれてふもとにくもる夕立の雨
氏輔
- 524 夕立は跡なくはれて残る日の光もす、し軒の玉水
季融
- 夕立雲
- 525 矢田の野は夕立すらしなるかみの音もあらちの山のはの雲
兼愷
- 山夕立
- 526 風さそふ雲のうき波うき立て夕立こゆる末の松山
氏輔
- 527 夏山の木々の若葉の露のまにはる、もす、し夕立の跡
浦夕立

- 482 袖の浦といへる所にて夏の月とあか、りける時 兼愷母
よる浪に影をひたしてすめるよの月もす、しき袖のうら風
百首歌よみ侍りける中に、夏月涼
- 483 吹わくる風を軒端の光にて櫓のこのまの月そ涼しき 兼愷
よなくは秋もやさそふ呉竹の葉分す、しき月の光に 読人不知
- 484 夏月易明
涼しさもあかてそむかふ櫓の戸の明る程なき短夜の月 公
夏のはまた中空の月影にはやくも鳥の声そ明ゆく 読人不知
- 485 夏草
夏草のしけみか中の小萩原古枝も花の秋や待らん 季虔
夏深くしけりにけりな山陰の花に分こし道の芝草 氏輔
- 486 夏草滋
花もなきまかきの野への夏草はしける緑をさかりとやみん 親敬
野夏草
- 487 行人もわけやわふらん夏衣すそ野の草の陰深きころ 清憲
山家夏草
- 488 今も猶人目やかれん山里のはらはぬ庭にしけるなつ草 兼愷母
あやめ田の山莊にて夏草のしけるを見て
- 489 山風も吹たにはらへ夏草の露にとちたる庭のかよひ路 兼愷（ウ）
- 493 草深きしつか垣ねに紅ゐの錦やしける床夏のはな 景雄
夏草もひとつまかきにさく花の色にわかる、なてしこの露 氏顯
百首歌よみ侍りける時、瞿麦露
- 494 山賤の垣ねに百合草の花の咲けるを見て 季虔
山里の人もとひこぬ垣ねにも草深ゆりの花は咲けり 氏輔
- 495 蚊遣火
かやりたく烟の末に賤か屋のいふせき程そ空にしらるふ 昌貞
すみうしと月も思はん蚊遣火の烟いふきせき賤か軒端は 昌貞
- 496 里蚊遣火
里つ、き月もくもるかかやり火の烟の上は雲霧のそら 公
閑居蚊火
- 497 夕烟むせふ思ひも浅からぬ浅茅か宿にくゆる蚊遣火 読人不知
螢
- 498 月をそき木の下陰の夕やみにまつや螢の光見すらむ 景德公
とふ螢沢辺の芦のよなくにもゆるやしけき思ひなるらん 親賢
- 499 雨中螢
五月雨のふるの沢辺に飛螢もゆる思ひはけつ方やなき 義智
百首歌よみ侍りける時、池螢
- 500 とふ螢いと、数そふ池水の底にもをのか影をうつして 清憲

（36・オ）

（37・オ）

- 459 さみたる、河そい柳浪こえてまさるみかきにかふ浮草 景德公
- 460 雲深き山は朝日も晴やうてさみたれくらす宇治の川浪 季融
- 瀧五月雨
- 461 岩ほよりせかれし水もさみたれに乱れて余る山の滝つせ 親暁^{〔ウ〕}
- 橋五月雨
- 462 柴人のゆき、もたえて五月雨の雲のみかよふ嶺のかけはし 公
- 杜頭五月雨
- 463 さみたれの日数をふるの神杉にひくしめ縄も朽んとやする 季光
- 五月雨のふりける比、古江といへる所にて
- 464 かきくらしふる江の浪に舟人の苦の雫もさみたれのころ 兼伯
- 水鶏
- 465 天の戸のさすか程なく明るよにいくたひた、く水鶏成らん 公
- くみなのみ昔覚えて八重葎しけれる門を猶た、くなり 景雄
- 夜水鶏 公夫人
- 467 待いて、月にそあくる楳の戸を夜半のくみな何た、くらん
- 牛窓に泊り侍りける夜、水鶏を聞て
- 468 牛窓の明る夜いそく浪枕た、く水鶏に夢もくたけて 兼愷
- 鵜川
- 469 月遅き夜川のやみにか、り火の影あらはれてう舟さす也 氏輔^{〔35・オ〕}
- 鵜川易明
- 470 大井川浪早くしらむや鵜舟さす身のうきせ成らん 兼愷
- 471 夏の夜はあくるもいと、早川のうふねの篝さす程やなき 季休
- 五社奉納歌の中に、深夜鵜川 義直
- 472 山川のうきせのやみの深きよにみをさかのほりう舟さすらし
- 百首歌よみ侍りける時、照射
- 473 五月やみもゆるほかけによる鹿の思ひや秋に嚙増るらむ 清憲
- 読人不
- 474 さみたれの雫もさそなしけ山にさつおのほくし打しめる影 兼愷
- 連夜照射
- 475 うつせみの山はほくし夜を重ねさしもむなく鹿や待らん
- 夏月
- 476 す、しさは夏ともいさや白妙の真砂にすめる月のはつ霜 義陳
- 雨後夏月
- 477 よいの雨は軒のあやめにふりすきてなこりの露に匂ふ月影 兼愷
- 月影のはる、もす、し夕立の露もまたひぬ庭の草葉に 尚貞
- 478 月次歌の中に、河夏月
- 479 夏のよは明るそやすきやす川のやなせの月の影もとます 季休
- 480 やとりくる影もとまで川水のはやくそあくる夏夜の月 祐倫
- 浦夏月
- 481 夏刈のみるめす、しき浦風にうきてそよする浪の月影 実芳

- 438 誰もけふひくやさつきのあやめ草長きねさしに千世を契りて
袖上菖蒲 親敬 清憲
- 439 長き世のためしに引てたか袖もけふはあやめのねをやかくらん
池菖蒲 尚貞 親敬
(33・オ)
- 440 生しける水のあやめの打なひきひく手にかほる池の朝露
あやめひく池の朝風かほる也露も雫も袖にみたれて 読人不知 尚貞
- 441 簷菖蒲 読人不知
- △(墨消一首)
442 打なひく菖蒲の葉末露落てす、しく匂ふ軒の朝風
夏夕といふ事を 読人不知 清憲
- 443 立花のにはふ軒端にふきそへしあやめもわかぬ夕闇の空
盧橘 公
- 444 村雨のなこり涼しき夕風に雫も匂ふ軒のたちはな
夜盧橘 親備
- 445 月かけもうつりにけり立花の匂ひをやとす閨の枕に
うた、ねの枕の夢のなこりまでにほひに忍ふ軒の立花 読人不知 親備
(ウ)
- 446 橘薫夜袖 清憲
- 447 小夜深き花立はなの香をしめて昔おほゆるかた敷の袖
月次歌の中に、暁盧橘 清憲
- 448 昔こそ猶しのはるれ立花の夜ふかくにはふ老のね覚に
故郷盧橘 兼愷母
- 449 ふる郷のあるもしらぬ袖の香や花立花に猶残るん
簷盧橘 季虔
- 450 遅桜ちりにし跡のなこりと同じ軒端に匂ふ立はな
樗 景雄
- 451 紫の雲にそ匂ふ夕日影うつる岡へにさける樗は
雨後樗 季翹
- 452 雨はる、軒の樗の夕風にぬれながらちる花もす、しき
霖 兼愷
- 453 さひしさも春のなかめにふり増る軒の忍ふのさせたれの比
五月雨 清憲
(34・オ)
- 454 くりかえし日数へにけり五月雨のをやみもやらぬ軒の糸水
垣ねゆくいさ、を川も音そひて庭にみなきる五月雨の比 親敬 公
- 455 ふしのまも雫そたえぬ夏刈の芦のしの屋の五月雨の比 読人不知 親敬
- 456 五月雨久 清憲
- 457 夏衣ほすまも見えず五月雨の日数かさなる天のかく山
百首歌よみ侍りける時、野五月雨 清憲
- 458 大江山いく野の道のかきくらしふみもかよはぬ五月雨の空
川五月雨 清憲

- 417 海辺郭公
郭公月のあかしのうらなれて浪のよる／＼さやかなる声 季休
- 418 湊郭公
舟とむる浦の湊の郭公我もゆふへのうきねにそなく 清憲
- 419 里郭公
なく声もほのかなけり郭公忍ふの里の夕やみ空 景德公
(ウ)
- 420 郭公よそにもらさぬ心とや忍ふの里に初音なくらん 景雄
- 421 月次三首歌の中に、故郷郭公
郭公いさかたらはん故郷のふりし昔を忍ひねにして 氏輔
- 422 山家郭公
松の戸のまつとしらは明くれにこと、ひ馴よ山郭公 宗秘
- 423 郭公遍
幾里の幾その人に郭公かたひら馴てねをつくすらん 季休
- 424 さそはれてなくもひまなし郭公たかりわかぬ月のよなく 季秀
- 425 郭公一声
さたかにはたれか聞らん郭公夢の迷ひの夜半の一こゑ 盛徳
- 426 早苗
今をせに早苗とる也郭公なくや五月の山の岡辺に 昌貞
(32・オ)
- 427 月次三首歌の中に、採早苗
さみたる、田中の杜のみしめ縄打はへけふも早苗とる也 兼愷
- 428 雨まちて早苗とるらし谷水のつ、きもあへぬ山の裾輪田 義智
- 429 雨中早苗
ふる雨の恵待えて民草もうるふや深き水の若なへ 公
- 430 夏歌の中に
雨すくる山田の早苗打なひき露も秋まつ色や見すらん 季融
- 431 朝早苗
あけ渡る門田の早苗雨すきて葉末におもき露の朝風 清憲
- 432 夕早苗
岡辺なる田子のをかさに雨晴て夕日す、しく早苗とる也 親敬
- 433 百首歌よみ侍りける時、急早苗と云事を 読人不知
- 434 早苗とる山田の田子のくる、まていそくや秋をいそくなるらん 昌貞
(ウ)
- 435 五月五日
をく露の匂ふもす、しあやめ草ふくや五月のけふの軒端に 昌貞
- 436 岡崎の別荘を営み侍りける時、五月の五日にわか 君典公
いらせたまひければ
- 437 ことしより猶ふきそへんあやめ草恵の露のかゝるために 季虔
- 438 菖蒲
けふといへは宮もわら屋も五月雨のふるき例にあやめをそふく 景雄
- 439 あかす猶枕せよとやあやめ草けさひく袖にまつかはらん 読人不知

- 392 つれなさをわれや恨みん郭公き、つと人のつくる初音に 親敬
- 393 郭公此里近きはつねとはまつ人つてにきくもうれしき 景雄
- 郭公幽
- 394 ひとこゑはおほつかなしや夕月の影も雲間の山ほと、きす 実勝
- 395 き、つとも誰にもらさん郭公世に忍ひねのきたかならねは 親直
- 396 郭公き、も定めぬ忍ひねはいつくにもらす心なるらむ 景之_(30・オ)
- 郭公何方
- 397 いつくとかき、も定めん村雨の雲のまよひの山郭公 季虔
- 郭公過
- 398 ひとこゑの行ゑやいつこ郭公雲のそなたに月を残して 親敬
- 月前郭公
- 399 ほと、きすいつれかさきにさそふらん同し山路を出る月影 季虔
- 400 さやかなる声をもらして郭公雲間の月に遠さかり行 助門
- 401 つれなさも限ありてや郭公待いつる月にさそはれてなく 景雄
- 夏歌の中に
- 402 郭公また出かての忍ひねはさそふ山路の月や待らん 景之
- 雨中郭公
- 403 夜の雨も音静なる草のいほにふけてかたらふ山ほと、きす 清憲
- 五月郭公
- 404 まつ程の恨ははれて郭公なきふりにけり五月雨の頃 読人不知_(ウ)
- 405 ほと、きすさそひていてよ山のはに月もいさよふ夕暮の声 親暁
- 夕郭公
- 406 郭公したふはつねを鳴すて、行ゑもおしき夕やみの空 氏顯
- 夜郭公
- 407 待えても心つくしの郭公このまの月にもらすひとこゑ 祐陵
- 408 むら雨は過ゆく空の郭公雲間の月に立かへりなく 親備
- 郭公の歌よみ侍りける中に
- 409 月かけも傾く山のほと、きすなこりをこめて雲になく也 季融
- 暁郭公
- 410 郭公かたらひすてしひとこゑにいと、名残も有明の月 智昭
- 寢覚郭公
- 411 はつねより驚かされし郭公幾夜の夢のなこりとふらん 親暁_(31・オ)
- 412 静なる夜半の寐覚をとひかほになくや枕の山郭公 清憲
- 夏歌の中に
- 413 なかすとも思ひはすてし郭公村雨するよはの寐覚に 兼迢
- 山郭公
- 414 まつ人につらき心のいつまてかなくね忍ふの山ほと、きす 尚詮
- 415 郭公なきてそ出る逢坂の山より西の月やとふらん 読人不知
- 杜郭公
- 416 なくこゑも老蘇のもりの郭公露に涙の色やそふらん 兼愷

夕卯花

371 山人の爪木にくれて帰るきは卯花垣や道しるへなる 清憲

百首歌よみ侍りける中に、杜卯花

372 むれてたつ鷺のつはさも色そへて田中の杜に咲る卯花 読人不知

岸卯花

373 す、しさも猶立そひて川岸にさくやうつ木の花のしら浪 清方⁽⁷⁾

百首歌中に、垣卯花

374 明渡る庭の垣根にすむ月の影を残して咲るうの花 昌貞

375 夏衣かけてほすらし白妙にうのはなさける里の垣ねは 清憲

籬卯花

376 ほと、きす声もほのかに残るよの月やまかきに匂ふ卯花 昌副

月次歌の中に、葵

377 かけそふるあしたの露の玉すたれ折にあふひの色そ涼しき 昌貞

378 神山やけふにあふひのもろかつらかけて絶せぬ世を祈るらし 清憲

挿葵

379 葵草かれぬためしかさ、竹の大宮人の世々のかさしは 読人不知

郭公

380 明やすきならひもつらし郭公しゐてまつ夜の一声の空 清方

381 時しもあれ田面の早苗とり／＼になきてそ渡る山郭公 読人不知^(29・オ)

待郭公

382 よひのまはよそにや忍ふ郭公待ふくる夜に一声もかな 公

383 つれなさを恨み果たる心にも山郭公やますまたる、 重朝

384 郭公き、しやいつのゆふへより初音の後も猶またるらん 善弼

夏の初にふるす谷といへる所にてよみ侍りける

385 なれも又はつね打いてよ鷺の古巢の谷の山ほと、きす 季融

或人の山荘に郭公の初音聞侍らんとてまかり

けるに、なかさりければ

386 世にしのふ初音なりとも松の戸のまつにかたらへやま郭公 親備

をのれかあやめ田の山荘に郭公聞たまはんとて

周山君いらせ給ひける時

387 陰深き山のかひある郭公とはる、けふの初音おしむな 兼愷

同じ所にて初て郭公を聞て

388 我か為の初音なりけり郭公山住の身はき、ふるすとも 景雄

初郭公

389 ほと、きすまつ夕暮はつれなくて寢覚こと、ふよはの初声 親盈

390 ほのかにもかたらひすて、郭公又たか里にはつね鳴らむ 親敬

或夜初て郭公の遙に鳴過けるをき、侍りて

391 しはし猶立かへりなけ郭公よそに契りし初音なりとも 義智

人伝郭公

- 349 はるの色をさそひ尽してけふよりは夏に薫れる木々の山風 親直
百首歌よみ侍りける時、首夏山
- 350 花の色もうつる青葉の山風に昨日の春の跡も残らず 季困
夏のはしめ初瀬にまかりけるによめる
- 351 花ちれは雲も尾上にわかる也春はきのふの小初瀬の山 季虔
夏の初つ方或人の山荘に人々伴ひまかける時、韻を
分ちて詩を作り歌よみ侍りしに、九青の韻を探りえて
ちれは又花のしら雪ふみ分て春の跡とふ山かけの庭 季虔
更衣 (27・オ)
- 353 世の中はあたる色の花衣たか心よりかへはしめけん 兼愷
せみの羽にかふるたもとは薄く共花の香残せ春のかたみに 重朝
たか袖も春をよそにやへたつらんけふ卯花の白かさねして 清園
朝更衣
- 356 なれ／＼しなこりをそ思ふ花衣けさぬきかふる袖の別に 昌貞
余花
- 357 鶯も帰る古巢の谷陰に春を残せる花のひとつと 清憲
月次三首歌の中に、尋残花
- 358 咲残る花やそれともしら雲のかゝる山路の奥をたつねん 季翹
新樹 景德公
- 359 よな／＼の軒もる月にいとふかな日影をさふる庭の若葉も 景徳公
(ウ)
- 360 此頃は夏をわかほの色そ、ふ山は常盤の木々の緑も 季休
雨中新樹
- 361 花の春うかりし枝の雨そ、きけさは若葉の色やそふらん 親直
水辺新樹
- 362 さくら花影見し春の日数さへうつるみとりの木々の下水 季虔
夏のはしめ、あやめ田の山荘にて
- 363 若緑おほふもくらき桜戸は花にとはれし宿としもなき 兼愷
同じ所に夏の初つ方人々とふらひまかりける時、句題
を分ちて歌よみ侍りけるに、苔むす庭のと云事を
- 364 夏山の木々の若葉も色そひぬ苔むす庭の同じ緑に 読人不知
月次歌の中に、新竹
- 365 幾よ、をふるねの竹もおひそめてなひく姿の若緑なる 親敬
ことしおひの緑の陰に萬代の色やこもれる庭の若竹 景雄
(28・オ)
- 366 新竹露
- 367 をく露も色やそふらん若緑さかゆく竹のひとつとよ／＼に 義陳
牡丹
- 368 色にそむ思ひはたとか深見草とめるもあたの花の浮世に 兼愷
卯花
- 369 白波に立まかひけりわたつ海の渚の暮りに咲るうの花 親敬
しつもさそ人にとはれん山本にかこふうつ木の花の盛は 兼愷母

- 330 松かえの花の藤浪立かへり是も千年の春にさかへん 貞如
- 池藤
- 331 さく花の影をうつして池水の汀に藤の浪やよすらん 氏顕
- 百首歌よみ侍りける時、浦藤 読人不知
- 332 よせかへる浪さへ花のむらさきに染てさくらん田子の浦藤
- 藤の花を手折とて
- 333 一枝をあかてたをらん藤浪の花の雫に袖はぬるとも 重朝
- 暮春藤
- 334 花の色もや、うつりゆく藤浪のこゆるや春も末の松山 氏輔
- 暮春
- 335 佐保姫の霞の衣立わかれいつくにはるの暮て行らん 尚貞
- 百首歌の中に、暮春月 (ウ)
- 336 春の色も残り少くちる花の木末にかすむ有明の月 兼愷
- 337 山のはに霞める月のなこりなく春も今は有明の空 清憲
- 春歌の中に
- 338 花の色はさそひつくしてしら雲の跡なき山に春風そふく 氏輔
- 春の暮に嵯峨の法輪寺にまかりけるによめる
- 339 花さそふ嵐の山のふもと寺入相のかねに春もくれ行 兼愷
- 春の暮によませ給ひける
- 340 ちる花の行ゑや風に恨みましとまらぬ春をしたふ余りに 公
- 341 おしまるゝ心もしらすゆく春のなこりをそへて花もちるらん 季休
- 暮春惜花
- 342 身にかへてうつろふ花をおしますはさのみ暮行春もうからし 読人不知
- 暮春鶯
- 343 と、まらぬ春の別やうくひすも花ちる枝にわひて鳴らん
- 春の暮に野へに鶯のなくをきゝて
- 344 ほのかにも霞のをちに聞ゆ也春も末野の鶯のこゑ 季虔
- 百首歌よみ侍りける時、三月尽 読人不知
- 345 散すきし花は昨日のなこりまでけふにとちむる春の夕暮
- 三月尽の日によめる
- 346 花鳥のあかぬなこりにけふは猶春の別や惜みそへまし 貞如
- 浪の藻屑 卷之二 (ウ)
- 夏部
- 首夏
- 347 山々の霞の衣立わかれそらもみとりに夏はきにけり 景德公
- 348 花衣けさたちかふる蟬の羽に春のなこりは薄き共なし 氏顕
- 首夏風

- 307 咲匂ふすかたの池のかきつはた水にも花の色はへたてす 種定
ある人の山荘の庭に杜若の咲出けるを見て
- 308 山みつに深き色そふかきつはた花もうき世の春をへたて、 季翹
梨
- 309 梅さくら散にし跡の軒端にも白きを色の山なしの花 季休
木末にも花の浪たつ桜麻の生の浦なし今か咲らん 清憲
- 310 百首歌よみ侍りける時、董 昌貞
- 311 露なからつむともあかしすみれ草色のゆかりを袖にうつして
野董
- 312 野へにちる花のしら雪かき分て若菜の後のすみれをそつむ 兼愷
袖の上も色に出らん乙女子かすみれ摘野の花の夕露 季休
- 313 故郷董
住すて、野となる庭の董草残るもあたのゆかりにやさく 親敬
躑躅 (24・オ)
- 314 咲にけり竜田の岸の岩つ、し秋の紅葉を花にうつして 兼愷
百首歌の中に岡躑躅
- 315 紅ゐの八塩の岡の岩つ、し夕日も花の色や染らむ 季休
- 316 歎冬
いささらは折てかさ、ん山吹の花もとまらぬ春のなこりに 氏輔
- 317 山吹の色香そ残る桜花ちりにし後の春のかきねに 季秀
- 318 319 歎冬露
朝露も光をそへて歎冬の花にみかける玉川のみつ 季虔
河歎冬
- 320 暮てゆく春せきとめよ蛙なく神なひ川のやまふきの花 氏輔
山吹の花のしからみかけそへて匂ひにせくや谷川の水 長親 (ウ)
- 321 いかたしも心やよとむよしの川さくやまふきの花にせかれて 智昭
百首歌よみ侍りける中に、岸歎冬
- 322 玉川のゐてこす浪やか、るらん露に乱る、岸の山ふき 清憲
宇治川にてよめる
- 323 みなかみの岸の歎冬咲ぬらし花おりそふる宇治の柴舟 兼愷
井手の渡りにて歎冬の咲けるを見て 読人不知
- 324 かきわけてちらさんもうし山城の井手の渡りのやま吹の花
籬歎冬
- 325 ゆく春もしはしかこはん歎冬の八重咲おほふ花の籬に 兼倫
行春のなこりをこめて山吹の花やまかきに猶匂ふらむ 氏顕
- 326 藤
咲か、る池の汀の松風に底さへさはく藤浪のはな 親直
- 327 月次歌の中に、松上藤
さく藤も散らて匂はん松かえの常盤の色に春を契りて 親敬
(25・オ)
- 328 329

286 よしさらは木陰も八重にふりうつめおしむにちらぬ花の雪かは

兼愷母

287 春風のさそへはつもる木のもとにきえなて匂ふ花のしら雪

▽(墨消一首)

三月三日ある山里にいらせ給ひて

288 山陰の水の流に浮ひきてくむ手も匂ふ桃のさかつき

公

桃

289 三千年も咲やにははん花の名のも、幾度か春を重ねて

親備

桃溪といへる所にて桃の花を見て

290 影うつす花も盛にさく桃のくれなゐく、る谷川の水

清憲

雉

公夫人聖子
君

291 花の色もあくると山の朝ほらけ声あらはれてき、す鳴也

292 狩人もあはれとはしれ春の野になきてき、すの子を思ふ声 季融ウ

夕雉

祐貞

293 子を思ふ心のやみも深からんかすむゆふへの野辺のき、すは

野雉

294 ねにたて、き、すなく野の夕霞深きおもひに妻やこふらん 季道

百首歌よみ侍りける時、雲雀

昌貞

295 空高くあかるひはりもをのつからもとの末野の床はまとはす

田雲雀

296 打かへす田面の床をしめかねて空にひはりの声霞む也

季融

燕

297 春雨のふるの軒端のつはくらめつはさも濡てやとりをそとふ

兼愷

298 鳥たにも忘れぬ軒のつはくらめこそそのやとりの馴し契は 季休

月次歌中に苗代

299 苗代にちりうく花をせきいれて水口かこふ春のみなと田

季虔(23・オ)

雨後苗代

300 雨はる、なはしろ垣の露ちりてあせこそ浪に春風そふく 兼愷

百首歌よみ侍りける時、苗代水

301 秋をまつ民のみつきのたねなれや水ゆたかなる小田の苗代 氏輔

蛙

景雄

302 暮か、る春のあはれもますけおふるあら田の末に蛙なくこそ

303 山吹の下ゆく水になく蛙声さへ花の香に匂ふらむ 兼愷母

夕蛙

304 山本はかすみてくる、春雨の雫の田井にかはつ鳴なり

季虔

月次三首歌の中に、池蛙

305 春雨のなこりの露の浮草に蛙鳴よる池のさ、なみ

兼愷

沼蛙

306 陰深き岩垣沼の夕霞あはれをこめてかはつなくなり

昌貞ウ

杜若

- 264 咲おほふ花にまかせて山陰はくれてもとちぬ桜戸の春 清憲
- 265 鶯もこと、ひなれん此比の花そ友なる春の山すみ
- 266 山深く猶うへそへよ桜戸の花にとひくる人を契りて 景雄
- 267 さき匂ふ木の下陰に言の葉の花も数そふ春の山さと 読人不知
- 閑庭花 読人不知
- 268 くる春はへたてぬ庭の浅ちふにかれし人目そ花にまたる、
平佐のあるし北郷久珉君の庭に、近衛左府公より給
はせし桜のひと木を移しうへられしか、此春初て花咲
ぬる事を歎ひ、庭花初開といへる題をこゝらの人々に
あたへて歌よませ給ひける時、よみて奉り侍りける
269 咲そひて千世も重ねんこゝのへの春をうつせる庭の初花 兼愷
- 270 うへてまつ心の花のはつ桜ひらく砌に立な_(21・オ)見ん 季虔
- 271 咲そめて都の春のおもかけもみきりにうつす花の一本 季翹
- 老て後庭に桜をうつし裁ける時よめる
- 272 移しうふる桜よ老のあはれしれ花にくらさん春もいく春 季虔
- 花
- 273 散る花の別そおしき老らくの又こん春もしらぬなこりに 重朝
- 274 おしめともとまらぬ色の花桜面影にたに残しても見ん
- 275 おしむ其心もさそへ春の風ちりかふ花の行ゑをも見ん 季虔
- 花歌の中に
- 276 色も香もあはれあたる盛かな花にうき世の雨風の空 兼愷
- 落花 季休
- 277 春風の治まれる世にをのつからならひありとや花のちるらん 景雄
- 278 いつよりかちることはりをならひきてとまらぬ花の心なるらむ
- 279 ちる花は跡なき雪にまかふとも香をたにのこせ庭の木末に 氏輔
- 風前落花
- 280 風さそふ木末の雲はや、はれて花にくもれる春の山もと 氏輔
- 水上落花
- 281 高ねにはちりも残らて谷川の瀬々をさかりの花の白なみ 智昭
- 大井川にて花の散ける時筏をくたすを見て
- 282 大井川くたす浪間の筏士や散しく花を又ちらすらん 兼愷
- 海辺落花といふ事を
- 283 いそ山の桜散かふ春かせに空にも花のしら浪そたつ 兼貫
- 花月三十首歌の中に
- 284 打よす_(ウ)浪の花さへ匂ふなり磯山桜いまかちるらし 景雄
- 人の山莊の庭に花の散けるを見て
- 285 山里の払はぬ庭にちりしきてわくるやいくへ花の白雪 親敬
- 落花似雪
- 景雄

- 241 水かみの岩もと桜ちるまゝに春や落そふ滝のしら浪 季翹
- 池上花
- 242 ちらぬまの影をうつせる池水は花の鏡そ曇る共なき 親敬
- 花月五十首歌の中に湖上花
- 243 吹おろすひらのたかねの春風に花の浪そふ鳩の海つら 読人不知
- 月次歌中に、海辺花
- 244 花そのゝ木々の春風吹ぬらし句ひにかすむ志賀の浦浪 氏輔
- 245 散らぬまもうつろふ浪に磯山の花をわけ行春のうら舟 季虔
- 浦花
- 246 あま衣句ひやうつす磯山の花さく頃の春のうらかせ 実方
- 磯花
- 247 心なきあまのみるめいかならんいそ山桜さきにほふころ 景通(ウ)
- 塩風に花やちるらん磯山の松の木末をこゆるしら浪
- 248 都花 清憲
- 249 立ならふ色やなからん桜花八重九重のはるのにしきは 智昭
- 百首歌よみ侍りける時、禁中花
- 250 九重の雲井のさくら咲ころは大宮人も袖句ふらん 季休
- 杜頭花
- 251 さほ姫の春の手向と句ふらし桜の宮の花のしらゆふ 清憲
- 古寺花
- 252 吹おろす風もかほりて小初瀬の花よりもるゝ入相の声 親暁
- 253 かねの【音】は暮そめにけり初瀬山霞みもはてぬ花の光に 季融
- 故郷花
- 254 鶯のやとりあらさぬ花の色もあはれ老木の世々のふる郷 兼愷
- 255 住すてしたか故郷の世々の春花やあるしと猶句ふらん
- 256 すむ人はたえて幾世をふるさとの花や昔の春に逢らん 読人不知
- 山家花
- 257 山住も春はさくらの花心うきて浮世の人そまたるゝ 景雄
- と言事を
- 258 松の戸のさすか月日はわかね共花の便に春そしらるゝ 親敬
- 259 散らはまた山のいつくに住かへん花を便にむすふいは 読人不知
- あやめ田の山荘の花盛なる頃よみ侍りける
- 260 さひしさも花にとはるゝ山蔭は散なん後を誰に契らん 兼愷
- 同じ所にて初て花の咲侍りける時
- 261 やとしめてたのむ外山の花の陰幾世の春も立馴て見ん 兼愷母
- 同じ所の花見給はんとていらせ給ひける時
- 262 春ことにとひよりて見ん色も香も心と深き花の下いは 公
- 263 たつねいる山桜戸の花の陰あかぬ心をやとしても見ん
- 同じ所の花見んとて人々伴ひまかりける時

朝花

220 明そむる軒の外山の薄霞ほのかに花の色そわかる、

景德公希

△(墨消一首)

221 あくるよの月は霞みて山のはの花の光そや、しらみゆく

親備

夕花

222 山桜けさ見しよりも夕はへの花やこゝろの色をそふらん

公

223 山陰ははやくれ初て一村の花に入日のいろそのこれる

季虔

ある山里に花見にまかり侍りける時

224 くれ深きなこりをそへて山里の花の雲間に匂ふ月かけ

尚詮

山路の花見にまかりて帰りける折よめる

225 長き日を花にくらして帰るさはあかぬ山路も月にうかれん

智盈

春の月あかゝりける夜、藤原昌貞ある所の花の陰に

さまよひぬるとて、花間乗月旦徘徊 夜静風輕

春色開 林下興闌吟詠去 清香素影襲衣来

といへるからうたを作りて見せ侍りければよみて遣しける

226 月花の影も匂ひも見る人のこゝろと深きあはれそふらん

季融

山花

227 みねふもと花より花に咲そひて匂ひかさなる春の山風

公

228 小初瀬の花のさかりもあらはれて桧原か奥にかゝるしら雲

季融

229 さく花の匂ひは四方の嵐にて雲を色なるみよしの、山

景雄

吉野山にて花の盛なるを見て

230 しら雲のはてなき色にうつもれて花のそこなるみ吉野の山 兼愷

同じ所にて人々花見んとて行かひけるをみて

231 しをりせて深くなわけそよしの山跡もいくへの花のしら雲 景雄

初瀬山の花の盛なりける比

232 明渡るはつせのみねの花盛空もかすみてにほふしらくも

助門(ウ)

鈴鹿山をこえ侍りける時、花の咲出けるを見て

233 ふりすて、すぐるもおしきゆふへ哉鈴鹿の山の花の下道 景雄

遠山花

234 心あてにそれともわかん桜花山のはとをくかすむしらくも 親敬

235 よの程にさくら咲そふ遠山のみとりに花の明はなれゆく 安

山路花

読人不知

236 さくらさく山分衣はるく／＼とにほふもふかき花の下みち

岡花

237 色に香にしはしやすらへ旅人のゆき、の岡の花の下陰 親暁

百首歌よみ侍りける時、杜花

238 せきいる、苗代水も匂ふなり田中のもりの花の雫に 氏輔

関花

239 旅人の行も帰るも木のもとに花やとむらむ逢坂の関

尚貞

240 たひ人もさすか過うき逢坂の山路の花や春の関もり

読人不知

(19・オ)

滝花

- 198 春もまた花まつ山の風さえて桜か枝に淡雪そふる 季融
- 鹿児島の住吉社奉納歌の中に 義□
- 199 色も香もいつくをさきに尋ねみん花にうかれぬ山しなけれは 季虔
- 尋花
- 200^(後) 契置し花にといそく山路哉こそ枝折の跡をたつねて 読人不知
- 201^(前) き^(前)のふよりけふは山路の奥深く分てや花のありかをも見ん 慶昵
- 百首歌よみ侍りける時、花初開
- 202 春の雨の恵待えてけさよりはこゝろもとくる花の下ひも 清憲
- ある山陰にて初て花の咲けるを見て
- 203 色浅きはつ花染のかり衣はるのさかりを又やきて見ん 親直
- 花漸盛
- 204 立なる、心の花も色やそふきのふにまさるけふのさかりは 季虔^(ウ)
- 花盛
- 205 雨にまち風におしまんうさもなしのとかなる世の花の盛は 季翹
- 鹿児島住吉社奉納歌の中に
- 206 常盤木のもるゝにしるししら雲の重なる山の花の盛は 兼愷母
- 庭の花の盛なる比
- 207 さくら花今や盛の木末より軒端をかけてにほふ白雲 義但
- 見花
- 208 ちらは又思ひやいてん身のうさも忘れてむかふ花のひと時 清憲
- 見花日暮
- 209 木のもとのやとりやからん山桜あかぬ色香にけふをくらして
- 花歌の中に
- 210 あかなくの色香を袖にかたしきて夢やたのまん花の下ふし 季虔
- 翫花
- 211 まちおしむ我もあたなる心かなさけはとくちる花の浮世に 昌貞
- 花を手折とてよめる 氏輔
- 212 つらき名は風よりさきにたちぬへしかてたをれる花の一枝
- 寄風花
- 213 袖の上にさそふ匂ひはそれなから春ふく風や花にいはん 景雄
- 雨中花
- 214 春雨のふるの山辺の桜狩にほふしつくは袖にいとほし 清憲
- 色も香もうつりやはてん桜花心もかすむ春のなかに 親備
- 雲間花
- 215 しら雲も立まかひけりさくら花匂ひへたつな春の山風
- 霞中花
- 216 尋ねいる奥や盛の花ならん霞をもれて匂ふやまかせ 季休
- 217 花の色はつゝみもあへぬ山姫の霞の袖に春風そふく 景雄^(ウ)
- 月次歌の中に、曙花
- 218 春霞立そふみねのしら雲も花になりゆくあけほの、山 氏輔
- 219

176 いつくにかゆふへは宿をかりかねのなきて立なるしの、めの空

百首歌よみ侍りける時、夕帰雁

〔ウ〕

177 行雁もしはしやすらへ夕月夜ひかりも匂ふ花のたかねに

昌貞

夜帰雁

178 今とはとて帰る雲路になく雁を思ひそ送るおほろよの空

親敬

179 きぬくのつらさはしらぬ心にも鳴てや帰る夜半の雁かね

親直

180 かへる雁はれぬおもひか有明の月に別る、朧夜のこゑ

季融

雁別花といふ事を

181 秋夜の月に馴こしかりかねも花に別を何いそくらむ

兼迢

帰雁幽

182 ほのかなる声を残してゆく空の霞に消るかりのひと行

兼伯

遠帰雁

183 したふその心の末も霞むなり天つ空ゆく雁の一つら

読人不知

ある夕に帰雁を聞て

清憲

184 かきくらすゆふへのやみに音つれて行ゑもしらぬ雁の玉つさ

〔15・オ〕

桜

185 山さく^{〔ア〕}あかて^{〔ウ〕}かる、春ことの日影そ花の上にみしかき

季翹

186 分くらす春の山路の桜狩やとりやとはん花の木陰に

景雄

山桜

187 明そむる遠山さくらほのく^{〔ウ〕}とまつあらはる、花のしら雲

善弼

188 風月楼十二景の歌よみ侍りける時、林山桜

立ならふ松のはやしの山桜花も千年の春に匂はん

季虔

あやめ田の山莊逍遙舎といへるにて、十景の歌よみ

侍りける中に、戸外桜花

189 明くれに契らぬ風のとふもうし山さくら戸の花のあるしは

兼愷

同じ心を

190 立なる、花の色香に明くれて山さくら戸も春はさ、れす

親敬

191 しつかなる山桜戸の花の雲うき世をよそにへたて、やみる

景雄〔ウ〕

糸桜

192 朝露もみたれて匂ふ糸桜打はへなひくはなの木末に

親備

庭なるいと桜の花咲ける比

君^典公^典いらせ給ひて御歌とも賜はりければよめる

193 言の葉の花も色そふ糸桜いく春長く猶にほはなん

親敬

花

194 いささらは老も忘れてさく花の色にこ、ろや染はて、みん

定暁

195 なれくしたか世の春の契より花にはさのみつくす心そ

清方

196 此頃は行かふ人の袖の上も花にや匂ふ四方のはるかせ

義直

待花

197 待わふるこ、ろの色もいつよりか花の下ひも打とけて見ん

氏輔

△（墨消一首）

春寒待花

〔16・オ〕

春曙

154 打かすむ田里の外のはれまでこゝろにこもる春の曙

兼愷

(13・オ)

月次歌中に、山春曙

155 花の色はまたあらはれぬ山端に月を残して霞む明ほの

親敬

156 かすみたつ外山の月は影落て花を光の曙のそら

季融

海上春曙

157 わたの原霞の浪のほのかにも八十島しらむ横雲の空

兼貞

浦春曙

158 浦人の霞のうちにこく舟もや、あらはるゝ浪の明ほの

秀門

山家春曙といふ事を

159 残る夜の月も霞みて花鳥の色音にあくる桜戸の春

尚貞

160 うくひすの声もほのかに霞む也柴のと山の明方の空

読人不知

春雨

161 草も木も同じ恵やたのむらんもれぬ野山の春雨のそら

清憲〔ウ〕

読人不知

162 かきくらしほすまも見えぬ佐保姫の霞の袖に春雨そふる

百首歌よみ侍りける時、同じ心を

163 咲く花の盛もあたにすきなまし思ひはれせぬ春雨の空

氏輔

夕春雨

164 風の音も霞みてくるゝ春雨の雫にしめる軒の松かけ

智昭

暮山春雨

165 あかなくの花にゆふへや急くらん霞む外山の春雨のそら

季虔

夜春雨

166 あくるよを花にそいそくはつ桜さくらん頃の庭の春雨

兼愷

月次御歌の中に、閑中春雨

167 ふりまさる軒の雫のさひしさも忍ふにたへぬ春雨の空

涼相君

旅春雨

168 思ひやる袖こそぬるれ春雨のふるさと遠く空も霞みて

季融

百首歌の中に、春駒

169 山桜ちりかふ野へに立ならし花のふゝきにいさむ春駒

兼愷

野春駒

170 野を遠み霞むも深き若草の烟の末に駒いはふこゑ

公

帰雁

171 さく花にしはしと、めん春の雁帰る雲路もかすみへたて、

公

172 花の色はよそに見すて、しら雲の空のいつくに雁の行らん

智昭

173 しら雪のふるさと遠く帰るらし都の花のころもかりかね

季翹

174 へたてゆく霞の衣かりかねの春に別をうらみてやなく

尚政

暁帰雁

175 有明の月は残りて山のはの霞のをちにかへるかりかね

親敬

季休

- 131 池の面はいと、柳の緑そふ浪の玉藻に影をましへて 実勝
- 132 わきも子か手染の色か猿沢の池にみたる、青柳の糸 季融^(ウ)
- 月次歌の中に、遠村柳
- 133 一むらの烟も深く打なひくとを山本のあをやきのかけ 清憲
- 若草
- 134 花の色に分れん野への百草も二葉や同じ若緑なる 親暁
- 野若草
- 135 むら／＼に雪間を分て春の色もいたりいたらぬ野への若草 昌貞
- 136 雪の中にや、もえ出る若草のはつかに野への春も見えけり 季休
- 百首歌よみ侍りける時、早蕨
- 137 しつもさを折や知らん山里の外面の野への春の早蕨 清憲
- 谷早蕨
- 138 谷深き陰の朽葉の下わらひひとり折しる色も少し 親敬
- ある岡辺にて、人の蕨を折けるを見て
- 139 おる袖も匂ひやうつる初わらひもゆる岡への花の木陰は 景雄^(12・オ)
- 野遊
- 140 長閑なる心の花の都人野への霞やわけくらすらむ 氏輔
- 141 蝶鳥もうかる、頃の春日影心をへの花にくらさん 昌貞
- 百首歌よみ侍りける時、遅日 読人不^知
- 142 花鳥の色音にさしもまきれすは春の日影をいか、暮さん
- 143 花をまつ心つくしをいか、せんくらすも遅き春の日影に 清憲
- 月次歌の中に、遊糸 兼愷母
- 144 のとかなる野への春日にくりいて、行ゑもわかす遊ふ糸ゆふ 春月
- 春月
- 145 軒端なる花の光も朧けに霞みてにほふ春のよの月 凉相君
- 146 春といへは霞むならひのよはの月物思ふ袖に猶くもるらむ 氏輔
- 百首歌の中に、春月朧
- 147 さらぬたに心つくしのこのまより霞みて出る朧夜の月 読人不^知
- 春曙月
- 148 明ほの、あはれも深く立こめて霞に残る山のはの月 景雄
- 春暁月
- 149 あくるよの光は空に霞みつ、と山の花にしらむ月かけ 季融
- 山春月
- 150 くる、夜の月も尾上に匂ひきて木末の花を分のほる影 尚貞
- 151 暮深く匂ふたかねは見えわかつて霞の奥にいつる月かけ 親直
- 海辺春月
- 152 塩かまの烟になれしうら人はかすむわかし春夜の月 季融
- 百首歌よみ侍りける時、浦春月
- 153 塩竈のうらみも春は立そひて烟の上にかすむ月かけ 園憲

- 110 春風のにはふ方にやさそはれん梅さく宿のさたかならねは 景雄
百首歌よみ侍りける時、古宅梅
- 111 霞む夜の月も傾く軒端より同じあれまをもる、梅か、 季虔
軒梅 〔10・オ〕
- 112 花の香はさやかに匂ふ夕月夜おほろにかすむ軒の梅かえ 親暁
- 113 ふる郷の軒の忍ふの雫さへ梅さく頃は香に匂ふ也 季休
をのれかあやめ田の山莊にて、梅の盛なる比
- 114 鶯の声たにさそへ山里のいは木に匂ふ梅のしたかせ 兼愷
庭の梅の花盛なる頃、藤原兼愷か母の許に申
つかはしける
- 115 さく花の深き色香も人とはてあたに散なん宿の梅かえ 親博妻
かへし
- 116 ことの葉の花の色香にさそはれて梅さく宿の春や問まし 兼愷母
- 117 紅梅に雪のつもりけるを見て 義武
雪の中にかくれぬ色か紅みのそのふの梅の花の盛は
春歌の中に 〔ウ〕
- 118 花の色もくれなるふかく匂ふ也夕日うつろふ軒の梅かえ 読人不知
落梅 季融
- 119 花のかはさそひもあかて梅かえにちるをかきりと春風そふく 昌貞
- 120 色も香も猶おしまるれちる花の行ゑさためぬ梅の下風 兼頭
落梅風
- 121 治れる世の姿とや青柳のなひく小枝に風もみたれす 公
柳
- 122 くりかへしあかて染らん青柳の花田の糸の春の朝露 親備
柳風
- 123 染かけし柳の糸の打はへてのとかになひくさほの川風 親敬
春歌の中に
- 124 青柳のみとりの糸の数見えて軒の夕日に春かせそふく 読人不知
柳露 〔11・オ〕
- 125 朝風は払ひもはてすしら露のみたれて結ふ青柳の糸 重朝
- 126 佐ほ姫のかさしの玉か青柳の緑の糸に結ふしら露 氏輔
柳帶露
- 127 白玉をつらぬきとめて朝露の光もなひく青柳のいと 季虔
水辺柳
- 128 浅からぬ色やそふらん青柳の下ゆく水も同じみとりに 安善
垂柳臨水
- 129 影なひく岸の柳の浅緑水底かけてはるかせそふく 季虔
河柳
- 130 紅葉、の錦はたえてたつ田川浪にあやおる青柳の糸 昌貞
池柳

87^(前) 山里につもるま、なる白雪も春来にけりと今やとくらん 氏輔

春雪

88 ふりくらす空に日数はつもりても跡なく消る春のあは雪 親暁

余寒

89 ふる年の雪けの雲の立かへり猶春さむし山風の空 兼備

90 天津風春をいつくに吹とちて又さえかへる雲のかよひ路 親直

百首歌よみ侍りける時、暁余寒 読人不_(ウ)知

91 夢さそふ鐘のひ、きもさえかへり有明の月に淡雪そふる

余寒風

92 梅か、は春に匂へる軒端より雪をさそひてさゆる朝かせ 兼愷

梅

93 花の色も霞みははてぬ春風にもる、里なく梅かほるなり 季虔

94 色に香にいとひよらん山本のあるしはうとき宿の梅かえ 氏輔

95 咲匂ふ梅のさかりの折からやしつか軒端も人にとはれん 昌憲

梅風

96 たかりと思ひわかも匂ふらん風のま、なるよもの梅か、 敬

昌貞

97 我か袖にうつすもあかぬ梅か、をよそにやさそふ軒の春かせ_(9・オ)

梅薫風

98 かたしきの袖にもしはし吹とめよ梅か、さそふ閨の春かせ

雪中梅

99 さく花は匂ひにしるししら雪の深き色そふ窓の梅かえ 親敬

100 あくるよのはつ花ならし梅かえの雪より匂ふ窓の春風 義武

月下梅

101 さく梅の花の光は霞むよに軒端の月の影匂ふなり 兼貞

句題五十首歌よみ侍りける中に、清月上梅花

102 うつりくる月も光や匂ふらん花の色そふ梅の木末に 親敬

春の夜友とちの許にまかり侍りける時

103 軒端なる梅の盛や深きよの霞める月にかほる春風 季休

暁更梅

104 有明の月もほのかに匂ひきてね覚の窓に霞む梅か香 親備_(ウ)

曙梅

105 鶯のこゑの匂ひもあらはれて梅かえしらむ窓の明ほの 兼愷

夜梅

106 さそひくる匂ひも遠く霞むよの月ほのかなる梅の下風 公

夜梅薫袖

107 深きよの夢のなこりの移香を袖におとろく梅の下かせ 親備

行路梅

108 柴人のたをらぬ袖も梅か、のうつるや深き山のした道 種定

109 行すりの袖さへ深き梅か、の余りて匂ふ野路の春風 兼愷母

月次歌の中に、梅誰家

- 65 花^をおそき梅の梢も鶯のなくねや春にまつにはふらむ 昌都
- 初鶯
- 66 谷深き古すの雪もとけぬらしはつねにかへる春のうくひす 親備
- 朝鶯
- 67 春寒きねくらの竹の霜朝になくねやとけぬその、鶯 季園 (7・オ)
- 68 花の色をとめてきつらん梅かえのあけ行窓に鶯のなく 兼愷母
- 夕鶯
- 69 花の色はや、くれ初て山本の霞にのこるうくひすの声 兼愷
- 雪中鶯
- 70 消あへぬ雪の木末にうくひすのまつ打とくる春の初こゑ 義近
- 月次歌の中に鶯出谷
- 71 谷深き雪より出て誰か里の春をとふらん鶯のこゑ 実比
- 野鶯
- 72 ほのかにも霞をもれて梅か、の匂ふ末野に鶯そなく 親敬
- 句題五十首歌よみ侍りける時、なく鶯のと云事を
- 73 霞む野の花のありかも尋ねみなく鶯の声のしるへに 読人不知
- 鶯鳴梅といへる心を
- 74 明そむる軒端の梅の花のえにおりもたかへぬ鶯そなく 氏輔 (カ)
- 或人の山荘にまかり侍りける時、鶯を聞て
- 75 すむ人の心の花になれきてやなくねもとくる窓の鶯 清憲
- 76 梅かほる外山の庵の夕暮に花の宿とふ鶯のこゑ 清方
- 若菜
- 77 たれも又老せぬ春のためしとや小松ひく野に若な摘らん 氏輔
- 78 老らくの心も春に打とけて雪間の若菜けふやつま、し 季虔
- 百首歌よみ侍りける時、雪中若菜
- 79 しら雪のふる野のわかなたれつみて我より先の跡をつくらん 季休
- 野若菜
- 80 若菜つむ袖さむからし乙女子かくるすのを、雪の村消 氏輔
- 81 たれかけさわかな摘らん春日野の雪間になひく袖のはる風 資祕
- 沢若菜
- 82 呉竹のふしみの沢の初若菜かはらて千世の春やつま、し 景雄 (8・オ)
- 五十首歌よみ侍りける時、磯若菜
- 83 もしほくむ暇ありてや浦人の浪かき分て磯菜つむらん 読人不知
- 百首歌の中に残雪
- 84 咲いてん花のゆかりとみ山木にまた春さえて残るしら雪 親敬
- 春の初つ方残雪を見て
- 85 春を浅み残る木末の白雪も心の花やまつさそふらむ 季虔
- 春の初にをのれかあやめ田の山荘にて
- 86 (後) いはまもる音にも春はしられけり軒端の山の雪の下水 兼愷
- 春歌の中に

月次歌の中に夕霞

44 真柴たく烟も春の色なれや山もと遠く霞むゆふへは

親備

55 行舟の帆影も消て海原の霞の波によはる浦風

貞如

山霞

45 雪きえし跡は霞の浅緑春にもれたる山のはもなし

氏輔^{〔ウ〕}

56 入日さす沖の小島はあらはれて果なく霞む春の夕波

季翹

46 白雪のふるの山辺の薄霞ほのかに春の名にや立ちむ

貞如

△(墨消一首、但し55番に配列換え)

鹿児島の住吉社奉納歌の中に

47 朝風の音を残して山のはの霞にきゆる松のむら立

実堅

57 吹わくる春の浦風跡見えてかすみもはてぬ沖つ白浪

兼愷母

富士の山の霞みけるを見て

48 時しらぬふしのたかねの白雪も霞みて春の色を見すらん

兼貞

58 浦浪の烟もふかく立そひてかすむや春のみるめなるらん
59 あま人の朝こく舟も立こめておほふ霞の袖のうら浪 読人不知

春の頃鈴鹿山をこえ侍るとて

49 ゆく末はたかのかの駒の鈴か山深くもかすむ関の下道

兼愷

60 漕出る跡はうもれてうら波の霞の底にうたふ舟人

親直

関霞

50 鳥のねはあけ行後の関の戸も霞にとつる逢坂の山

清憲

△(墨消詞書)
△(墨消歌一首)

橋霞

51 明渡るよさの浦風音たえて浪よりかすむ天のはし立

親敬

61 ゆたかなる春の光にさは姫の霞の衣かけてほすらし

義智

瀬田の橋を渡り侍りける時

52 はるく／＼と行かふ人の袖までも霞み渡れるせたの長橋

助門^{〔ウ〕}
(6・オ)

62 明初る春の光にさそはれて谷の戸いつるうくひすの声 慈誠君

河上霞

53 水烟立そふ色に朝川の春はふかしと猶かすむらむ

景雄

63 しら雪のふるすを花に住かへて軒端の梅にうつるうくひす 保定

霞中滝

54 山深き雪けの水も増るらん霞の奥にひく滝津瀬

□朝

64 春浅き竹のは山にうつりきてまた里なれぬ鶯の声 景雄
鹿児島の住吉社奉納の中に同じ心を

海上霞

海辺霞

月次歌の中に浦霞

霞隔舟

月次歌中に霞春衣といふ事を

鶯

- 21 初春のはつねをけふとしら雪のふるす出てや鶯のなく 義□
- 初春
- 22 佐保姫の霞の衣きのふけふまたうらわかきはるの山のは 季休
- 23 山のははさえし雪けの雲もなしけさより霞む春の光に 季休
- 初春関
- 24 はるく／＼と春やきぬらんあつまちの空は霞の関もへたてす 季休
- 春のはしめの哥よみ侍りける中に
- 25 浦風ものとかになりて塩かまの烟や松にまつ霞むらん 親備
- △（墨消一首）
- 元日のあしたによりみ侍りける
- 26 萬代の末も遙に契りをか三つのはしめの春を迎へて 兼□
- 毎家有春
- 27 打かすむ民のかまとの烟にもゆたかなる世の春は見えけり 季虔
- 家々翫春と云事を
- 28 のときさは□はらぬ春かたか宿も花鶯のおなし色音に 景德公
- 風光處々生
- 29 峯の雪谷の氷も春の日の光のとかに今やとくらむ 親直
- 春風春水一時来
- 30 打出る浪にも花やいそくらん氷ふきとく池のはるかせ 季虔
- 氷解
- 31 朝日かけめくるかたへは解そめてこほりこほらぬ庭の池水 親暁
- 32 とけそむる砌の池のひも鏡朝日も春の影うつすらん 智昭
- 春風解氷
- 33 打とくる池の氷のひまとめて水もみとりにかへる春かせ 氏輔
- 五十首歌中に春水
- 34 山水の氷も春にとけ初てこそその落葉や又さそふらむ 清園
- 百首歌よみ侍りける時子日
- 35 いく千世もためしにひかん姫小松心をへの春のはつねに 親敬
- 36 初春の初子の小松引うへて二葉に千世の陰や契らん 清憲
- 子日松
- 37 いほ近き野への小松を引からにしつも子日のためしをやる 氏輔
- 霞
- 38 さほ姫の霞の衣きさらきの空ものとかに立かさぬらむ 智昭
- 39 炭かまのこそその烟もたえくに残るや霞む小野の山本 季翹
- 40 へたてなき春の心と野も山も同じ光に霞み行らん 景雄
- 晚霞
- 41 あけそむる光をこめて山のはに霞色こき横雲のそら 公典□
- 朝霞
- 42 朝な／＼花まつ空にいつる日の匂ひもふかくかすむ山のは 季虔
- 43 長閑なる春の光をみかさ山さすや朝日の影も霞みて 季休

（4・オ）

（5・オ）

浪の藻屑 卷之一

春部

年内立春

公貴典
公典

1 ゆたかなる恵を四方にかさねてや年にふた、ひ春のきぬらん

△(墨消一首)

2 天津空残れる冬の日影さへ霞へたて、春のたつらし

親敬

百首歌よみ侍りける時、歳中立春

3 音羽山雪けなからにかすむ也年のこなたに春や立らん

季虔

立春

4 天の戸の長閑に明る朝霞春の色とや立はしむらん

公□

5 明る日の光もそひて朝霞匂へるそらに春やたつらん

親敬

智昭

6 風さえしきのふはこそのはけしさもけふあらたまる春は来にけり

立春暁

「3・オ」

7 庭鳥のこゑものとかに明る関の天の関戸を春やこゆらん

兼愷

8 夜を残す空より春や立ぬらん霞初たるあか星の影

清憲

立春朝

9 あらたまの年立かへる朝日影かすむ光ものとかなるそら

凉相君

10 いつくにも春きにけらし天の戸のあくる光そよものにのときき

貞如

立春霞

11 九重の都の外にたつ春もはてなき空の霞にそしる

読人不知

立春山

12 しら雪に目なれし山もけさよりは春たつ色に霞みそむらん

季虔

13 雲井より春立ぬらしふしのねの烟をこめてけさ霞む也

氏輔

14 出る日の天照る影ものとかにて神路の山に春や立らし

昌貞

立春川

15 山川の氷なかる、音すなりみせきの浪も春や立らん

公貴典
貴典
「ウ」

春立けるあした梅の花の咲けるを見て

16 けさよりは軒端の梅も咲そめて花の春たつ風かはるなり

清憲

早春霞

17 松浦瀾八重の塩路の朝霞もろこしかけて春やたつらん

季融

百首歌よみ侍りける時、関路早春

読人不知

18 きのみまて雪にとちたる関の戸も春にあけゆく逢坂の山

早春海

19 梓弓春立ぬらし沖つ浪八十島かけて霞たなひく

景雄

△(墨消一首)

早春鶯

20 けさよりは声いそくらん鶯のねくらの竹の千世のはつ春

季虔

浪の藻屑

神書

上

春夏
秋冬

浪の藻屑

上
春夏

二冊之内

浪の藻屑序

石はしるたる水のさとに。山川のはやくの世より伝へそめて。

ふりにし人の。折にふれ事に臨み。よみをける歌どもいとすくなからず。過つる文化九つの年に。末川周山君。その数 ば

りをなん拾ひたまふて。浪の下草となづけ給ひ。それよりこの

かた。はた年余りの春秋をへて。花にたはれ月にうかる、の

言の葉。今又爰かしこにちりつもりたり。さるをむなしきみ谷

がくれのこのもとに。あだに朽果ん事のいとかひなく。かつは人々の。

見る物きく物につけて。よろづいひだせるなさけの程をも。見

そなはしたまはんため。かの下草の跡にならひ。それにもれたる中よ

り。今迄のあいだの哥。ひろく集め。あまねくとり。題をつらね部

を分ち。拙きみつからのをも。数々かきつけて奉れよとの。わが

典公

君のかたじけなき仰をなんかうふりぬ。をのれ此年比。かしこき

(1・オ)

飛鳥井の流の末に。わが心をそむるといへども。もとより

をろかなるざえのうつはもて。いかで限なき底の程を。露

ばかりだもくみ知侍らんや。ましてやまと歌の道の深き浅きを

さぐり。詞の林の花と実とをえらばん事は。いとまたふとき

久堅の雲の上なるわざに侍れは。かくあまさかるひなのあら野の

果にては。賤がさ、めのかりそめにも。思ひ弁ふべきになんあら

ざりける。か、れば春の田のかへすも。退いては。おほけなき身の

憚をかへりみるといへど。進みては。うけたまはれるむねに背き

たてまつらん事を恐れて。つゐにをのれがこのめる所のまに。

浜のまさご数かさなり。磯辺のみるめかきよせつ。奉れる

事になんなりぬ。ゆたかなる春の恵を仰ぐよりはじめて。

波風の静なる御代を祝へるにいたるまで。すべての歌。ふた

ち、むつの巻とす。これをのづからよそ人の前に押ひろめて。

われは顔せんとにあらず。たゝわが里の内のもてあそびにそなんて。

をひくか、るわざをもまねび。か、るこ、ろざしをも。つぐべき

人のいできたらんは。此所の行末かけて。まさきのかづら長きさい

はいならむかしと。おもほし給へるおほん心ばへになん。其ことはり

をはじめにしろし。浪のもくづとなづけ侍るも。みなこれ仰ごと

にしたがひてなり。此まきの中をいて。難波津のあしとよし

とをわかつともろこし人の玉と石とをあやまれるたぐひのみ

おほからんは。もとよりやつがれが。とがのまぬかれざる所なめれば。

後瀬の山の後に見給はん人は。今來の嶺の今をかんがへ。糺の杜

のたゞしあらためたまは。こよなきたまものならんかし。

天保六年乙未冬十二月

藤原兼愷 謹書

題簽に、上巻には「浪の藻屑^{艸書}上^{春夏}」^{秋冬}、下巻には「浪のもくづ 下」と記す。上下巻共、扉に表紙と同じ題名を記し、扉の裏に「二冊之中」とある。上巻には巻一―巻四までの四季をおさめ、はじめに「天保六年乙未冬十二月」の兼愷の自序をおく。詞書は二字下げ、歌は一行書で、一面原則として十三行書。歌の下に作者名を記す。下巻には巻五恋・巻六雑をおさめる。巻末に各巻の歌数、巻中姓名（作者名及び入集歌数）一覧を記し、その後に「天保六年乙未十二月 伊集院兼愷^上」と署名する。さらに後に、前記の如く、公の仰せにより記したとする「天保九年戊正月 藤原氏輔謹書」の氏輔の跋文、並びに祐喬の畢詞を記す。最終七四丁表には「蘭齋」との署名がある。

本資料の翻刻をお許し下さった垂水教育委員会、また翻刻・調査に関して種々御世話頂いた町田満男氏に心から御礼申し上げます。

翻 刻

凡 例

本文は、原本を忠実に翻刻することを旨としたが、読解の便をはかるため次の要領にしたがった。

- (1) 文字はおおむね現行通用文字に改めた。しかし当時慣用の艸・寐・烟など、わずかながらそのままの文字を用いたものもある。
- (2) 清濁、仮名遣いは原本通りであるが、ミ・ハ・セなどの表記も特に片仮名で残すことはせず通行平仮名で統一した。疑問を感じる所も敢えて原本通りとしたが、（ママ）を付したところもある。
- (3) 詞書・歌・作者名の部分的墨消し訂正（兼愷自筆の）については、訂正された本文で記した。但し、一首全体を墨消した箇所や歌を差し替えたところには、その旨（ ）を付して注記した。なお版列を変える印の兼愷によって注記された「前」「後」の文字も、（ ）を付してその位置に示した。
- (4) 叙文・跋文及び詞書の改行は、すべて原本通りとした。
- (5) 詞書の長文にわたるところには読解の便のために句読点を付した。但し、序・跋の句点ならびに濁点は、原文に記された通りである。
- (6) 虫損のため部分的に損なわれていても残った部分で判読可能な文字には□を付し、⬢のような形で示した。また判読不可能なほどに損なわれている箇所は□□で示した。
- (7) 原本では、作者はすべて歌の下に記されているが、歌の字数が多く作者名を記しかねる場合については、便宜上、詞書の下に記した。
- (8) 丁付は、^(1・オ)（ウ）のように簡略にした。

浪乃藻屑序

[illegible]

四季、恋歌にみられる風雅はもとよりのことながら、ことに雑の部では、雑・離別・羈旅・哀傷・神祇・釈教・賀の七つに分ち、豊富な内容を含めており、或は歴史に、或はまた源氏物語や平家物語に、漢籍や經典に題材を求めて詠んだものや、またおさなき孝子のあわれな事実譚に惜しみなくスペースをさいて記しとどめその感動を記すなど、歌をたしなみ物のあはれを解した垂水の人々の情・教養の程と共に、人々の日常生活の中に深く根づいた歌の道であったことをしのばせる豊かなものとなっている。

当主貴典公をはじめ人々は、飛鳥井雅光卿に師事した。本書も成立後雅光卿に奉られ「げにも兼愷が、あまた年歌の道をな図ひまねび、こゝろを深く染けるほども、此巻くの筆に顯れて、いとく感じ給ふる」との仰せをこうむった由が、天保九年に記された氏輔の跋文に記されている。

因みに、本歌集の作者一一五名中、文化九年成立の周山編『浪の下草』の作者と重なる作者数五一名、さらに文政十一年成立の薩藩の『松操和歌集』の作者中にその名のみえるもの三一名を数えている。なお本書の中に「読人不知」と記された歌一四五首がある。特に上巻ではもともと「景之」と記名されていたもの九八首もが、その名を墨消にして「読人不知」と訂正されていることに注目される。ただ中に、上巻「30才・ウ」の三九六・四〇二番、44才の五八七番には「景之」と記されてはいるが、下巻巻末に記された「作者名一覧」の中にはその名を見出しえないところ

ろからすれば、訂正し落したものであろう。「景之」なる人物は「桑波田龍瑞景之」として『浪の下草』に一首入集し、また「桑波田竜雲景之」として『松操和歌集』にも見えている。また「桑波田景之」として『廃鹿詩稿』の付録に漢詩一首、『垂邑詩集』に漢詩数首が入集しており、『廃鹿詩稿』及び『垂邑詩集』の現存本（現垂水市教育委員会蔵）のもとの所持者でもあった。これらが同一人と考えるか否かについては必ずしも定かではないが、その可能性は大きいと思われる。漢詩文・和歌両道に通じた人物であったと推察されるのであるが、「景之」の名を「読人不知」と訂正して記さねばならなかった理由についてはなお詳かではない。本書は兼愷の草稿本ともいうべきものであろう。一たん記し終えた後、再び推敲訂正・配列変え、作者名訂正などに心を砕いた様子が窮える。ことに上巻には墨消がかなりみられ、訂正の手が入っている。編纂時の殆んど最終過程に近い一端をのぞかせているとみてよからうか。末尾に、前に少しふれたが、後にこれも公の仰せにしたがって記しとどめたという、天保九年正月付の氏輔の跋文と、また日付は詳かではないが、祐喬の畢詞が記されている。

本書は伊集院兼愷自筆本で、垂水市教育委員会の蔵本である。

六卷二冊。現在は補修し新表紙を付け、綴じなおされているが、原本の形は、上下巻共に縦二三、四cm×横一六、七cm、青紙表紙で、左肩の

垂水の文学 (三)

『浪の藻屑』(垂水市教育委員会蔵)

——南九州の国文学関係資料(十九)——

福井 迪子

垂水の歌集についてみれば、『研究年報』第十五号に翻刻紹介したごとく、早く文化九年(一八一二)正月、末川周山の手によって垂水地方のみの歌を集めた歌集『浪の下草』が、その第一集として編纂されており、この時点における一地方での歌集編纂は極めて注目される事実であった。そして二十数年を経た天保六年(一八三五)、伊集院兼愷によって『浪の藻屑』が再び垂水地方の歌集第二集として編まれたのであった。すなわちここに紹介しようとする歌集であるが、その間の周辺における和歌の実情をみると、注目すべきは、周山による『浪の下草』編纂に少なからぬ刺激を受けたとみられる薩摩藩での、島津藩全体(薩摩・大隅・日向・琉球)に及ぶ大部な歌集『松操和歌集』が文政十一年(一八二八)に編纂されたことである。『浪の下草』成立後十六年目のことであった。そして、それが垂水出身者川畑平太左衛門篤実によって成された大事業であったことも、垂水の文芸、またその歴史を考える上で見過ぐせないこと

でもあろう。

さて、天保六年に著された本書は、編者伊集院兼愷の自序に

(前略)文化九つの年に末川周山君その数〔 〕ばかりをなん拾ひたまふて、浪の下草となづけ給ひき。それよりこのかたはた年余りの春秋をへて、花にたはれ月にうかる、の言の葉、今又爰かしこにちりつもりたり。さるをむなしきみ谷がくれのこのもとにあだに朽果ん事のいとかひなく、かつは人々の見る物きく物につけて、よろづいひいだせるなさけの程をも見そなはしたまはんため、かの下草の跡にならひ、それにもれたる中より、今迄のあいだの歌、ひろく集め、あまねくとり、題をつらね、部を分ち、拙きみづからのをも、数々かきつけ奉れよとの、わが君貴典公のかたじけなき仰をなんかうふりぬ

と、その編纂に至る経緯・趣を述べている。垂水藩の当主島津貴典公の御意向を体しての編纂の旨である。

その構成は、卷一 春・卷二 夏・卷三 秋・卷四 冬・卷五 恋・卷六 雑(雑・離別・羁旅・哀傷・神祇・釈教・賀)の六部立を立て、歌数約二千首——但し、実数は、春部三四六首。夏部二〇九首(あるが二首少)。秋部三五四首(三五五とある)。冬部二二二首(二三五とある)。恋部二七一首(二七〇とある)。雑部五八五首(五八四とある)。したがって総計一九九七首となる。墨消や歌の差し替え等推敲の後がみられるので数に変化を来たしたものと思われる——作者数一一五名に及ぶ、大部なものである。